

**地域資源を活かしたシビックプライドの醸成に関する
調査研究報告書**

上越市創造行政研究所

平成 30 年 3 月

はじめに

地域づくりにおいて画一的な成功モデルが存在しない中、地域の過去に学び、現在を知り、未来を考え、計画と実践を繰り返すプロセスは、政策形成の基本といえます。特に本格的な人口減少時代において、地方都市が生き残っていくためには、地域の過去や現在を踏まえてその個性を磨き、魅力を高めることがますます重要となっています。

まちの個性や魅力は、一朝一夕に生まれるものではありません。個性を磨くためには、これまでの長い歴史の中で育まれてきた特徴や、その特徴を形作ってきた「地域資源」に着目することが第一歩といえるでしょう。

そのような地域資源の存在を一人でも多くの人々が認識することは、地域に対する愛着・誇りの醸成や、地域づくりの方向性のゆるやかな共有につながるとともに、それらが地域内外に発信されることによってこの地域のファンやサポーターを生み出すなど、地域づくりの原動力となることが期待されます。

特に上越市の地域づくりを考える際には、「上杉謙信」や「日本三大夜桜」などの“一品”に着目したり、「際立った特徴は特にない」あるいは「海に山に大地に何でも揃っている」といった地域の捉え方にとどまらず、地域資源の特徴を客観的視点から深掘りし、過去から現在に至る経過を物語（ストーリー）として捉えることによって、未来への手がかりが見えてくるものと思います。たとえば、地域の特徴や成り立ちについて、過去の政治・経済、自然環境、地形・地質との関係にまで遡って解説する NHK の「プラタモリ」などは、物語を表現する好例といえるでしょう。

このことから本研究では、まず上越市の特徴的な地域資源の情報を整理しました。第2章では、全国的な動向と比較することで客観的に説明可能な特徴に着目しています。地域資源の中には、その特徴を定量的に説明しづらいものや他との比較によらない絶対的な素晴らしさを持つものも数多くありますが、ここでは地域づくりへの導入的情報としての説得力や説明のしやすさ、比較を通じて地域を知る視点を重視するため、可能な限り客観性にこだわりました。また、地域全体としての特徴を見いだす手がかりとして、各地域資源の特徴をもたらした背景・要因や、その特徴が地域に与えた影響についても提示し、地域資源同士の関係性を表現するよう努めました。

取りまとめに際しては、各分野の地域資源に詳しい地元の有識者などへヒアリングを行うとともに、可能な限り公的機関や各種研究会の資料等を参照しました。一般的に言われている特徴であっても、その事実確認は予想以上に難航し、ご協力いただいた方々にも多大なご苦勞をおかけすることとなりました。この場をお借りして、心よりお詫びと御礼を申し上げます。

一方、一部の地域資源についてはさらなる調査の余地があるものや、特徴の詳細や要因について一定の結論を出すことができず、本報告書への掲載を見送ったものもあります。したがって今後とも継続的な調査研究が必要であると考えておりますが、冒頭で述べた地域づくりに対しては一定の役割を果たせるものと考え、暫定版として公開するものです。

ところで、これらの地域資源情報を住みよい地域づくりに活かそうとする場合、単に地域資源についての学習や地域づくりの実践を意識啓発的に呼び掛けたとしても、「あまり関心がない」あるいは「時間的・精神的余裕がない」など考える人が大半ではないかと思えます。

一方、私たちのまちを「住み良い場所にしたい」と願い、ささやかなことでも「何か貢献できれば」と考える人々も少なくないように思います。そのような人々が、魅力的な地域資源の存在に気づき、日々の家庭生活や余暇活動あるいは経済活動の中に、暮らしの豊かさを求める営みと魅力的な地域資源を守り育む取組の接点を見いだすことができれば、それは個人にとっても地域にとっても幸せなことといえますし、そういった一人ひとりの暮らしの積み重ねが持続可能なまちづくりであるとも考えます。

このことを踏まえ、第3章では日々の暮らしを通じた地域づくりに必要な「学習・思考・行動」のプロセスを支援するとともに、その原動力となる愛着や誇り、楽しさややる気などを生み出す「交流の場」の形成を提案しています。検討に当たっては、近年地域づくりの分野で注目されているシビックプライドやプラットフォームなどの考え方を参考としました。

本報告書が、上越市の特徴についての学習や地域資源を活かしたまちづくりを促進する一助となれば幸いです。

平成 30 年 3 月

上越市創造行政研究所

地域資源を活かしたシビックプライドの醸成に関する調査研究報告書 目次

はじめに

第1章	本研究の趣旨	1
1-1	本研究の目的	3
1-2	本報告書の構成	3
1-3	本研究の視点（キーワード）	4
	(1) 学習材料としての地域資源情報	
	(2) 情報発信に資する地域資源情報	
	(3) 地域づくり人材の発掘・支援	
第2章	上越市の特徴的な地域資源情報	13
2-1	地域資源の分類	15
	(1) 地域資源の分類項目	
	(2) 地域資源の関係性	
2-2	分野別にみた上越市の特徴	17
	(1) 地形・地質	
	(2) 位置（地域区分）	
	(3) 気候	
	(4) 森林	
	(5) エネルギー資源	
	(6) 交通	
	(7) 農業	
	(8) 食品産業	
	(9) 製造業（食品産業は除く）	
	(10) 建築	
	(11) 教育・福祉	
	(12) 芸術・文化	
2-3	上越市の特徴的な地域資源についての考察	58
第3章	地域資源情報を活かした地域づくり人材の発掘・支援方策	71
3-1	基本方針	73
	(1) 学習－思考－行動の循環プロセス	
	(2) 循環を強化する交流の場（プラットフォーム）の必要性	
3-2	取組方策	77
	(1) 学習から思考を意識したプラットフォームの形成	
	(2) 思考から行動を意識したプラットフォームの形成	
	(3) プラットフォーム形成上の留意点	
3-3	展開方法	86
第4章	今後の課題	89
参考資料		93
	まちづくり職員トーク実施記録	

第 1 章 本研究の趣旨

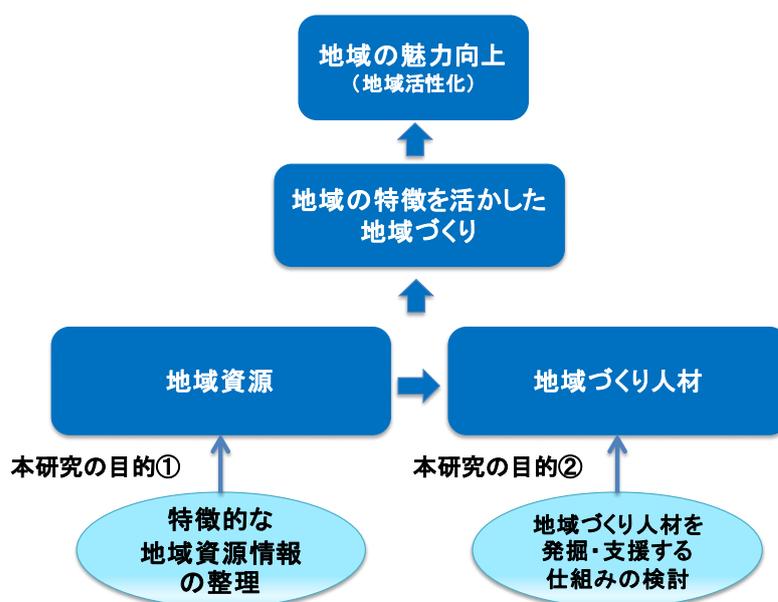
第1章 本研究の趣旨

1-1 本研究の目的

本研究では、当市の個性や魅力を形作ってきた「地域資源」に着目する。一人でも多くの人々が地域資源の存在を認識することは、地域に対する愛着・誇りの醸成や地域づくりの方向性のゆるやかな共有、地域内外への情報発信を通じたファンやサポーターの増加など、地域づくりの原動力につながると考えられることから、そのための基礎情報として上越市の特徴的な地域資源情報を整理する。

また、持続可能な地域づくりが実現するためには、地域資源や地域づくりに関する学びとともに、それらが主体的かつ創造的な地域づくりを目指す思考や行動と結びつくことが重要である。ここでは、一人ひとりの余暇活動や経済活動など、日々の暮らしを通じて地域資源の認知や保全、創造的な活用が推進されることを念頭に置き、そのような地域づくり人材を発掘・支援する交流の場（プラットフォーム）のあり方について調査研究を行う（図表 1-1）。

図表 1-1 地域資源を活かした地域活性化のイメージ



1-2 本報告書の構成

第1章では、本研究の目的のほか、地域資源情報を整理する上で参考とした視点と、地域づくり人材の発掘・支援の仕組みを検討するに当たり参考とした考え方を整理する。

第2章では、上越市の特徴的な地域資源情報について整理を行う。整理に当たっては、県内および全国的な動向を踏まえた中で可能な限り客観的に説明できる特徴や、まちの形成に大きく影響した特徴を取り上げ、その背景・要因、地域に与えた影響を取りまとめる。

第3章では、地域資源を活かした地域づくり人材を発掘・支援するために必要な仕組みとして、学習・思考・行動の循環と循環を強化する交流の場（プラットフォーム）に着目し検討する。

1-3 本研究の視点（キーワード）

(1) 学習材料としての地域資源情報

本研究における地域資源情報に期待する一つの役割は、地域づくりの基礎となる学習材料となり、地域に対する愛着と誇りの醸成や地域づくりの方向性のゆるやかな共有に貢献することである。

このことから、情報の整理に当たっては、これまで先人が蓄積してきた郷土史研究の成果を活用するとともに、地域づくりの分野で注目されている「地域学」や「地元学」、「シビックプライド」などとの関係性を意識し、それらの考え方を参考にした。

① 「郷土史」との関係

郷土史とは、地域の先人の業績や文化・習俗の由来などを明らかにしていくもので、郷土愛を育むために活用されることも多い。郷土史の集大成とも言えるものに各自治体が作成した「市町村史」があり、上越市では、市町村合併前の14市町村すべてにおいて作成されている。また、郷土史家による論文や研究会としての出版物、あるいは小中学生向けに作成された社会科の「副読本」など、多くの参考資料が残されている。

本研究は、これら郷土史情報の中から当市の特徴的な地域資源をピックアップし、その因果関係を含めて概括的に整理するものであり、郷土史への導入的役割を果たすことも念頭に置く。一方、当市の地域資源の特徴を客観的視点から見いだすためには、郷土史の内容にとどまらず、全国または県内の状況と比較する作業も別途必要である。

② 「地域学」との関係性

「地域学」は、地域をどう捉えるかによりイメージする内容が様々である。固有の個別地域を対象としたもの、公民館などで住民が自らの地域を学ぶもの、大学で設置された地域系学部・学科が主導するものなどがある。

「地域学」あるいは「〇〇学」（〇〇には「上越」など地域の名称が入る）を標榜する事業は多岐にわたっており、郷土史をベースとした連続講座、公民館における地域学習活動、生涯学習事業と大学の地域貢献事業との連携、公益団体などの地域貢献活動の一環として行う事業、ご当地検定などがあげられる。

また、地理学の一分野である「地誌学」とほぼ同義と見られることもできる。地誌学とは、「特定地域における自然（地形・気候・水文など）と人文（都市・経済・歴史・交通など）の諸事象の相互関係を総合的に考察し、地域的性格を究明すること」¹とされる。

本研究における「地域学」とは、単に地域資源に関する知識量を問うものではなく、未来志向をもって地域づくりに役立てることを目的としており、地域の特徴に関する学びを入り口としながら、地誌学的理解を深めるものと捉えていることから、ここで整理する地域資源情報は、この地域学の一部を構成するものということもできる。

③ 「地元学」との関係

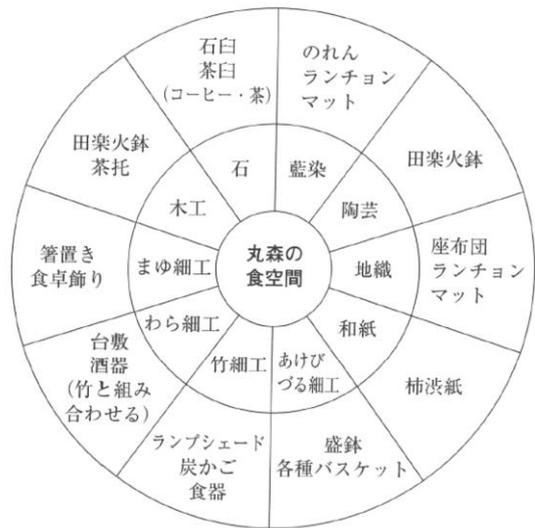
地域学に似た言葉として「地元学」がある。地元学は、地域学が展開する中で誕生した住民が主

¹ 立正大学地理学科ホームページ（地誌学） <http://rissho-map.jp/bunya/chishi.html>

体となった地域学の一例として取り上げられることもある。また、地元学の分野において著名な結城登美雄氏は「地元学は理念や抽象の学ではない。地元の暮らしに寄り添う具体の学」²であるとし、吉本哲郎氏は「自分たちであるものを調べ、考え、あるものを新しく組み合わせる力を身につけて元気をつくることが地元学の目的」³と述べている（図表 1-2）。

このことから、本研究においては、地域の価値を学び、自分事として地域づくりに関わっていくプロセスを示したものが「地元学」であると理解し、地域資源情報を活かした地域づくり活動に主体的に関わるための学び方として参考にする。

図表 1-2 地元学の一例
（地域資源を組み合わせることで食空間をデザインした事例）



出所) 結城登美雄「地元学からの出発」、p. 101、2009

ただし、ここで言う「地域」の単位は、本研究が対象とする上越市のような広域的自治体というよりも、生活に身近な地域コミュニティの方が馴染んでいる。また、地元学のキャッチフレーズである「ないものねだりよりも、あるものさがし」が表すように、必ずしも他地域との比較に基づく客観的な特徴、すなわち相対的な価値というよりも、「(対外的な評価に関わらず) 私はこの地域資源を素晴らしいと思うし、大切にしたい。」という絶対的な価値を見だし、育てていくプロセスとも言える。

すなわち、全市的かつ客観的な価値を見いだす「地域学」と、地域コミュニティ単位の主観的な価値を見いだす「地元学」とは、地域づくりのための学びという目的は同じくしながらも相互補完関係にあると捉えるものとする。

④ 「シビックプライド」との関係

シビックプライド (Civic Pride) は、「都市に対する市民の誇り」などと訳すことができるが、いわゆる「郷土愛」や「まち自慢」にとどまらず、『『都市をより良い場所にするために自身が関わっている』というある種の当事者意識を伴う自負心』⁴と定義される。また、旧来型のコミュニティのように閉ざされた集団の構成員が持つ意識とは異なり、自由さや自律性を持つ点に特徴がある。

本研究では、地域への愛着・誇りをもって、主体的に地域づくりに取り組む原動力を表す概念として、このシビックプライドを位置付ける。

また、シビックプライドを醸成する手法は、市民参加の都市計画を推進すること、簡潔なメッセージやデザインを通してまちへの共感・理解を促すこと、交流や活動が生まれる場所をつくることから始めるなど多様であり、全国の自治体でも様々な用いられ方をしている。(図表 1-3) が、本研

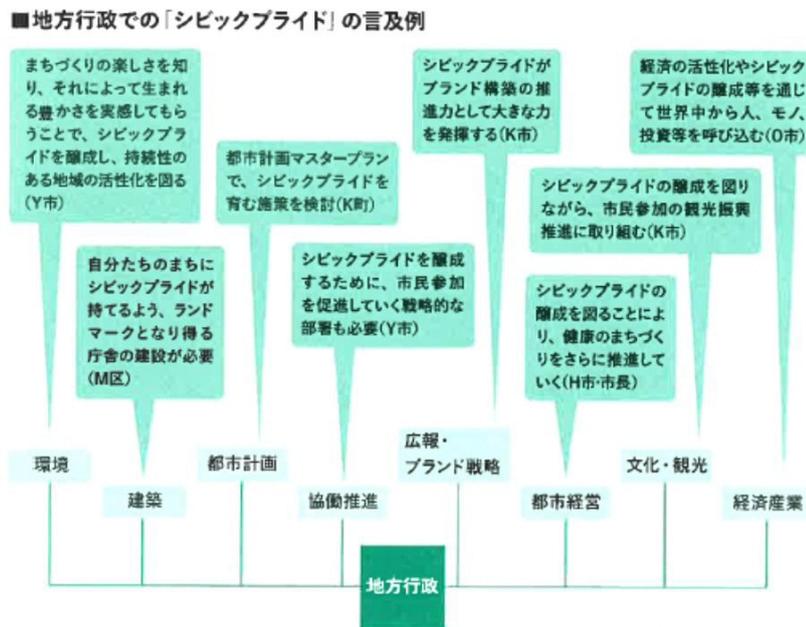
² 結城登美雄「地元学からの出発」、p. 14、農文協、2009

³ 吉本哲郎「地元学をはじめよう」、p. 22、岩波ジュニア新書、2008

⁴ 伊藤香織、紫傘田伸子「シビックプライド2」、p. 126、宣伝会議、2015

究ではあくまでも地域資源を学ぶことからアプローチする手法について着目する。

図表 1-3 地方行政でのシビックプライドの言及例



出所) 伊藤香織、紫牟田伸子「シビックプライド2」、p.127、2015

(2) 情報発信に資する地域資源情報

地域資源情報に期待するもう一つの役割は、地域の情報を地域内外に広く発信することによって、この地域のファンやサポーターを生み出すとともに、その存在を通して市民の愛着・誇りが育まれることである。情報の整理に当たっては、近年様々な自治体で取り組まれている「地域ブランド」、「地域ストーリー」、「シティプロモーション」との関係性を意識し、それらの考え方を参考にした。

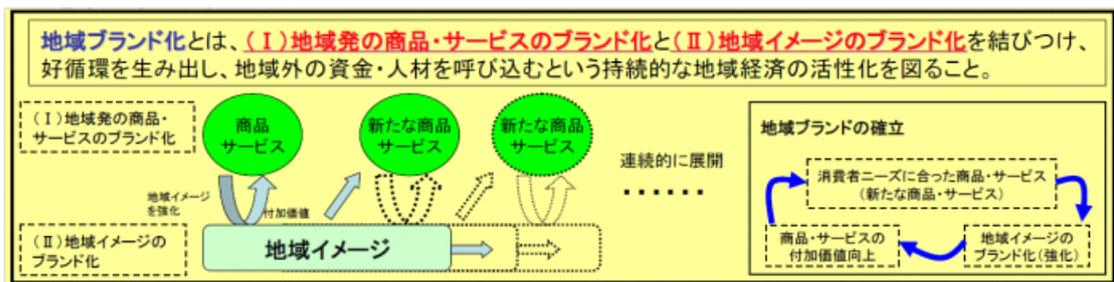
① 地域ブランドとの関係

地域ブランドの定義は、必ずしも一様ではないが、内閣府（2017）では「他との差別化を消費者に認知させ、商品・サービスひいては地域そのものの付加価値を高めようとするもの」⁵としている。

こうした地域ブランドが重視される背景の一つに、各地域から生み出される商品サービスや地域全体の付加価値を高め、市場からの信頼を得ることが地域活性化につながるという考え方がある（図表 1-4）。

本研究は、地域ブランドの構築手法を提示するものではないが、特産品や観光地など個別の地域資源の特徴にとどまらず、上越市総体としての特徴を見いだすことについては、地域ブランドの概念と通じるものがある。したがって、今後地域ブランドの検討を行う機会があった場合は、本研究の成果が有用な基礎資料となることを念頭に置く。

図表 1-4 地域ブランド化の概念図



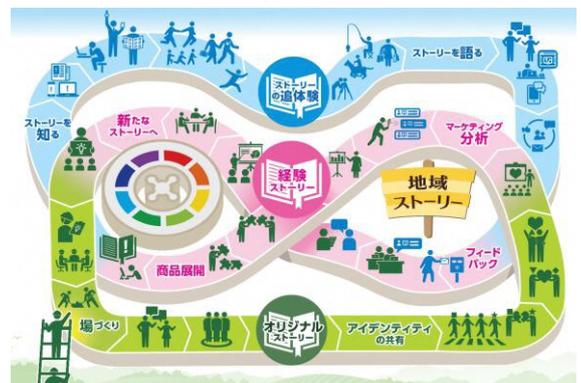
出所) 経済産業省「第1回日本ブランド・ワーキンググループ」資料

② 地域ストーリーとの関係

近年、複数の地域資源を結びつけ、地域のストーリーを見出し活用する取組が観光や文化の分野で活発化している。

経済産業省では、観光を通じた地域経済活性化を目的として、地域の自然・文化・生活・産業が持つ独自のストーリーを見つけ出し観光に活かす「観光地域づくり」を、文化庁では文化財や伝統文化を通じた地域の活性化を目的として、歴史的経緯や地域

図表 1-5 観光地域づくりにおける地域ストーリーのイメージ



出所) 経済産業省ホームページ

⁵ 内閣府「地域の経済 2017—地域の「稼ぐ力」を高める—」、p.63

の伝承、風習などを踏まえたストーリーを基に有形・無形の文化財をパッケージ化し効果的な情報発信等を進めていく「日本遺産」を推進し、多くの自治体が取り組んでいる。

また、大地（ジオ）、動植物や生態系（エコ）、人（ヒト）の3つの要素のつながりをストーリーとして楽しく知ることから、教育や観光にも活用する「ジオパーク」などに取組む自治体も見られる（図表 1-5,6,7）。

これらに共通した、地域ストーリー作成の背景には、他地域との違いを明らかにし、地域ブランドを確立することにより観光集客の拡大を望む地域が多いことや、地域住民の自地域に対する愛着や誇りへの自覚を促す側面があると指摘されている⁶。

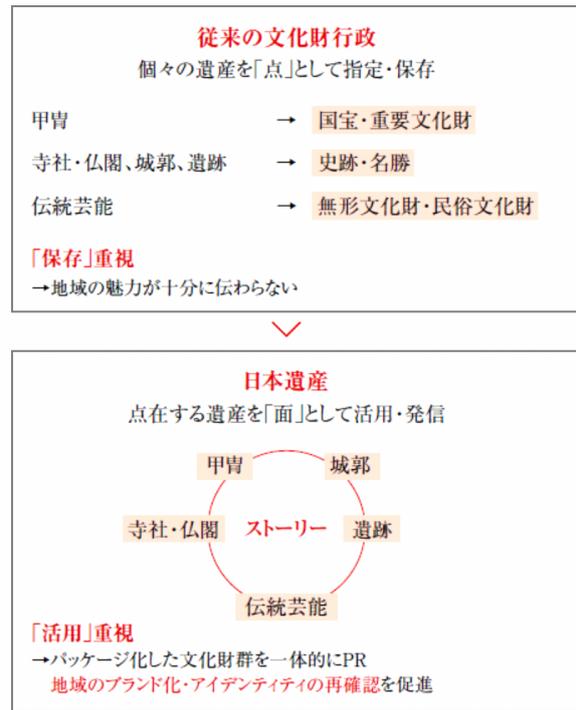
本研究では、地域資源の個別情報をきっかけとしながらも「ストーリー（物語）」として捉えることが重要と考えており、この点は上記の考え方式と同様である。本研究で取りまとめる地域資源情報は、地域ストーリーそのものではないが、特徴とその因果関係を含めた情報を有することから、地域ストーリー作成に必要な基礎資料となるよう整理を行う。

③ シティプロモーションとの関係

シティプロモーション（City Promotion）は、直訳すれば都市の販売促進活動であり、シティセールスを含む概念と見ることもできる。近年多くの自治体で注目を集めているが、その捉え方は「地域住民の愛着度の形成」、「地域売り込みや自治体名の知名度の向上」、「地域のイメージを高め経営資源の獲得を目指す活動」⁷など様々であり、先に述べた地域ブランドの構築やシビックプライドの醸成が位置付けられることもある。（図表 1-8）。

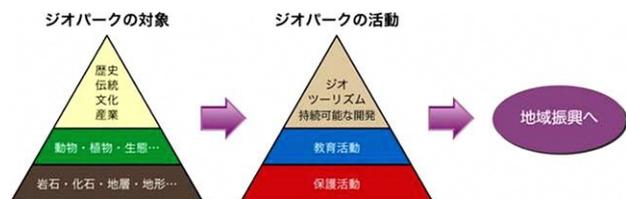
また、自治体にはない「営業」という要素を民間企業等の活動から学ぶため、全国的なネットワークやサミットなどを通じた情報収集活動も見ら

図表 1-6 日本遺産の概念



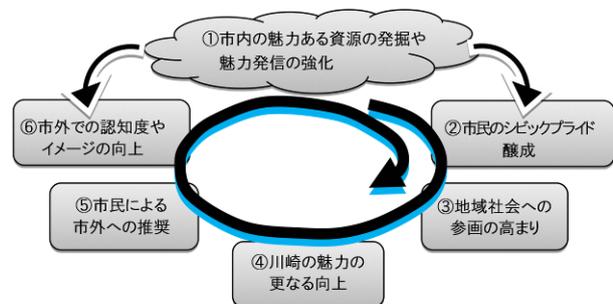
出所) 文化庁「日本遺産パンフレット」

図表 1-7 ジオパークの概念



出所) 日本ジオパークホームページ

図表 1-8 シティプロモーションの好循環



出所) 川崎市シティプロモーション戦略プラン（2015）

⁶ 丁野朗「日本遺産の可能性と期待」、p. 27-29、文化遺産の世界 vol. 26、2016

⁷ シティプロモーション自治体連絡協議会ホームページ <http://www.citypromotion.jp/>

れる。

本研究では、シテプロモーションの実施を必ずしも推進するものではないが、今後そのような検討を行う場面があった場合には、有用な基礎情報となるよう努める。

(3) 地域づくり人材の発掘・支援

本研究では、地域づくり人材の発掘・支援の仕組みを検討するに当たり、地域づくりに必要な資本や基盤として注目を集める「ソーシャル・キャピタル」「プラットフォーム」「フューチャーセンター」との関係性を意識し、それらの考え方を参考にした。

① ソーシャル・キャピタル

ソーシャル・キャピタルは、社会的共通資本などと訳され、提唱者であるR. パットナムは、「人々の協調行動を活発にすることによって社会の効率性を高めることのできる『信頼』『規範』『ネットワーク』といった社会組織の特徴」⁸と定義している。より平易な表現として、「信頼に裏打ちされた社会的な繋がりあるいは豊かな人間関係」⁹と捉えることもできる（図表 1-9）。

また、ソーシャル・キャピタルには統合型（Bonding）のソーシャル・キャピタルと橋渡し型（Bridging）のソーシャル・キャピタルがある。

統合型のソーシャル・キャピタルは、社会の接着

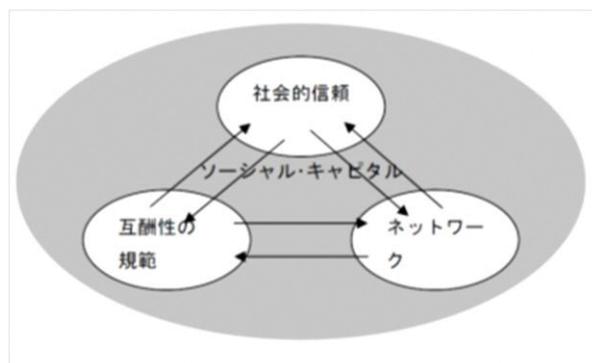
剤ともいふべき強いきずな、結束によって特徴づけられ、この性格が強すぎると排他性につながる場合もあり、一方で、橋渡し型のソーシャル・キャピタルは、より弱く、より薄い、より横断的なつながりとして特徴づけられ、社会の潤滑油ともいふべき役割を果たすとされている¹⁰。

本研究では、既存の地域コミュニティや組織で得られやすい「統合型」ソーシャルキャピタルよりも、「橋渡し型」ソーシャルキャピタルの醸成を意識した場の検討を行う。

② プラットフォーム

プラットフォーム（Platform）は、一般的には「壇」や「台」などを意味する言葉であるが、地域づくりの分野におけるプラットフォームは、「多様な主体の協働を促進するコミュニケーションの基盤となる道具や仕組み、空間」¹¹などと定義される。具体的な例としては、異業種や多世代の人々が参加する学習会やワークショップ、イベントなどでの交流の場や、特定のテーマが設定されたSNS上の交流サイトなどがある。

図表 1-9 ソーシャル・キャピタルの概念イメージ



出所) 内閣府「平成 14 年度 ソーシャル・キャピタル：豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて」、p. 15、2003

⁸ 内閣府国民生活局市民活動促進課「平成 14 年度 ソーシャル・キャピタル：豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて」、p. 15、2003

⁹ 内閣府 NPO ホームページ

<https://www.npo-homepage.go.jp/toukei/2009izen-chousa/2009izen-sonota/2002social-capital>

¹⁰ 内閣府国民生活局市民活動促進課「平成 14 年度 ソーシャル・キャピタル：豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて」、p. 18、2003

¹¹ 飯盛義徳「地域づくりのプラットフォーム」、p. 38、学芸出版社、2015

近年、こうしたプラットフォームが浸透しつつある。この背景には、複雑化・多様化する地域課題に対応するためには、従来の取組の延長線上にある対応策にとどまらず、総合的、中長期的な思慮が必要であり、その源泉として、異分野とのつながりや創発のプロセスが求められていることがあるといえる。

こうしたプラットフォームづくりでは、人や組織の弱いつながりと強いつながりを上手く結合していくことが大切とされている¹²。(図表 1-10)これは、①で述べた「ソーシャル・キャピタル」の考え方を含んでいると見ることもできる。

本研究で取り上げる交流の場は、地域づくりへの思考、行動につながるプロセスを生み出すためのものであることから、プラットフォームの一種として位置付ける。

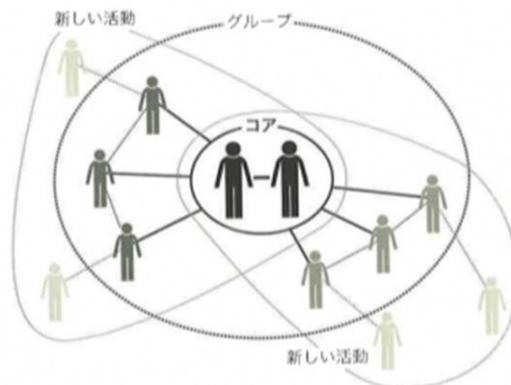
③ フューチャーセンター

フューチャーセンターは、もともと北欧の知的資本経営から生まれた、「未来の価値（知的資本）を生み出すセンター」¹³で、日本でも、企業や大学のオープン・イノベーションの場、あるいは市民参加のまちづくりの場として注目されている(図表 1-11)。

フューチャーセンターの概念は、「創造的なワークショップのファシリテーションという『機能』を提供し、そこで対話やアイデア創出という『活動』を行っている」¹⁴とされる。また、フューチャーセンターを良い場とする条件は、「参加者が多くの気づきを得て、行動を起こしたくなるような、関係性が生まれること」¹⁵であり、そうした良質な場をつくるファシリテーターの役割も重要視されている。

本研究では、このようなセンター機能を具体的に提案するものではないが、フューチャーセンターをプラットフォームの一例と捉え、その理念等を参考とする。

図表 1-10 つながりの形成と新しい活動



出所) 飯盛義徳「地域づくりのプラットフォーム」、p. 34、2015

図表 1-11 フューチャーセンターの構成要素



出所) 野村恭彦「フューチャーセンターをつくらう」、p. 23、2012

¹² 飯盛義徳「地域づくりのプラットフォーム」、p. 64、学芸出版社、2015
¹³ 野村恭彦「フューチャーセンターをつくらう」、p. 11、プレジデント社、2012
¹⁴ 野村恭彦「フューチャーセンターをつくらう」、p. 17、プレジデント社、2012
¹⁵ 野村恭彦「フューチャーセンターをつくらう」、p. 61-62、プレジデント社、2012

参考文献（第1章）

○学習材料としての地域資源情報関係

- ・岡田知弘「時代が求める地域学のあり方」、地理 743 号、古今書院、2017
- ・立正大学地理学科ホームページ（地誌学） <http://rissho-map.jp/bunya/chishi.html>
- ・結城登美雄「地元学からの出発」、農山漁村文化協会、2009
- ・吉本哲郎「地元学をはじめよう」、岩波ジュニア新書、2008
- ・日本学術会議 太平洋学術研究連絡委員会 地域学研究専門委員会「地域学の推進の必要性についての提言」、2000
- ・樽本高嘉「地域学概論」概要 http://www.geocities.jp/haiku_square/chiikigaku.html
- ・柳原邦光・光多長温・家中茂・仲野誠「地域学入門」、ミネルヴァ書房、2011
- ・森浩一「地域学のすすめ -考古学からの提言-」、岩波新書、2002
- ・坂江歩「地域史を調べることと学ぶこと-目的と支援を問い直す-」、第 11 回歴史文化をめぐる地域協議会資料、2013
- ・横山幸司「生涯学習の視点から考える地域学の意義と今後の展望についての一考察」、滋賀大学社会連携研究センター報 No. 2、2014
- ・下平尾勲「地元学のすすめ」、新評論、2006
- ・伊藤香織・紫牟田伸子「シビックプライド 1」、宣伝会議、2008
- ・伊藤香織・紫牟田伸子「シビックプライド 2」、宣伝会議、2015

○情報発信に資する地域資源情報関係

- ・内閣府「地域の経済 2017 -地域の「稼ぐ力」を高める-」、2017
- ・経済産業省「各論 地域ブランド」、知的財産戦略本部・コンテンツ専門調査会第 1 回日本ブランド・ワーキンググループ資料、2004
- ・ブランド総合研究所ホームページ（地域ブランド用語集）
http://www.tiiki.jp/corp_new/column/column.html
- ・株式会社矢野経済研究所「平成 25 年度地域経済産業活性化対策調査 地域ブランディングとそれに関連する地域づくりのあり方に関する調査報告書」、2014
- ・内閣府政策統括官室「地域の経済 2005 -高付加価値化を模索する地域経済-」、2005
- ・青木幸弘「地域ブランドを地域活性化の切り札に」、『ていくおふ』No.124、ANA総合研究所、2008
- ・金子和夫「人、まち、ものが一体となった地域ブランドの形成」、日本総研ホームページ、2005
- ・香坂玲「農林漁業の産地ブランド戦略」、ぎょうせい、2016
- ・関満博「新「地域」ブランド戦略」、日経広告研究所、2007
- ・佐々木純一郎・石原慎士・野崎道哉「〔新版〕地域ブランドと地域経済」、同友館、2008
- ・経済産業省「地域ストーリー作り研究会とりまとめ ～経験可能な地域ストーリーによる顧客満足と地域活性化～」、2016
- ・経済産業省ホームページ（「地域ストーリー作り研究会」報告書）
<http://www.meti.go.jp/press/2014/02/20150210001/20150210001.html>
- ・文化庁「日本遺産パンフレット」
http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/nihon_isan/pdf/nihon_isan_pamphlet.pdf
- ・日本ジオパークネットワークホームページ <http://geopark.jp/about/>
- ・丁野朗「日本遺産の可能性と期待」、文化遺産の世界 vol. 26、「文化遺産の世界」編集部、2016
- ・シティプロモーション自治体連絡協議会ホームページ <http://www.citypromotion.jp/>
- ・川崎市「川崎市シティプロモーション戦略プラン」、2016
- ・「特集 地域の魅力を国内外に発信～シティプロモーションを生かしたまちづくり～」、市政 vol. 65、全国市長会、2016
- ・守屋邦彦「シティセールスの真の意味は？」、公益財団法人日本交通公社ホームページコラム vol. 54、

- 2008 <https://www.jtb.or.jp/column-photo/column-city-promotion-moriya>
- ・牧瀬稔「シティプロモーションとシティセールスの違いは何?」、シティプロモーション自治体等連絡協議会メールマガジン第2号、2013 <http://www.citypromotion.jp/index.php/>
 - ・大塚敬「地方創生への取組におけるシティプロモーションの意義と可能性」、三菱UFJリサーチ&コンサルティングホームページ、2015
http://www.murc.jp/thinktank/rc/column/search_now/sn150317
 - ・河井孝仁「シティプロモーション」、東京法令出版、2009

○地域づくり人材の発掘・支援関係

- ・内閣府国民生活局市民活動促進課「平成14年度 ソーシャル・キャピタル：豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて」、2003
- ・内閣府NPOホームページ
<https://www.npo-homepage.go.jp/toukei/2009izen-chousa/2009izen-sonota/2002social-capital>
- ・滋賀大学・内閣府経済社会総合研究所「ソーシャル・キャピタルの豊かさを活かした地域活性化 地域活動のメカニズムと活性化に関する研究会報告書」、2017
- ・飯盛義徳「地域づくりのプラットフォーム」、学芸出版社、2015
- ・堀内一永「フューチャーセンター 未来を創造する対話の場」、調査季報 vol.170、横浜市、2012
- ・野村恭彦「フューチャーセンターをつくろう」、プレジデント社、2012
- ・総務省地域力創造グループ地域自立応援課「創造的人材の定住・交流の促進に向けた事例調査」、2012

第2章 上越市の特徴的な地域資源情報

第2章 上越市の特徴的な地域資源情報

2-1 地域資源の分類

(1) 地域資源の分類項目

地域資源についての明確な定義はなく、その種類は多岐にわたる。また、それぞれの地域資源は独立して存在するのではなく、様々な因果関係や相互依存関係などによって成立している。上越市の特徴的な地域資源の説明に当たっては、これらの状況や地域づくりの学習材料に用いることを念頭に置き、総合的、体系的に整理するための項目設定が必要となる。

まず「自然環境」、「都市基盤」、「政治・経済」、「生活・文化」を4つの大分類項目として設定した。次に、本報告書で取り上げる上越市の特徴的な地域資源の内容を踏まえて中分類項目を設定した。ただし、今回説明対象となる地域資源がない場合（たとえば動物）は項目設定を行っていないことから、この中分類は網羅的・普遍的なものではない。2-2 では、この項目ごとに特徴的な地域資源の説明を行う(図表 2-1)。

(2) 地域資源の関係性

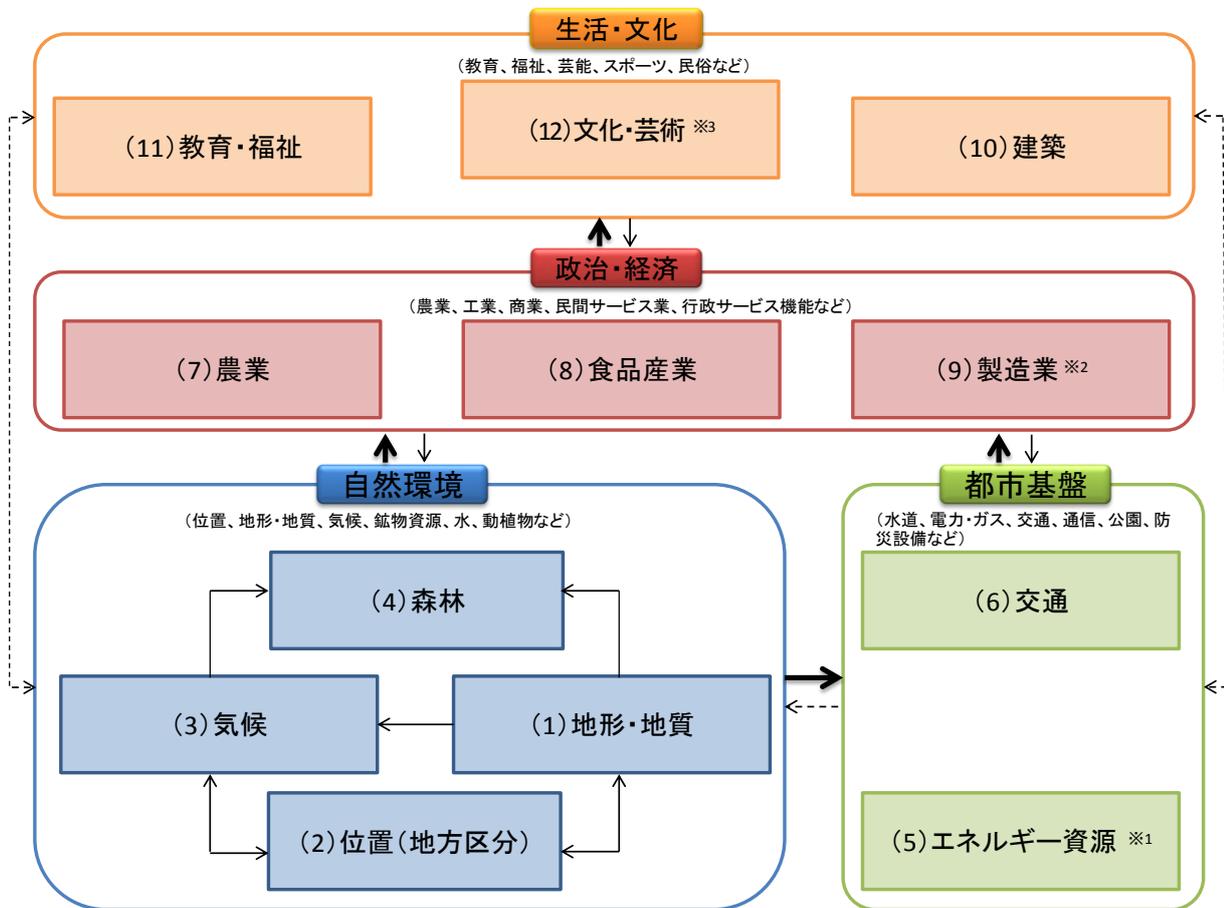
「自然環境」、「都市基盤」、「政治・経済」、「生活・文化」の項目は、先に掲げた項目ほど地域を形成する“土台”としての性質が強く、他の項目に影響を与える傾向にある。

たとえば「自然環境」は、他の3項目に影響を与える側面が大きい一方、「生活・文化」は他の3項目から影響を受けて形成される側面が大きい。交通インフラなどの「都市基盤」は、位置、地形・地質、気候などの「自然環境」を踏まえて整備される傾向にある一方、「政治・経済」や「生活・文化」の土台となる役割を果たしている。

ただし、影響を与える側と影響を受ける側がすべて一方的な関係となるわけではない。たとえば強固な「政治・経済」基盤を有することによって、利便性の高い「都市基盤」が整備される場合もある。また、「生活・文化」や「政治・経済」に関する地域資源が衰退することによって「都市基盤」が弱体化する場合や、「生活・経済」活動や「都市基盤」の整備によって「自然環境」に影響を及ぼす（いわゆる環境問題の発生）など、地域資源の盛衰がその土台となる地域資源の盛衰に影響を与える場合もある。

地域資源の盛衰についての因果関係を把握する場合や、それらをストーリー立てて説明する場合にはそのような関係性を俯瞰的に捉える必要がある。

図表 2-1 地域資源の分類項目と関係性



※1 エネルギー資源は、自然環境の一部ともいえるが、ここでは農業用水や水力発電、雪氷エネルギーなど、産業や生活において利用可能な状態に着目したため、都市基盤の一部に位置付けた。

※2 食品産業は除く。

※3 ここでいう文化は、芸術や伝統的な風習など、狭義の意味で用いている。

このほか、次の点に留意して整理を行う。

- ・ 歴史的な価値を有する地域資源については、「歴史」として独立して整理せず、関係する項目の中にも含める。
例：街道 ➡ 交通
- ・ 特異性の程度やその要因、結果を客観的に説明することが困難な地域資源は、まちの形成に大きく影響したものを除き、掲載の対象外とする。これらに該当するものは、偉人や重要文化財に関わるものが多い。

2-2 分野別にみた上越市の特徴

当市における特徴的な地域資源の説明に当たっては、2-1 で設定した分類項目（分野）に基づき、下記の点に留意して説明を行う。

(1) 主な特徴の説明

- ・全国的な視点からみた特異性について、客観的またはそれに準ずる評価基準をもって説明できる地域資源を記載する。

例：〇〇の数は日本一、〇〇の評価は全国的にもトップクラス

- ・ただし、地域資源単独として一定の特異性を持つものであっても、そのことが意味する地域の特徴について、現時点で端的に語り辛いものは記載しない。

例：日本 100 名城の春日山城

- ・一方、全国的な視点からみて特異性があるとまでは言い切れないものの、地域の形成において影響が大きい（大きかった）と思われるものにも着目し、地域資源として記載する。

例：製造業の特徴

(2) 特徴の因果関係の説明

- ・個々の地域資源の特徴はあくまでも導入的情報であり、その因果関係を通じて過去・現在・未来のつながりや他の地域資源とのつながりを認識することが重要と考え、「主な特徴」の後に「特徴が形成された背景・要因」、「特徴が地域に与えた影響（例）」を項目として掲げる。

(3) その他

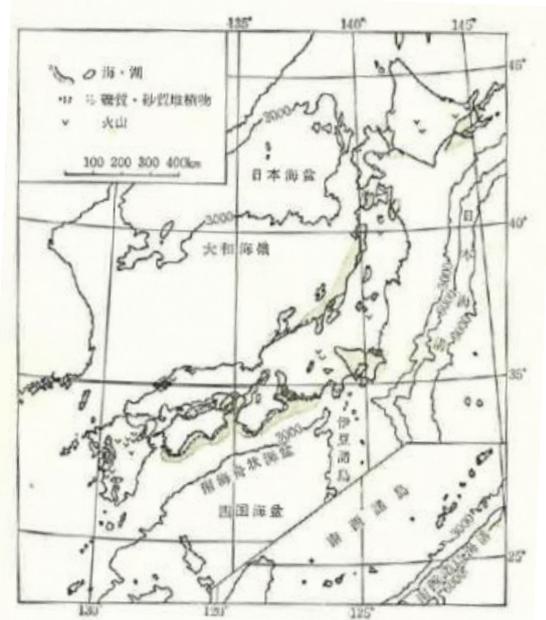
- ・あくまでも地域の現状・課題や将来の姿を考えるための地域資源情報であることを念頭に置き、専門性の高い記載よりも端的かつ総合的な内容となるように留意する。
- ・一定の信頼性を担保するとともに、今後の知見の高まりによって加筆修正が可能となるよう、特徴やその因果関係の根拠となる出所を記載する。
- ・地域資源を学ぶ学習材料としての役割も考慮し、「です・ます調」で記載する。

(1) 地形・地質

上越市には、“若い”山脈としてはトップクラスの高さを持つ関田山脈や、国内トップクラスの集積度を持つ地すべり地帯など、特徴的な地質・地形が存在します。また、山地、丘陵、平野、砂丘や海岸などの多様な地形がコンパクトにまとまった国内有数の地域といえます。

こうした特徴の背景には、上越市がかつてフォッサマグナの海の底にあり、隆起や土砂の堆積等によってほんの 100 万年前に平地となったことや、その後の隆起や火山活動によって周辺に高い山々が形成されたことなどが挙げられます。

図表 2-2 約 100 万年前と現在の地形の比較



出所) 成瀬洋「日本列島のおいたち」、p. 219、1977

主な特徴

★ “若い”山脈としてはトップクラスの高さを持つ

関田山脈

- ・上越市の山々や丘陵地は、約 200 万年前まで海の底にあり、約 100 万年前から平地がつけられ始めました。(図表 2-2)。
- ・上越市と長野県の境に位置する関田山脈は、そこから“短い”期間で 1,000m 以上成長したことになります。国内には、富士山や北アルプスなど高い山は多数ありますが、約 100 万年前まで海や平地であったところから出来た“若い”山脈としては、トップクラスの高さ¹⁶ ¹⁷といえます。

★地すべり指定箇所の集積度は国内トップクラス

- ・新潟県における地すべり防止区域（国土交通省、林野庁、農林水産省による指定区域）の指定箇所は、数・面積とも全国 1 位です(図表 2-3)。

図表 2-3 地すべり防止区域面積 /都道府県別ベスト 10(1998.1 現在)

順位	都道府県	指定面積(ha)
1	新潟県	76,114
2	徳島県	44,894
3	長野県	19,886
4	島根県	18,747
5	石川県	13,816
6	山形県	13,355
7	愛媛県	12,885
8	富山県	12,315
9	長崎県	11,378
10	高知県	11,305
—	国内計	318,444

図表 2-4 地すべり防止区域面積/新潟県内ベスト 10 (2017.3.31 現在)

順位	市町村	指定面積(ha)
1	上越市	26,028
2	糸魚川市	14,152
3	十日町市	12,469
4	長岡市	8,233
5	佐渡市	5,614
6	柏崎市	5,252
7	妙高市	4,127
8	魚沼市	2,999
9	阿賀町	1,531
10	村上市	1,418
—	県内計	87,105

備考) なお、各省庁の最新値(国土交通省 25,680ha [2013. 3. 31 現在]、林野庁 32,096ha [2015. 3. 31 現在]、農林水産省 29,248ha [2017. 3. 16 現在]、合計 87,024ha)を比較しても、新潟県が 1 位であることは変わらない。

出所) 新井場公德ほか「日本の地すべり指定地分布と地質的特徴について—全国地すべり指定地調査結果報告—」

備考) 指定面積は、国土交通省、林野庁、農林水産省の各指定面積の合計値
出所) 新潟県砂防課、治山課、農地建設課資料を基に当研究所作成

¹⁶成瀬洋「日本列島の生い立ち」における 100 万年前古地理図を基に現存する山脈を確認

¹⁷地質学的には、第四紀(258 万年前から現在)の海成層(海底に堆積してできた地層)で稜線部が構成される山脈としてはトップクラスという表現もできる。(地質調査総合センター 20 万分の 1 日本シームレス地質図 [https://gbank. gs.j. jp/seamless/v2. html](https://gbank.gs.j. jp/seamless/v2. html))

- ・特に県内でも、西頸城、東頸城、魚沼の丘陵地帯にその区域が集中しており、上越市内にある箇所数・面積は、ともに県内の約3割を占めています。(図表2-4)。

★ 多様な地形がコンパクトにまとまった国内有数の地域

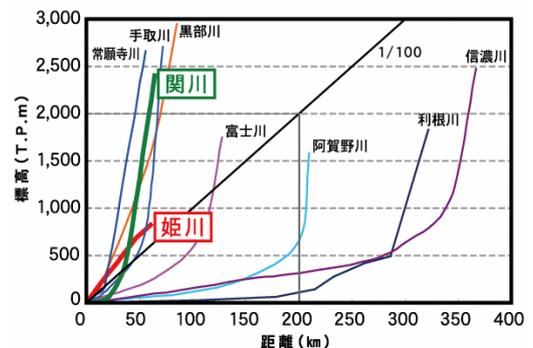
- ・市内を流れる関川水系は、標高2,000m以上の高山を水源とした国内の一級水系¹⁸の中で、安倍川(静岡県)、常願寺川(富山県)、子吉川(秋田県・山形県)に次いで4番目の長さであり、世界的な急流として取り上げられる「常願寺川」に引けを取らない急な傾斜を持っています(図表2-5,2-6)。
- ・水源から河口までの短い距離に砂丘、平野、丘陵、高山などを有しており、多様な地形がコンパクトにまとまっている全国有数の地域(流域圏)ともいうことができます。
- ・さらに上越市から半径100kmの範囲には、多くの百名山や3,000m級の山々(北アルプス)がそびえ立つなど、より多様な地形を楽しむことができます。

図表2-5 2,000m以上の山を水源とする一級水系の幹川流路延長(短い順)

順位 (流路延長の 短い順)	水系名	関係都道府県	幹川 流路 延長 (km)	河川延長 合計 (km)	流域 面積 (km ²)	水 源	
						名 称	標高(m)
1	安倍川	静岡	51	199.8	567	大谷嶺	2,000
2	常願寺川	富山	56	145.2	368	北アルプス立山連峰	3000m級
3	子吉川	秋田、山形	61	408.6	1,190	鳥海山	2,236
4	関川	新潟、長野	64	510.2	1,140	焼山	2,400
5	手取川	石川	72	215.6	809	霊峰白山	2,702
6	黒部川	富山	85	141.9	682	鷲羽岳	2,924
7	相模川	神奈川、山梨	109	592.7	1,680	富士山	3,776
8	富士川	山梨、長野、静岡	128	1,905.5	3,990	鋸岳	2,685
9	十勝川	北海道	156	2,372.3	9,010	大雪山連峰十勝岳	2,077
10	大井川	静岡	168	318.7	1,280	間ノ岳	3,189
11	荒川	埼玉、東京	173	1,225.4	2,940	甲武信ヶ岳	2,475
12	天竜川	長野、静岡、愛知	213	2,072.5	5,090	赤岳	2,899
13	木曾川	長野、岐阜、愛知、三重、滋賀	229	3,004.3	9,100	鉢盛山	2,446
14	最上川	宮城、山形	229	2,484.8	7,040	西吾妻山	2,035
15	信濃川	群馬、新潟、長野	367	5,004.2	11,900	甲武信ヶ岳	2,475

出所) 国土交通省ホームページ(日本の川、河川統計データ)を基に当研究所作成

図表2-6 関川と周辺河川の比較)



出所) 国土交通省高田河川国道事務所ホームページ

¹⁸ 一級水系とは、河川法によって国土保全上又は国民経済上特に重要な水系で政令で指定されたものであり、全国に109水系ある(H28.7現在)。なお、このうち河川法による管理を行う必要があり、国土交通大臣が指定した河川(区間を限定)を一級河川という。

特徴が形成された背景・要因

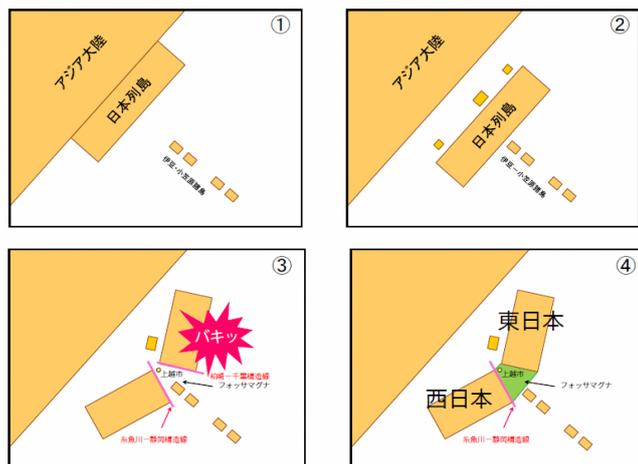
- ・上越市の地形・地質には、フォッサマグナが大きく関わっています。フォッサマグナとは、ラテン語で「大きな溝」という意味であり、一般的には糸魚川－静岡構造線と柏崎－千葉構造線との間の「地質学的な溝」¹⁹を指します。上越市は、このフォッサマグナの真上に位置します（図表 2-7）。
- ・約 2,000 万年前、日本列島はアジア大陸から離れていき、その真ん中で折れ、深さ 3,000m のフォッサマグナの海ができました（図表 2-8）。
- ・そこに土砂が流れ込むなどして、砂や泥の厚い地層が形成され、約 300 万年前には日本列島全体が隆起を始めましたが、上越市周辺は、約 100 万年前はまだ海や平地であり、当時は信濃川が流れ込んでいました（図表 2-9）。
- ・これ以降、平地と山地の地形分化が進んでいきます。褶曲などの地殻変動が生み出した関田山脈、新たな火山活動が生み出した 2,000m 級の妙高山や焼山、関川によって土砂が運ばれた高田平野など、新しくも多様な地形が形成されました。

図表 2-7 フォッサマグナの範囲



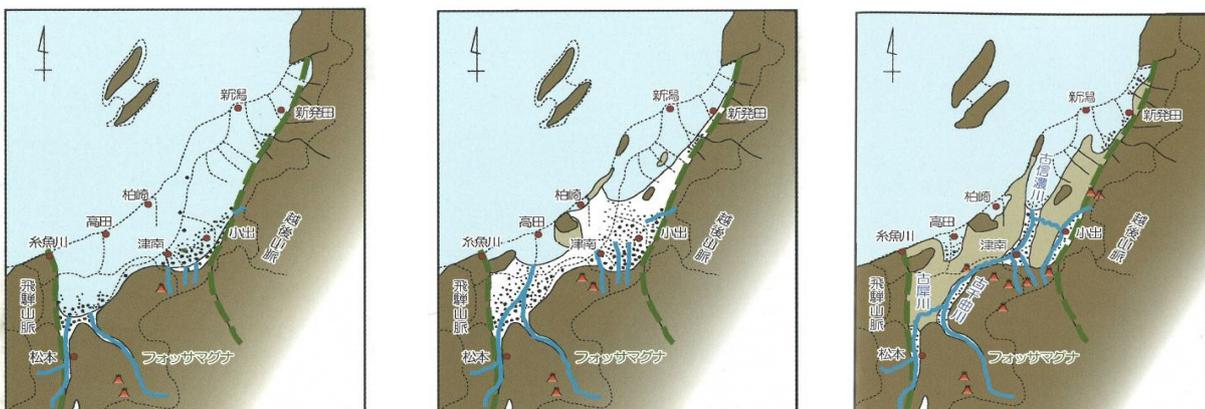
出所) 糸魚川フォッサマグナミュージアム

図表 2-8 フォッサマグナの形成



出所) 糸魚川フォッサマグナミュージアム資料を基に
当研究所で加筆修正

図表 2-9 信越県境付近の地形(200～30 万年前)



① 約200万年前

② 約100万年前

③ 約40～30万年前

出所) 小林巖雄監修・国土交通省北陸地方整備局信濃川河川事務所「信濃川・越後平野の地形と地質」、p. 14-15、2007

¹⁹フォッサマグナの溝の深さは、6,000m 以上、北アルプスや越後山地（古い岩石）の標高約 2,000～3,000m を足すと、8,000～9,000m 以上の深さがあることになる。（フォッサマグナミュージアムホームページ <http://www.city.itoigawa.lg.jp/6525.htm>）

- ・このように、上越市の丘陵地の地層は、地質学的には新しい故に十分に固まっておらず、地層には隆起の過程で生じた無数の割れ目に水がしみ込み軟弱になっています。これら軟弱な地層がさらに隆起して不安定になることで、地すべりが起こりやすくなりました。

特徴が地域に与えた影響（例）

- ・上越市周辺に山脈や日本海が形成された結果、国内有数の豪雪地帯となりました。
⇒ (3) 気候の項を参照
- ・地形・地質の特徴から、石油・天然ガスが採りやすい地域となりました。
⇒ (5) エネルギー資源の項を参照
- ・豪雪等による豊富な水量とともに、河川の傾斜の大きさを利用して、水力発電が行われました。
⇒ (5) エネルギー資源の項を参照
- ・周辺を高い山脈に囲まれた地形のため、その地形的条件が影響して交通の要衝となりました。
⇒ (6) 交通の項を参照
- ・地すべりは災害という側面だけではなく、米づくりの適地となり、美しい棚田の景観なども生み出しました。
⇒ (7) 農業の項を参照

(2) 位置（地方区分）

上越市は、市内に JR 東日本と西日本の境界駅を有するなど、東西日本の境界（東日本の西端）付近に位置します。また、内容に応じて東北、関東、信越、北陸、中部などの様々な地方に属するなど、地方区分の多様さでは国内でも例を見ない地域といえます。

こうした特徴の背景には、上越市が日本海側のほぼ中央に位置していることや、近隣に北アルプスなどの高山帯を有すること、さらには新潟県が広大な面積を抱え 5 県に接することなどが挙げられます。

主な特徴

★ 東西日本の境界付近（東日本の西端）に位置する地域

- 東西日本の境界線は一概に語ることはできませんが、上越市は概ね東西の境界付近にあり、どちらかと言えば東日本の西端付近に位置していると見ることができます。
- 例えば、市内の直江津駅と上越妙高駅は、JR 東日本の管轄ですが、駅から西側は JR 西日本の管轄です。2015 年に北陸新幹線が開業するまでは、直江津駅で両社の乗務員が交代していました。
- また、上越市は、電力周波数の境界近くにも位置しています。電力周波数は、静岡県富士川と隣接する糸魚川市内を境にして、東側は 50 ヘルツ、西側は 60 ヘルツとなっています²⁰。

★ 地方区分の多様さは国内でも例を見ない地域

- 上越市を含む新潟県は、東北、関東、信越、北陸、中部などといった、様々な地方区分に分類され

図表 2-10 新潟県が所属する地方区分

都道府県	茨城・栃木・群馬・埼玉	千葉・東京・神奈川	山梨	長野	新潟	富山	石川	福井	
国土形成計画	(北関東) 首都圏		中部	中部	東北	北陸			
環境省 (地方環境事務所)	関東		中部	中部	中部				
経産省 (経済産業局)	関東				中部				
厚労省 (地方厚生局)	関東信越				東海北陸		近畿		
財務省 (財務局)	関東				北陸				
	(国税局) 関東信越		東京	関東信越		金沢			
法務省 (法務局)	東京				名古屋				
農水省 (森林管理局)	関東		中部	中部				近畿中国	
	(地方農政局) 関東				北陸				
国交省 (気象地方予報区)	関東甲信				北陸				
	(地方整備局) 関東				北陸				
	(地方運輸局) 関東		北陸信越				近畿		
	(海上保安管区) 第3		第9				第8		
総務省 (総合通信局)	関東		信越		北陸				
	電力	東京		中部	東北	北陸			
	水道(日本水道協会)	関東		中部					
	NTTドコモ	関東甲信越				北陸			
	NTT	東日本				西(北陸)			
高速道路(NEXCO)	東日本		中日本	東日本/西日本		東日本			
	JR		東日本		東日本/西日本		西日本		
その他	衆議院選挙比例		北関東 東京/南関東		北陸信越				
	インターハイ		関東		北信越				

※ 都道府県内の一部エリアが異なる地域区分に属する場合もある。

出所) 各省庁ホームページ等を基に当研究所作成

²⁰ 明治時代、関東にはドイツから 50 ヘルツの発電機が、関西にはアメリカから 60 ヘルツの発電機が輸入されたことから、現在も当時の流れをくむ周波数が存在している（中部電力ホームページ）。

ています。例えば、電力や国土形成計画は東北、気象予報や農政では北陸、税は関東信越などに区分されています。これだけ様々な地方区分に位置付けられる地域は、全国でも稀と言えます(図表 2-10)。

特徴が形成された背景・要因

- ・上越市は、日本海側のほぼ真ん中に位置しています。上越市を中心として半径 1,000 km の円を描くと、北海道から九州まで、ほぼすっぽり収まることとなります(図表 2-11)。
- ・また、上越市の近辺にあるフォッサマグナ西縁(糸魚川-静岡構造線)に沿って北アルプスなどの山々がそびえ立つなどの地形的条件から、人や物の流れが制限される地域でもありました。
- ・さらに上越市を含む新潟県は、面積が大きく、富山、長野、群馬、福島、山形の 5 県に接するため、各分野で重視される考え方(歴史、地理、経済等)により、様々な地方に分類されることとなりました。

図表 2-11 上越市の位置(1000 km 円)



出所) 上越市第 5 次総合計画

特徴が地域に与えた影響(例)

- ・日本列島の東西の境目付近に位置することから、東西文化の接点となっているとも言えます。例えば、歳取り魚は、東日本では鮭、西日本では鰯が一般的ですが、高田平野では鮭、隣の糸魚川平野では鰯であることに加え、「上越市あたりは、サケの消費量は下越などをはるかに下回」²¹とも言われています。

²¹ 市川健夫「ブナ帯文化と風土」、p. 102、第一企画、2010

(3) 気候

上越市は、気象台等がある都市の中で、最深積雪や1日の降雪量の日本記録を持つなど雪の多さは国内トップクラスである一方、多雪の年と少雪の年の差が激しい地域でもあります。また、降水量や降水日数の多さなどから気候の湿潤さも国内有数といえます。

こうした特徴の背景には、上越市が日本海に面し周辺に高い山々を擁するなど、海と山地の位置関係が挙げられます。

主な特徴

★ 雪の多さは国内でもトップクラス

- ・上越市高田測候所で昭和20年に観測された積雪深377cmは、気象台等²²がある都市の中での日本記録です（図表2-12）。
- ・上越市板倉区柄山で昭和2年に記録された積雪深818cmは、人の住む所での日本記録²³とされています。
- ・上越市高田測候所で昭和44年に観測された1日の降雪量120cmは、気象台等がある都市の中での日本記録です（図表2-13）。
- ・上越市を含む北陸地方に積もる雪は、一般的に、北海道などと比べて水分を多く含んだ重い雪になると言われています。こうした雪は、屋根への積雪や電線への着雪などによって、大きな被害をもたらすこともあります。

図表 2-12 最深積雪/国内トップ 20
(気象庁統計開始～2018.3.9)

地点：気象台等およびアメダス

順位	地点	観測値		気象台等	現在観測を実施
		cm	起日		
1	伊吹山(滋賀県)	1182	1927年2月14日	*	
2	酸ヶ湯(青森県)	566	2013年2月26日		○
3	守門(新潟県)	463	1981年2月9日		○
4	肘折(山形県)	445	2018年2月13日		○
5	津南(新潟県)	416	2006年2月5日		○
6	十日町(新潟県)	391	1981年2月28日		○
7	高田(新潟県)	377	1945年2月26日	*	○
8	小出(新潟県)	363	1981年2月28日		○
9	関山(新潟県)	362	1984年3月1日		○
10	湯沢(新潟県)	358	2006年1月28日		○
11	野沢温泉(長野県)	353	1984年3月22日		○
12	安塚(新潟県)	350	1984年3月8日		○
13	大井沢(山形県)	348	2000年3月1日		○
14	只見(福島県)	341	2013年2月25日		○
15	檜枝岐(福島県)	339	2015年2月15日		○
16	富士山(静岡県)	338	1989年4月27日	*	
17	幌加内(北海道)	324	2018年2月25日		○
18	倶知安(北海道)	312	1970年3月25日	*	○
19	朱鞠内(北海道)	311	1982年3月10日		○
20	能生(新潟県)	309	1985年1月30日		○

参考) 旧国鉄の日本記録は、飯山線森宮野原駅(長野県栄村)の785cm(1945年2月12日)

★ 多雪の年と少雪の年の差が激しい地域

- ・上越市高田測候所における過去20年間の年最深積雪を見ると、201cm以上の年もあれば50cm以下の年もあるなど、多雪と少雪の年の差が大きい傾向にあります。
- ・この傾向は、最深積雪ベスト10の記録をもつ気象台等の中では唯一です（図表2-14）。

備考)]印は、資料不足値のため、通常は上位の統計に用いないが、その値以上であることが確実であるとされるもの。
出所) 気象庁ホームページを基に当研究所作成

²²気象台や気象台と同様の観測装置を伴う測候所、気象観測所、特別地域気象観測所のことを指し、「地上気象観測所」などと表現する場合もある。H25.10.1現在、全国に157か所ある。全国に約1,300か所あるアメダス(地域気象観測システム)は除く。

²³前野紀一・福田正巳「基礎水雪学講座第Ⅱ巻 降雪現象と積雪現象」、p.203、古今書院、1995

図表 2-13 1日の降雪量／国内トップ10
(1960.11～2017.1)

地点：気象台等 157 か所

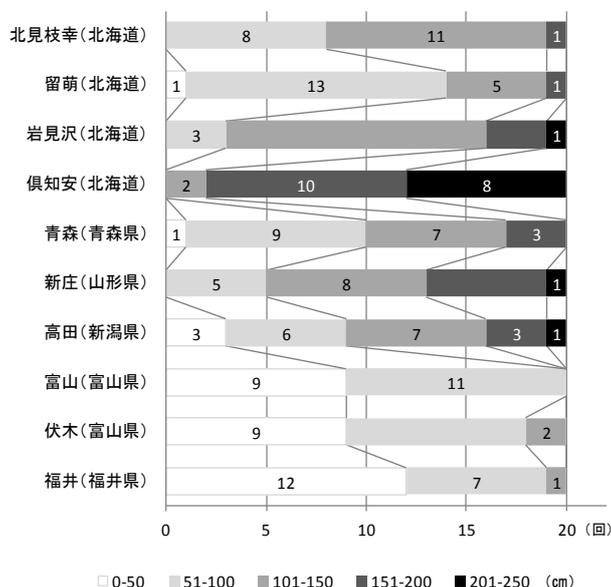
順位	地点	日合計(cm)	観測年
1	高田(新潟県)	120	1969
2	帯広(北海道)	102	1970
3	若松(福島県)	98	1980
4	広尾(北海道)	96	1986
5	新庄(山形県)	86	1980
6	小樽(北海道)	84	1996
6	富山(富山県)	84	1966
6	金沢(石川県)	84	2001
9	羽幌(北海道)	81	2010
10	雄武(北海道)	73	1974

参考) 旧国鉄の日本記録は、旧関山駅(新潟県妙高市)の210cm(1946年1月17日)

出所) 気象庁ホームページを基に当研究所作成

図表 2-14 年最深積雪の比較
(1997-2016の20年間)

地点：最深積雪国内ベスト10の気象台等



備考) 各年の最深積雪を50cmごとに分類し、その回数を集計。

出所) 気象庁ホームページを基に当研究所作成

★ 気候の湿潤さは国内有数

- ・高田測候所における降水量の平年値²⁴は全国9位の2,755mmです(図表2-15)。そのうち、11月から2月の降水量が全体の5割以上を占めており、雪の影響が大きいことがわかります。
- ・1mm以上の降水日数の平年値は、全国1位の190.5日です(図表2-16)。

図表 2-15 年間降水量平年値／国内トップ10

地点：気象台等 157 か所

順位	地点	平年値(mm)
1	屋久島(鹿児島県)	4,477
2	尾鷲(三重県)	3,849
3	阿蘇山(熊本県)	3,206
4	八丈島(東京都)	3,202
5	雲仙岳(長崎県)	2,899
6	三宅島(東京都)	2,838
7	名瀬(鹿児島県)	2,838
8	大島(東京都)	2,827
9	高田(新潟県)	2,755
10	油津(宮崎県)	2,599

出所) 気象庁ホームページを基に当研究所作成

図表 2-16 1mm以上の降水日数平年値／国内トップ10

地点：気象台等 157 か所

順位	地点	平年値(日)
1	高田(新潟県)	190.5
2	新庄(山形県)	189.1
3	酒田(山形県)	186.5
4	倶知安(北海道)	177.1
5	金沢(石川県)	176.8
6	富山(富山県)	176.5
7	伏木(富山県)	173.8
8	輪島(石川県)	172.6
9	秋田(秋田県)	172.3
10	新潟(新潟県)	172.2

出所) 気象庁ホームページを基に当研究所作成

²⁴現在の平年値は、1981年～2010年の30年間における平均値であり、10年ごとに更新される。本来の平年値は、データの欠測等を考慮した算出を行っているが、ここでは単純に30年間の平均値としていることから、本来の平年値と若干の誤差が生じることもある。

- 年間を通して降水量が多い地域であることから、湿度も高い地域です。特に11月から2月の相対湿度は、全国の主な観測所の中でも上位に位置します（図表 2-17）。

図表 2-17 相対湿度平年値／国内トップ 10
地点：気象台等 157 か所から選択した 82 か所

順位	地点	11-2月* 平年値(%)
1	高山(岐阜県)	81
1	旭川(北海道)	81
3	富山(富山県)	80
4	福井(福井県)	79
5	山形(山形県)	79
6	高田(新潟県)	77
7	長野(長野県)	76
8	軽井沢(群馬県)	76
9	青森(青森県)	76
10	留萌(北海道)	75

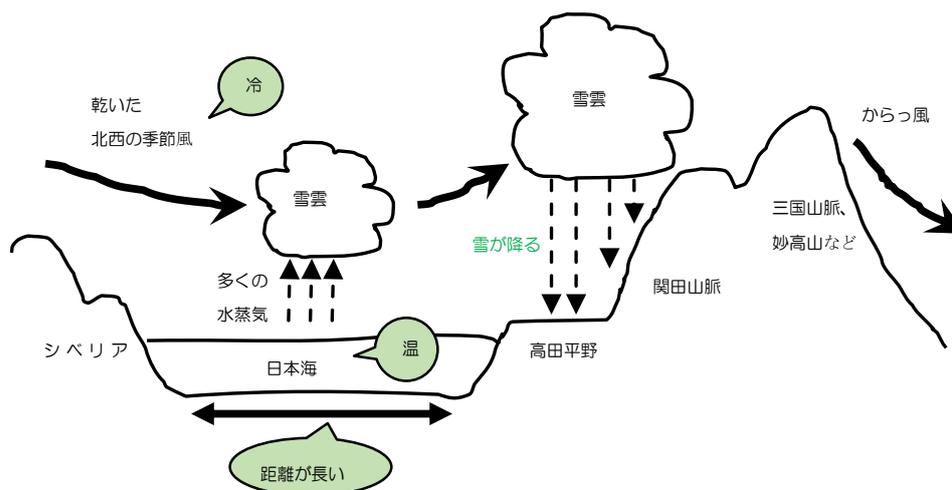
備考) 11, 12, 1, 2月の平年値を合計して4で除したもの
出所) 理科年表プレミアム

特徴が形成された背景・要因

▶ 日本海と山脈の存在

- こうした気候の特徴には、日本海と山脈の位置が大きく関係しています。
- 冬には、シベリアからの乾いた季節風が、対馬海流により暖かくなった日本海の上を通り、多くの水蒸気を含みます。そこで積雲が発達し、この積雲が山脈にぶつかり乗り越える過程で上越市に雪が降ります（図表 2-18）。
- 特に上越市に到達する季節風は、日本海海上のかなり長い距離を通過してくるため、より多くの水蒸気を含むという説もあります。
- 年間を通した湿度の高さも、降水量が多いことに加え、海が近くにあり、三方を山に囲まれた地形であることが影響しているといえます。

図表 2-18 上越地域の地形と降雪の仕組み



▶ 雪と雨の境界に近い気温

- 上越市は冬の気温が比較的高く、雪が雨になる境目に近いと言われていています。このため、より寒冷的な地域に比べると、湿った重い雪となり、年によって雪の降る量が大きく変化します。

特徴が地域に与えた影響（例）

- ・雪を中心とした降水量の多さは豊富な水資源となり、米づくりや水力発電などが発達しました。
➡ (7) 農業・(9) 製造業の項を参照
- ・雪国で生活するための知恵として、保存食品が発達し、その中でも雪国独特の四季の変化や湿度の高さに適合した発酵食品が発達しました。
➡ (8) 食品産業の項を参照
- ・市街地では、冬期間でも人が行き来できる雁木が形成されたり、一斉雪おろしや消雪パイプなどの様々な雪対策が行われ、雪国独特の景観も生み出しました。
➡ (10) 建築の項を参照

(4) 森林

上越市には、ブナクラス域とヤブツバキクラス域の森林があるほか、近隣地域の山々にはコケモモトウヒクラス域と高山帯の森林を有するなど、多様な植生に触れることができる国内有数の地域といえます。また、比較的人里近くにブナ林が多いことも特徴の一つといえます。

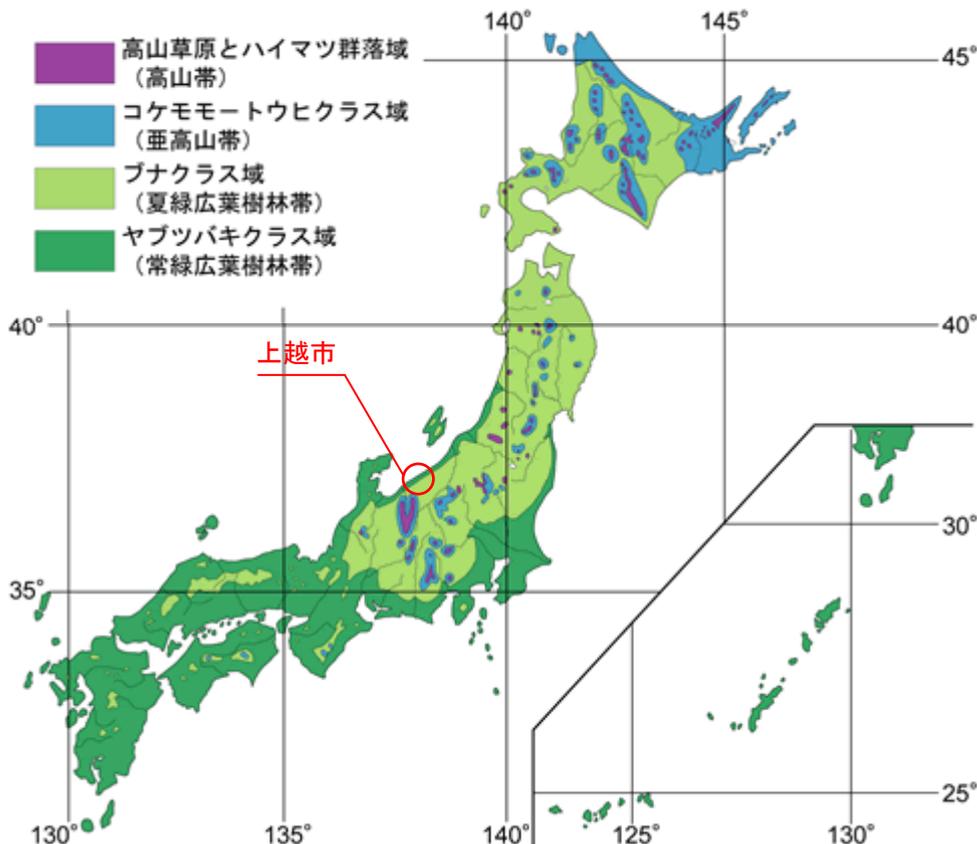
こうした特徴の背景には、山地、平野、海岸などの多様な地形がコンパクトにまとまった地域であるとともに、豪雪地帯であることなどが挙げられます。

主な特徴

★ 森林の多様さは国内有数

- ・日本の植生は、自然植生の構成種の名をとって、高山帯、コケモモトウヒクラス域、ブナクラス域、ヤブツバキクラス域に大別されます²⁵。
- ・上越市は、海岸沿いのヤブツバキクラス域と中山間地域を中心とするブナクラス域の境界に位置するほか、近隣市町村の標高の高い地域には、コケモモトウヒクラス域や高山帯も存在することから、多様な森林と親しむことができる国内有数の地域といえることができます（図表 2-19）。

図表 2-19 日本の植生分布



出所) 宮脇昭「日本の植生」、1977

²⁵ 環境省自然保護局生物多様性センターホームページの植生区分とクラス域に基づく。

<http://gis.biodic.go.jp/webgis/sc-010.html> 文献により、区分方法や名称が若干異なる場合もある。

- ・上越市は、日本海側の雪の多い地域に自生するユキツバキ分布のほぼ中央に位置するほか、温暖な地域に多いヤブツバキ、さらには両者の中間種であるユキバタツバキが分布する数少ない地域とされています²⁶。ツバキは上越市の花にも指定されています。
- ・新潟県は、ブナクラス域自然植生の面積が全国2位、都道府県内構成比は全国4位²⁷となっており、上越地方で最も広い面積を占めるのもブナクラス域です。上越市内の菱ヶ岳の東から南面にかけては「ブナ高木林が広く分布し、自然の林相を残したブナの大径木が多く、県下で数少なくなったブナ自然林として貴重な存在である」²⁸とされるなど、ブナ林はこの地域を特徴づけるものともいえます。
- ・日本では、ブナ林の多くが植林によってスギなどに置き換えられてきましたが、近年、ブナ林が持つ多面的な機能や美しさが評価されるようになってきました。世界自然遺産の白神山地は、人為的な開発が入らず東アジア最大の原生的なブナ林が残ることで有名ですが、上越市は、人里近くにこうした豊かな森林が生育する特徴的な地域と見ることもできます。

特徴が形成された背景・要因

▶ 地形・地質

- ・上越市は、海、砂丘、平野、丘陵、高山などの多様な地形がコンパクトにまとまった地域で、高低差も大きいことが、多様な森林が存在する要因にもなっているといえます。

▶ 気候

- ・高低差による気候の多様さに加え、豪雪地帯であることも植生に影響を及ぼしています。例えば、ユキツバキは、枝が細くしなやかで、雪の重みに耐え、雪の下にうずもれることで厳しい寒さから身を守る特徴があります。
- ・ブナは、豪雪に対して最も強い樹木であるため、深雪地域ほど純林が発達し、積雪の少ない太平洋側のブナ林では、ミズナラなどの混合林が多くみられます²⁹。また、日本海側の深雪地帯では、他地域では生育できない海拔の低い地域でも生育していることも知られています。
- ・上越市でも中山間地域で200mくらいの低地からブナ林が発達しています。また、豪雪地帯であるがゆえに開発の手が入りにくいと捉えることもでき、そのことで比較的自然環境が守られたという見方もできます。

特徴が地域に与えた影響（例）

- ・ブナ林は、地すべりを食い止める働きがあるほか、その林床は、腐葉土が厚く堆積し、天然のダムの役目を果たしたり、豊かな動植物を育てる働きを持っています。
- ・深雪地域のブナ林帯の森林では、雪により大地が凍結せずに地温が高く、融雪時には上よりも下の方から雪が消えていくため、「消雪とともに急速に山菜が伸び、柔らかで良質のものが採れる」³⁰とされています。

²⁶上越市史編さん委員会「上越市史普及版」、p. 42、1991

²⁷環境庁自然保護局「第5回基礎調査植生調査報告書植生メッシュデータとりまとめ全国版」、p. 42、1998

²⁸新潟県生活環境部自然保護課「続・新潟県のすぐれた自然 新潟県自然環境保全資料策定調査書 植物編」、p. 181、1993

²⁹市川健夫「ブナ帯と日本人」、p. 22、講談社、1987

³⁰市川健夫「ブナ帯と日本人」、p. 94、講談社、1987

(5) エネルギー資源

上越市を流れる関川水系には、県内最古の水力発電所や国内初の揚水式水力発電所が存在するなど、国内でも比較的早期に水力発電の恩恵を受けた地域です。また、石油産出地としての歴史を持つ国内でも珍しい地域であり、明治時代には国内生産量の約3分の1を占めた時期もありました。さらに天然ガスについては、戦後の一時期に日本一の産出量を誇ったガス田が誕生し、国内最長となる東京までのガスパイプラインが建設されました。現在、市内での生産はありませんが、LNG火力発電所やLNG基地を擁するほか、上越沖では次世代の国産エネルギーとして注目を集めるメタンハイドレートの調査が実施されるなど、天然ガスに関する国内有数の拠点であるといえます。

こうした特徴の背景には、豪雪地帯ならではの豊富な水資源やフォッサマグナの上に形成された独特な地形・地質が挙げられます。

主な特徴

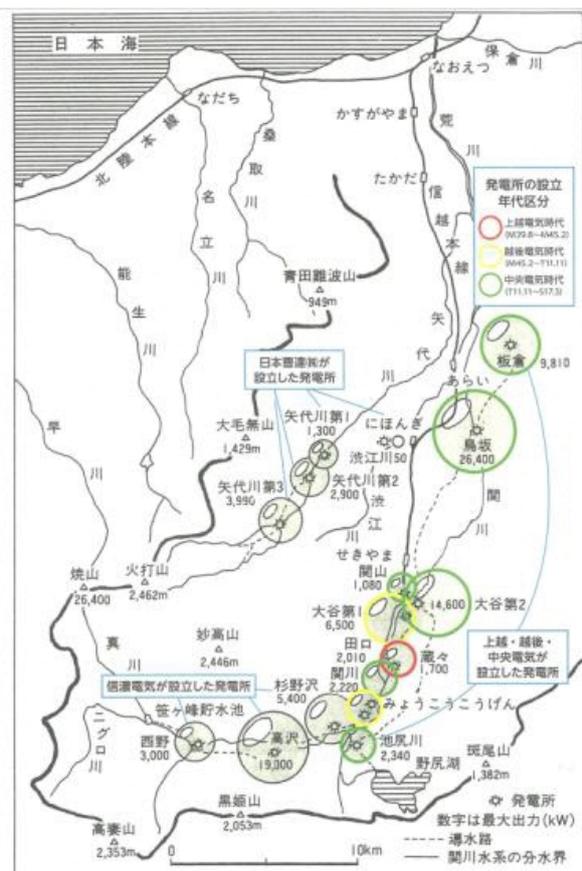
★ 国内でも比較的早期に水力発電の恩恵を受けた地域

- ・上越市を流れる関川水系では、国内でも比較的早い時期に水力発電所の建設が進められました。
- ・明治40年、現存する県内最古の水力発電所（蔵々発電所）が妙高市で運転を開始したほか、現在、関川水系には16か所の水力発電所があります(図表2-20)。
- ・昭和9年には、日本初の揚水式発電所（池尻川発電所）が長野県信濃町で運転を開始しました。これは、関川の水量が多い春・秋に水を野尻湖にくみ上げ、水量が少ない夏・冬に水を落として発電するもので、その下流では農業用水としても利用されています。
- ・このように揚水と落水を年2回繰り返し、発電と農業の共存共栄を図る仕組みは、世界にも類を見ないと言われています。

★ 石油産出地としての歴史を持つ国内でも珍しい地域

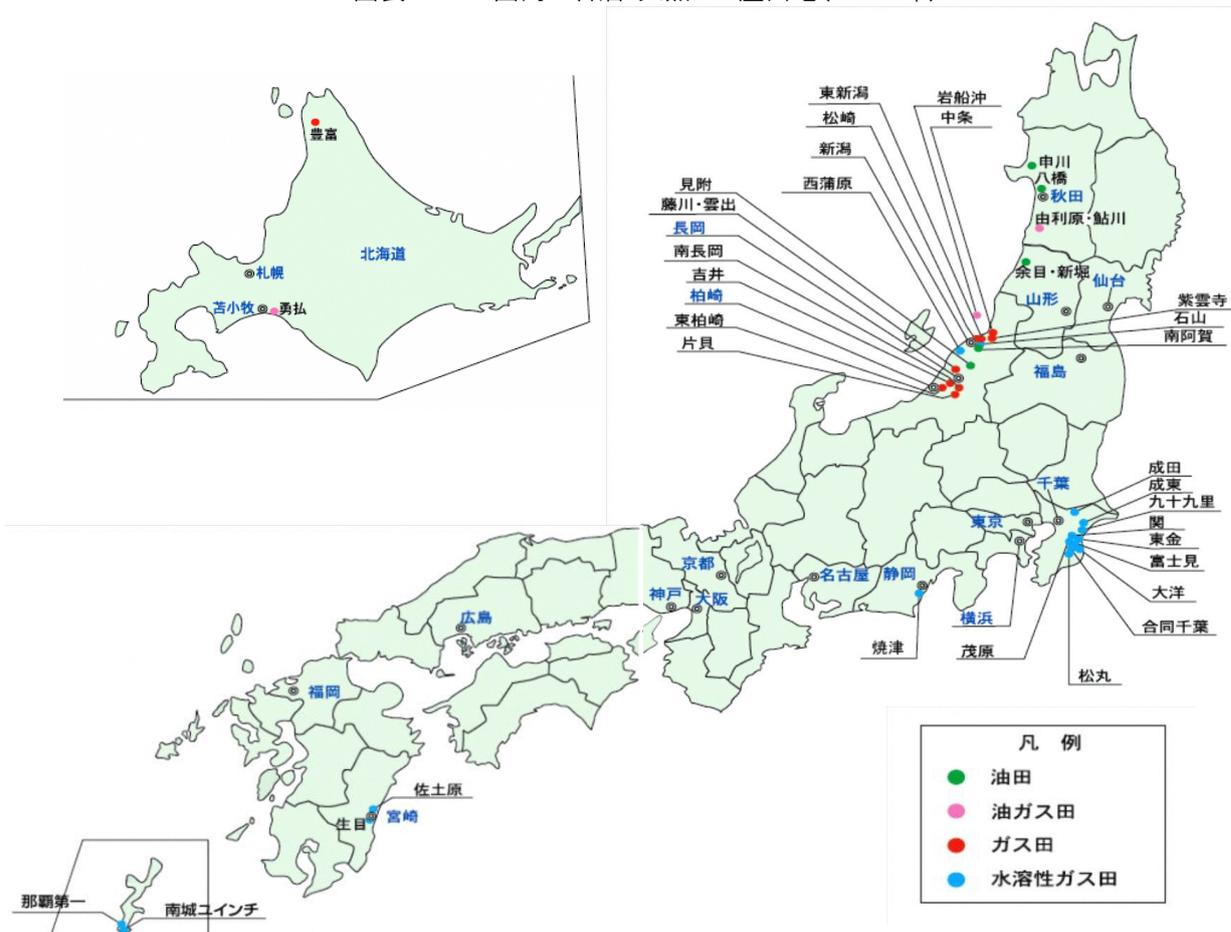
- ・石油・天然ガスが産出される地域は国内でも限られています(図表2-21)。
- ・新潟県は、古くから石油の存在が確認され、国内トップの産出量を誇ります。現在、上越市で産出はありませんが、かつてはその一翼を担っていました。

図表 2-20 関川水系の水力発電所



出所) 西山耕一「電気が創った上越近代化物語」、p. 95、2017

図表 2-21 国内の石油・天然ガス産出地(2018年)



出所) 天然ガス鉱業会「わが国の石油・天然ガスノート」、2018

- ・明治に入り、石油が商品として取り扱われたことに伴い、新潟を中心として石油ブームが起こりました。明治6年頃、上越市内でも板倉を中心に油田が開発され、続いて牧・名立・五智・郷津などで油田が発見されます。
- ・上越市の玄籐寺油田では、明治11年に日本で最初に機械掘りが成功した³¹とされているほか、明治12年には日本初の石油パイプラインが完成しました³²。
- ・明治21年、現在の上越市が属していた頸城郡において、国内の石油産出量の約3分の1を産出した記録が残っています³³。
- ・明治33年、当時東洋一の規模といわれた製油所（インターナショナル石油会社）が上越市に進出しました³⁴。
- ・その後産出量は伸びず、細々と採油する時期が続きましたが、昭和34年に新たな油層が発見され、市内の油田（頸城油田）は日本一の産出量を誇った時期もありました³⁵。（平成13年操業停止）

³¹機械掘り（網式削井法）が本格的に使用されたのは、明治24年の日本石油による尼瀬の掘削からである。（島津光夫「新潟の石油・天然ガス 一開発の一三〇年一」、p. 27. 46、野島出版、2000）

³²上越市ホームページ（上越市の近代史に輝く先人たち）

³³新潟県社会科教育研究会「新潟県上越地方の地誌」、p. 132、あかつき印刷、1978

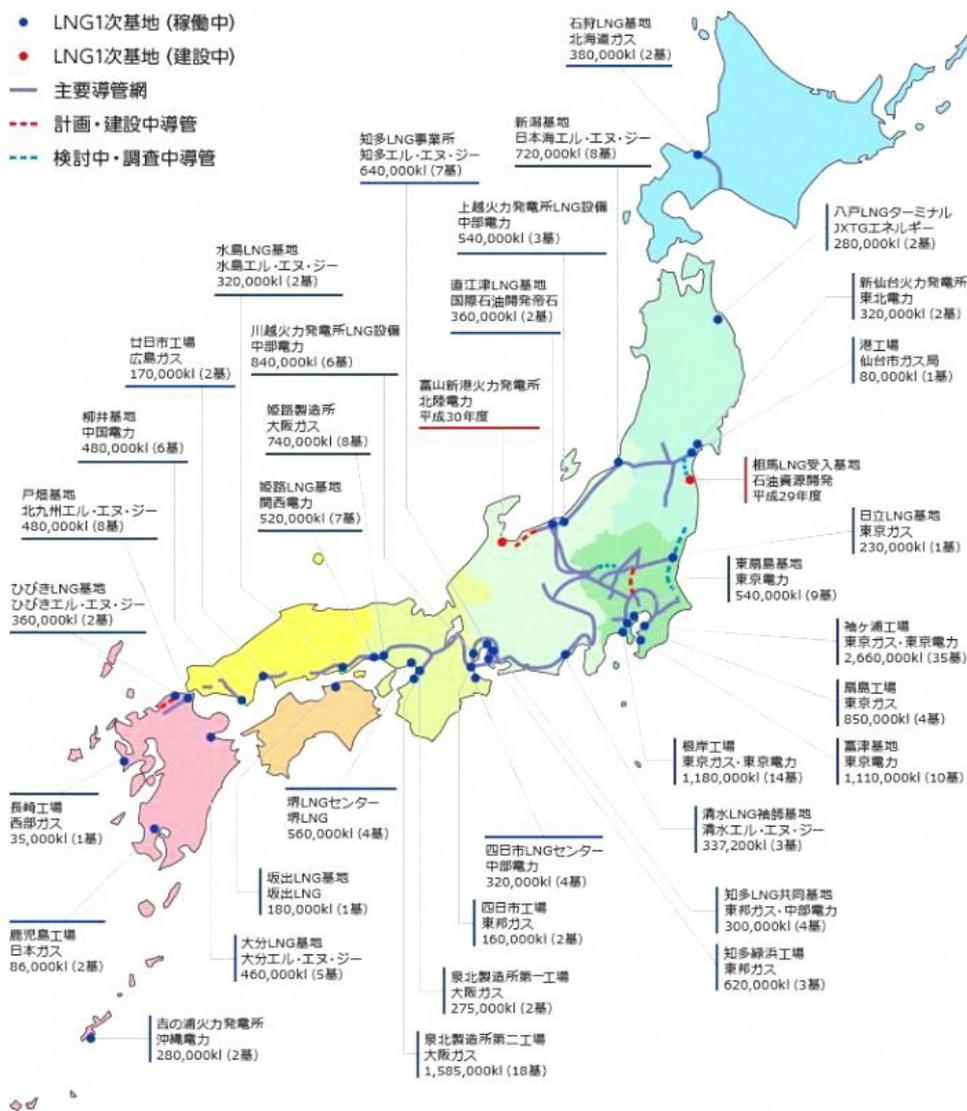
³⁴新潟県社会科教育研究会「新潟県上越地方の地誌」、p. 132、あかつき印刷、1978

³⁵新潟県社会科教育研究会「新潟県上越地方の地誌」、p. 134、あかつき印刷、1978

★ 天然ガスに関する国内有数の拠点

- ・石油同様、新潟県は国内トップの天然ガス産出量を誇ります。現在、上越市での産出はありませんが、それにちなんだ施設が残っています。
- ・天然ガスは、戦前までは自家燃料に使用していた程度でしたが、戦後、燃料不足の解消や化学製品の原料として注目され需要が急増します。
- ・昭和30年、市内初のガス田が誕生し、その後相次いでガス層が発見されました。その結果、市内のガス田（頸城ガス田）は日本一の産出量を誇った時期もありました³⁶。（平成13年操業停止）
- ・平成23年、LNG（液化天然ガス）部門の日本海側拠点港³⁷の1つに直江津港が選定され、平成24年にはLNGの火力発電所、平成25年にはLNG基地が相次いで稼働しました。ここからガスを関東や北陸方面へ、電力を長野方面へ供給しています(図表2-22)。

図表2-22 国内のLNG基地と主要パイプライン(2017年8月現在)



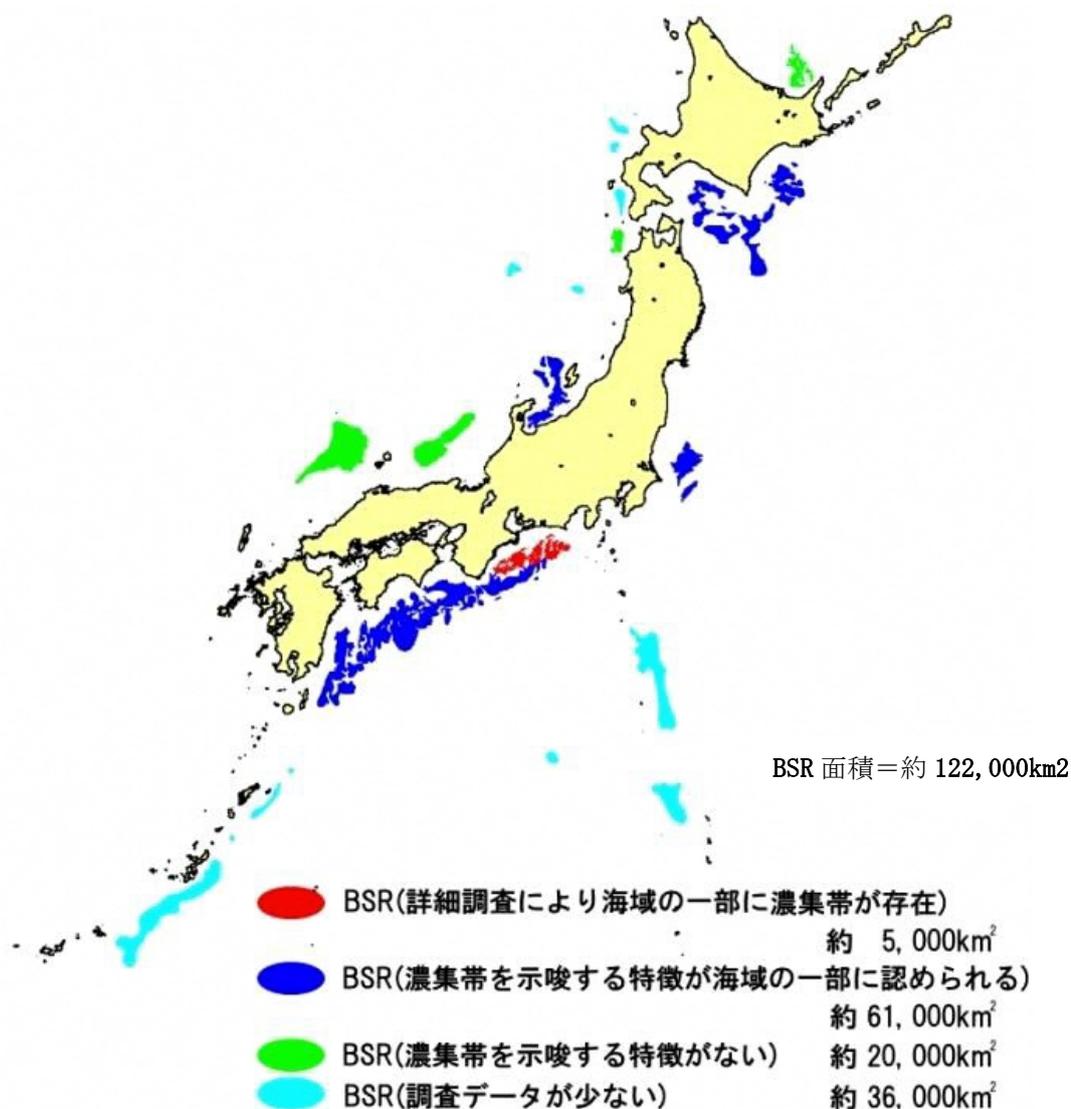
出所) 一般社団法人日本ガス協会「天然ガス自動車の普及に向けて パンフレット」

³⁶新潟県社会科教育研究会「新潟県上越地方の地誌」、p. 134、あかつき印刷、1978

³⁷新潟港、石狩港新港とともに3か所選定。

- ・近年は、次世代の国産エネルギーとして注目されるメタンハイドレートの採取地として期待が高まっています。
- ・メタンハイドレートの調査は、石油や天然ガスと同様に、音波を使った物理探査（反射法地震探査）によって実施され、調査データからBSR（海底擬似反射面：bottom simulating reflector）と呼ばれる反射面を確認することで、その存在が推定されています。（図表 2-23）。
- ・平成 25～27 年度にかけて、国が行った表層型メタンハイドレート³⁸の調査では、国内数か所の調査地で唯一、上越沖の日本海が初年度から連続して選ばれています³⁹。

図表 2-23 日本周辺のBSR分布図(2009 年)



出所) メタンハイドレート資源開発コンソーシアムホームページ

³⁸ 「メタンガス」が水分子と結びついた氷状の物質で、次世代エネルギー資源として期待されている。南海トラフなどで見られる海底の下の地層中に存在する「砂層型」と、日本海側に多く見られる海底の表面付近に存在する「表層型」がある。

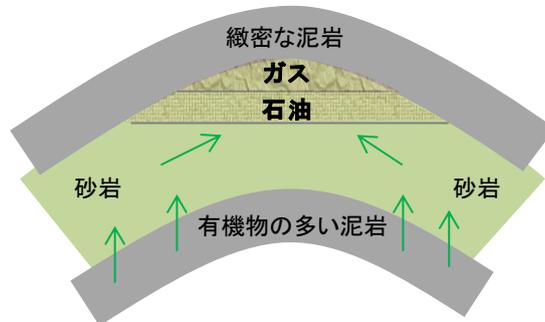
³⁹ 経済産業省プレスリリース資料

特徴が形成された背景・要因

▶ 地質構造

- ・上越市は、フォッサマグナの真上に位置し、かつて海の底にあったため、石油・天然ガスのもととなるプランクトンなどの有機物を含む地層が堆積しました。
- ・その上に海底火山による溶岩や、陸地から運ばれた砂や泥が堆積し、石油・天然ガスをためる砂岩層とその拡散を防ぐ泥岩層が交互に重なりました。
- ・この地層が地殻変動で褶曲することで、山形の背斜部に石油や天然ガスが集積しやすい構造となりました(図表 2-24)。

図表 2-24 褶曲構造と石油の移動・集積



▶ 気候と地形

- ・上越市周辺は、国内有数の豪雪地帯のため融雪期を中心に水量が豊富です。
- ・また、標高約 2,400m から流れる関川の上流は落差が大きく、水力発電に適した地形と言えます。

特徴が地域に与えた影響（例）

- ・明治から昭和初期には、電力会社が主導し、水力発電所の建設とともに化学・金属関係の工場の設置や誘致を進めました。その後、天然ガスの産出に伴う、化学・金属関係の工場も立地しました。これらの関連工場として、金属・機械・電子・精密機器などの工場も立地しました。
➡ (9) 製造業の項を参照
- ・農村への電動機普及に伴い農機具工業の発展にもつながりました⁴⁰。
➡ (9) 製造業の項を参照
- ・エネルギー資源の存在は、工場以外の立地にも影響を与えました。例えば、水力発電所の存在は、陸軍第13師団の誘致成功の一因となり⁴¹、その後のスキー産業の発達や、朝市の発達、様々な商店の創業などにつながりました。
➡ (9) 製造業の項を参照
- ・天然ガスの産出とともに温泉が噴出し、温泉街（鶴の浜温泉）が形成されました⁴²。
- ・天然ガスやメタンハイドレートが存在する海底では、メタンガスを含む水が湧き出ており、メタンをエネルギー源とする微生物などの豊富な場所となるため、それらを餌とするベニズワイガニなどの漁場ともなっています⁴³。

⁴⁰上越市史編さん委員会「上越市史 通史編近代5」、p.512、上越市、2004

⁴¹西山耕一「電気が創った 上越近代化物語」、p.28、東北電力、2017

⁴²島津光夫「新潟の石油・天然ガス 一開発の一三〇年一」、p140、野島出版、2000

⁴³北日本新聞（2015/8/23）

(6) 交通

上越市は、古くから日本海沿いの幹線道路と長野県をはじめ内陸部や太平洋側に至る幹線道路が結節する地域です。また、本州日本海側で2番目に開通した鉄道に加え、北陸・上越の2つの新幹線を活用できる地域となるなど、道路と同様に古くから幹線鉄道が結節する地域です。さらに、中世には日本の港ベスト10、現在は重要港湾の一つである日本海側の主要な港の一つ(直江津港)が存在します。このように古くから幹線交通の結節点として恩恵を受けてきた地域です。

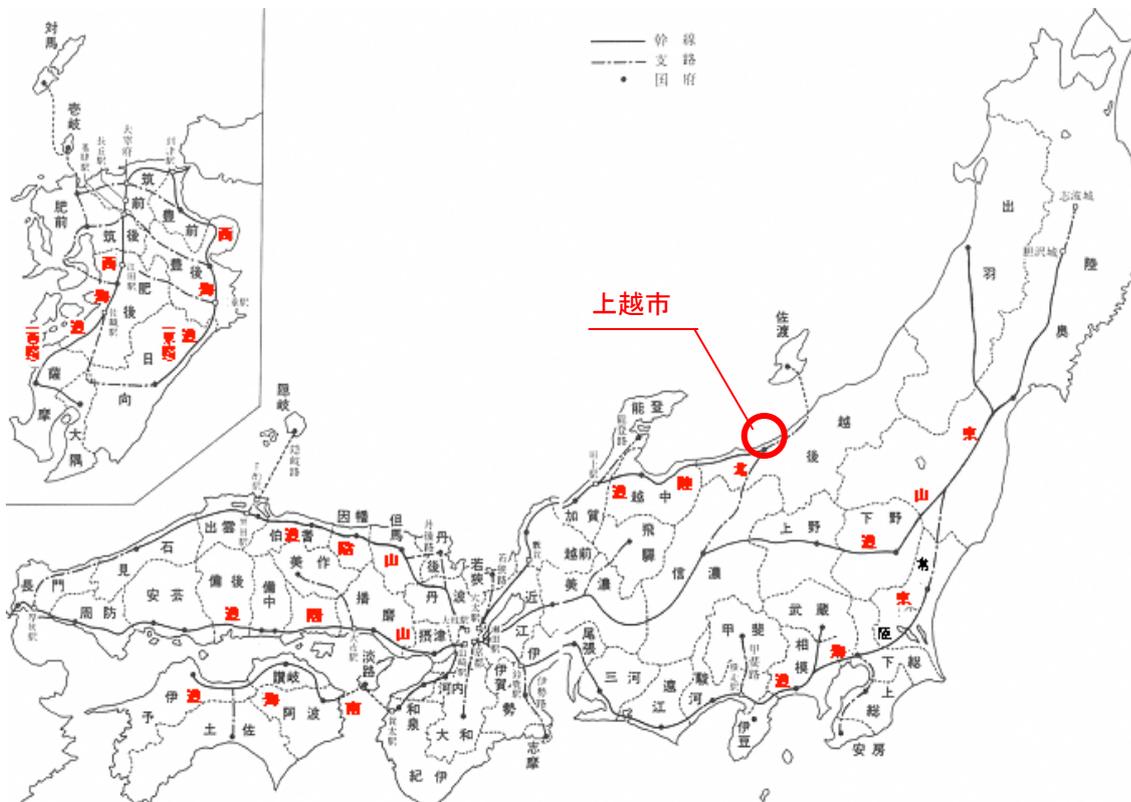
こうした特徴の背景には、上越市が日本海に面し近隣に高山帯を有するなどの“地の利”があり、その利を活かして整備された街の力が挙げられます。

主な特徴

★ 古くから幹線道路が結節する地域

- ・ 古代には、中央と地方諸国を結ぶ幹線道路（七道駅路）が整備されましたが、上越市は日本海側を通る「北陸道」と長野方面へ向かう「東山道支道」が結節する地域でした(図表 2-25)。
- ・ 江戸時代には、幕府が江戸を起点とする五街道や脇街道を整備しましたが、上越市には、五街道に次ぐ重要な脇街道（主要脇街道）の一つである「北国街道」と「加賀街道」⁴⁴が結節していました(図表 2-26)。

図表 2-25 律令政府による七道駅路(7世紀後半)



出所) 児玉幸多「日本交通史」、p.24.25、1992

⁴⁴街道の呼称は、複数存在する。

図表 2-26 国内の主要街道(江戸時代)



出所) 国土交通省ホームページ

- ・明治 18 年には、全国 44 路線が国道に認定され、上越市は、東京～新潟を結ぶ「5 号線」と東京～富山を結ぶ「21 号線」の分岐点となりました⁴⁵。戦後、現在の「8 号線」(新潟～京都)と「18 号線」(上越～高崎)に再編されましたが、引き続き 2 つの主要な国道をつなぐ結節点となっています。
- ・現在は、昭和 63 年に全線開通した「北陸自動車道」と平成 11 年に全線開通した「上信越自動車道」をつなぐジャンクションがあります。市内には 6 つのインターチェンジがあり、首都圏・中京圏・関西圏などにつながっています。

★ 古くから幹線鉄道が結節する地域

- ・明治 19 年、信越本線の直江津-関山間が開通し、その 7 年後には高崎まで全線開通しました。直江津駅の開業は、本州の日本海側では敦賀に次ぐ 2 番目の早さでした(図表 2-27)。
- ・その後、新潟方面の信越本線や北陸方面の北陸本線⁴⁶が開通し、直江津駅は日本海側と太平洋側をつなぐ重要な駅となりました。
- ・直江津-関山間には、スイッチバック⁴⁷による二本木駅が作られました。現在、スイッチバックの駅は日本全国でも数えるほどしかなく、J R 東日本管内では、二本木駅と姨捨駅(長野県)の 2 か所しか存在しません⁴⁸。
- ・平成 9 年に開業した「ほくほく線」により、上越新幹線を使った首都圏へのアクセスが便利になる一方、同年に開業した長野新幹線を利用するルートも生まれました。平成 27 年には北陸新幹線が金沢まで延伸し、市内に待望の新幹線駅(上越妙高駅)が開業しましたが、今もなお上越新幹線と共に 2 つの新幹線を使い分けることができる珍しい地域です。

⁴⁵国道表(明治 18 年 2 月 24 日内務省告示第 6 号)、一般国道の路線を指定する政令(昭和 40 年 3 月 29 日)

⁴⁶現在、信越本線や北陸本線の一部は名称変更し、第 3 セクターによる鉄道会社(えちごトキめき鉄道)が経営。

⁴⁷スイッチバックとは、急勾配を登坂するためにとられた運転形式のこと。(J R 東日本長野支社ホームページ)

⁴⁸中郷商工会「nakago 鉄旅プロジェクト鉄道資源活用地域商業活性化事業 事業成果報告」、p. 34、2016

図表 2-27 国内における鉄道の整備状況(1890年)

(主な区間のみ)



開業年	区間	備考
1872	新橋～横浜	日本初
1874	大阪～神戸	西日本初
1880	札幌～手宮(小樽)	北海道初
1882	長浜～金ヶ崎(敦賀港)	本州日本海側で最初
1884	高崎線(上野～高崎)全通	
1886	直江津～関山	本州日本海側で2番目 軽井沢までは1888年開通
1889	東海道線(新橋～神戸)全通	
1893	信越本線(直江津～高崎)全通	東京まで直結
1899	直江津～沼垂(新潟)	新潟までの全通は1904年
1911	直江津～名立	関西までの全通は1913年

出所) 老川慶喜「日本鉄道史 幕末・明治篇」、2014などを基に修正

★ 日本海側の主要な港の一つ(直江津港)が存在

- ・室町時代、直江津は日本の港ベスト10である三津七湊の一つに数えられ、廻船の寄港地となっていました。越後国府が置かれた地の港として繁盛し、日本各地から商人や商品が行き交っていました(図表 2-28)。
- ・江戸時代にも海産物や年貢米を運ぶ北前船が寄港し、直江津は港町として栄えました。

図表 2-28 室町時代の三津七湊



出所) 北陸地域づくり協会「北陸の視座」、vol.30

- 直江津港は、昭和 26 年には、現在全国 994 港中 102 港ある重要港湾⁴⁹の一つとなり、佐渡定期航路を有するほか、一時期は九州や北海道を結ぶフェリー航路もありました。
- 現在、韓国や中国への国際定期コンテナ航路が開設され、コンテナ取扱貨物量は、全国のコンテナ取扱港 135 港中 46 位となっています（図表 2-29）。

図表 2-29 港湾別コンテナ取扱量ランキング
(2015 年)

順位	種類 ※1	所在地	港湾名	コンテナ取扱量(個) ※2
1	◎	東京都	京浜【東京】	4,628,705
2	◎	神奈川県	京浜【横浜】	2,787,296
3	◎	兵庫県	阪神【神戸】	2,706,967
4	○	愛知県	名古屋	2,630,803
5	◎	大阪府	阪神【大阪】	2,221,827
6	○	福岡県	博多	940,946
7		沖縄県	那覇	523,004
8	○	静岡県	清水	506,965
9	○	福岡県	北九州	498,798
10	○	北海道	苫小牧	310,936
11	○	新潟県	新潟	230,195
		⋮		
45		愛媛県	今治	31,948
46		新潟県	直江津	30,056
47		茨城県	茨城	28,556
		⋮		

※1 ◎国際戦略港湾、○国際拠点港湾、無印は重要港湾または地方港湾

※2 長さ 20 フィートのコンテナ 1 本を 1 個としてカウント、TEU (Twenty-foot Equivalent Unit) ともいう。
出所) 国土交通省ホームページ統計情報を基に当研究所作成

特徴が形成された背景・要因

▶ 位置・地形

- 上越市が交通の結節点となった要因には、国内における上越市の位置と周辺の地形がもたらした「地の利」によるところが大きいといえます。
- 上越市の位置は、関西・北陸地方や新潟・佐渡地方、東北地方を結ぶ日本海側の幹線上にあります。また、日本海側から内陸部や太平洋側へ向かうルートは、地形や気候などの制約から限定され、上越市から南下するルートは古くから重要な存在であったといえます。
- この結果、上越市に陸路の結節点が生まれました。中でも、鉄道（信越本線）の早期開通については、当初、東京-大阪間の幹線鉄道が計画されていた中山道への資材運搬線などとして、評価されたものと考えられています⁵⁰。
- さらに、大量の物資を運ぶ観点から、日本海に面し陸路の結節点を有することが、港の開発や発展にもつながりました。

特徴が地域に与えた影響（例）

- 交通の結節点であることは、国府、春日山城、高田城などの政治的な拠点が置かれる大きな要因となり、まちと交通網の発展を相互に支えました。
- 明治時代には、こうした「地の利」と豊富なエネルギー資源との組み合わせにより、**化学・金属関係の工場**の進出や陸軍第 13 師団の誘致などが行われました。

➡ (9) 製造業の項を参照

- これらは、当時の地域経済の基盤となり、それらに付随して生まれた様々な産業と合わせて、人々の暮らしを支えました。この中には、**老舗企業**や城下町の**雁木通り**などとして今日まで残り、まちの歴史・文化的価値を高めているものもあります。

➡ (8) 食品産業・(10) 建築の項を参照

⁴⁹国土交通省「港湾数一覧、国際戦略港湾、国際拠点港湾及び重要港湾位置図」、2017

⁵⁰ 上越市史編さん委員会「上越市史 通史編 5 近代」、p.99、上越市、2004

(7) 農業

上越市では、米の作付面積・収穫量が国内トップクラスであるほか、価格や食味でも高い評価を得ています。また、世界かんがい施設遺産に登録された用水路や、棚田百選に選定された2つの棚田を有するなど歴史的・景観的な評価も得ており、国内有数の米どころとすることができます。こうした特徴の背景には、雪国の気候や豊富な雪融け水、地すべり地帯などといった米の生育に適した自然環境に加え、戦後の品種改良によるコシヒカリの開発努力などがありました。

主な特徴

★ 国内有数の米どころ

・平成28年の水稲作付面積は11,100haで全国4位、水稲収穫量は60,300tで全国7位です(図表2-30)。

図表 2-30 米の作付面積および収穫量国内ベスト10(平成28年)

水稲作付面積			水稲収穫量		
順位	都道府県市町村	単位:ha	順位	都道府県市町村	単位:t
1	新潟市(新潟県)	24,300	1	新潟市(新潟県)	151,100
2	大仙市(秋田県)	12,800	2	大仙市(秋田県)	77,500
3	長岡市(新潟県)	12,600	3	長岡市(新潟県)	73,300
4	上越市(新潟県)	11,100	4	鶴岡市(山形県)	65,100
5	鶴岡市(山形県)	10,900	5	横手市(秋田県)	63,900
6	横手市(秋田県)	10,600	6	大潟村(秋田県)	60,700
7	奥州市(岩手県)	10,300	7	上越市(新潟県)	60,300
8	登米市(宮城県)	10,300	8	登米市(宮城県)	60,000
9	大崎市(宮城県)	10,300	9	大崎市(宮城県)	57,900
10	大潟村(秋田県)	10,100	10	奥州市(岩手県)	56,300

出所) 農林水産省ホームページを基に当研究所作成

- ・米の品質や美味しさを評価する指標はいくつかありますが、全国的に知られている「米の食味ランキング⁵¹⁾」では、新潟県産コシヒカリの多くが最上級の特Aを頻繁に取得し、「上越産コシヒカリ」も平成25年から5年連続で取得しています。ただし、近年では全国的に特Aの米が増加し、平成29年産米では151産地品種のうち43品種⁵²⁾が特Aとなるなど、全国的に米の美味しさが向上しています。
- ・平成28年産米の相対取引価格(出荷業者・通年平均)では、上越産が含まれる「コシヒカリ(新潟一般)」が全国第7位の高価格となっています(図表2-31)。

図表 2-31 米の価格/国内ベスト10(平成28年)

(主食用1等、円/玄米60Kg(税込))

順位	産地	地域区分	品種銘柄	価格
1	新潟	魚沼	コシヒカリ	20,434
2	山形		つや姫	17,848
3	山梨		コシヒカリ	16,969
4	新潟	佐渡	コシヒカリ	16,968
5	新潟	岩船	コシヒカリ	16,834
6	北海道		ゆめぴりか	16,479
7	新潟	一般	コシヒカリ	16,175
8	熊本		コシヒカリ	15,767
9	福岡		夢つくし	15,761
10	福岡		元気つくし	15,612

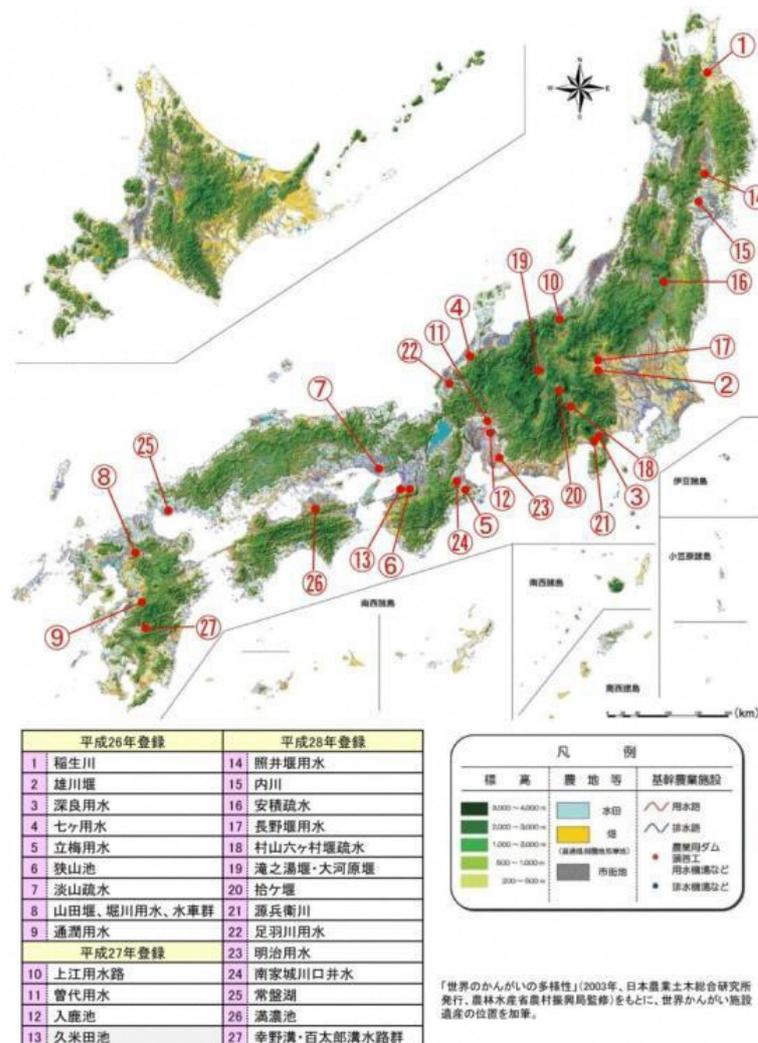
出所) 農林水産省「平成28年産米の相対取引価格(出荷業者・通年平均)」を基に当研究所作成

⁵¹⁾日本穀物検定協会が実施する、電気炊飯器で炊いて実際に食べて決める食味試験。

⁵²⁾日本穀物検定協会ホームページ(米の食味試験) <http://www.kokken.or.jp/test.html>

- ・市内の中山間地域では、古くから棚田による米づくりが行われてきました。市内にある、上船倉（安塚区）、蓮野（大島区）の棚田は、日本の棚田 100 選に選定されています⁵³。
- ・上越市では、江戸時代に、大規模な用水・新田開発が行われました。例として、「上江用水」は、多くの農民の努力と資金により約 400 年前（天正年間）から 130 年かけて掘り継がれたものであり、平成 27 年に県内施設では初めて世界かんがい施設遺産に登録されました⁵⁴（図表 2-32）。
- ・なお、関川水系の上・中流にある水力発電所の放流水は、最終的に「上江用水」の農業用水として利用されており、農業と発電の共存も図られている点も特徴的といえます。
- ・1678 年高田藩老中の小栗美作の指揮の下で完成した「中江用水」は、総延長約 26 km で当時の農業土木工事としては最大級⁵⁵といわれています。

図表 2-32 国内の世界かんがい施設遺産



出所) 全国水土里ネットホームページ

⁵³日本棚田百選は、多面的機能を有している棚田について、その保全や保全のための整備活動を推進し、農業農村に対する理解を深めるため、農林水産省が優れた棚田 134 地区 (117 市町村) の認定を行ったもの。(地域環境資源センターホームページ <http://www.acres.or.jp/>)

⁵⁴世界かんがい施設遺産は、国際かんがい排水委員会が平成 26 年度に創設したもので、H27 年の遺産登録は、3 か国 9 施設、うち国内は 4 施設となっています。(新潟県ホームページ <http://www.pref.niigata.lg.jp/nochikanri/1356831544817.html>)

⁵⁵水土里ネット関川水系「悠久の恩人「小栗美作」と中江用水の恵みパンフレット」

特徴が形成された背景・要因

▶ 気象

- ・上越市は周辺を山地に囲まれており、そこに積もる雪は巨大なダム役割を果たしています。この雪が少しずつ融けて、稲が生育している間、冷たくきれいな水を供給します。
- ・さらには、春先から夏の多照が水稻の生育を促し、穂が出て実るまでの平均気温は粳が熟するのに最適な温度となります⁵⁶。このほか、他の産地と比べ、冷害や台風の被害も少ない地域でもあります。
- ・ただし、根雪が苗代づくりを遅らせ、夏の厳しい暑さが早生稲の発育や肥大を阻害したり、秋から冬にかけての長雨は稲の収穫作業と乾燥を妨げるなど、米づくりに不利な面もあるとされています。米づくりの発展は、好条件を活かしながら、こうした難点を、品種改良や栽培技術、治水・土地改良などで克服してきた結果ともいえます。

▶ 地形・地質

- ・地すべり地帯が数多く存在した上越市では、丘陵地に縄文時代の遺跡が分布しており、少なくとも古代には棚田が形成されていたと推測されています⁵⁷。機械化が進む以前は、地すべりによって耕された土地や地すべり面に沿って存在した豊富な地下水が、米づくりに適した条件を生み出しました。斐太遺跡群は、弥生時代から古墳時代にかけて、稲作に適した扇状地という生産力を背景として、地域の中心となる集落であったとされています⁵⁸。
- ・また、信濃川など県内の大河川流域は、河川の沖積によって形成された肥沃な平野であり、全国の中でも少ない化学肥料で栽培ができ、美味しい米が作られる条件を持つとされています。一方で、肥沃である分、肥培管理が難しい点もあり、栽培技術も重要であったといえます。

▶ 江戸時代の用水・新田開発

- ・上越市は、江戸時代に行われた用水・新田開発により、平野での生産量が増加し、現在の穀倉地帯に成長しました。排水の悪さに悩まされてきた中越・下越地方に比べ、上越市では一部地区を除いて、「各河川の水面は低く、水田への干害に苦しんできた」⁵⁹とされています。

▶ 品種改良

- ・新潟県の米の食味向上には、コシヒカリの誕生が大きく影響しています。コシヒカリ誕生までには様々な困難があったとされており、昭和19年に新潟県で交配された後、福井県で育てられた品種が再び新潟県に戻り、昭和31年に新潟県の推奨品種として選定されました。コシヒカリは味が良い反面、病気に弱く倒れやすい品種で、最初は栽培が少なかったものの、栽培技術や農家の努力などにより栽培面積が増えていきました。
- ・また、新潟県で開発されたコシヒカリ、こがねもち、五百万石などの品種は、他県の産米改良にも大きく貢献したとされています。うるち米（醸造用米、もち米を除く）では、全国の作付面積第

⁵⁶新潟県の気候は、「稲の穂が出て実るまでの平均気温は24～25度前後であり、粳が熟するのに最適な温度になっている。これより低い温度で熟すとアミロース澱粉の割合が増して、粘りの少ないご飯になってしまう。逆に、高い温度では米粒の中の澱粉の充実が不十分になって品質が劣ってくる」とされている。（諸橋準之助「新潟の米ものがたり」、p. 65-66）

⁵⁷上越市史編さん委員会「上越市史 通史編1 自然」、p. 66

⁵⁸上越市「斐太遺跡群パンフレット」

⁵⁹児玉彰三郎監修、新潟県農村社会研究会編「越佐農民の歩み」、p. 183、信教印刷株式会社、1971

1位は「コシヒカリ」であり、第2位の「ひとめぼれ」もコシヒカリを交配したものです⁶⁰。また、酒造好適米では、「五百万石」が「山田錦」に次いで全国第2位の作付面積です⁶¹。

- ・なお、近年では米の消費量が減少している中、消費ニーズに対応した品種の多様化が進む傾向もあります。上越市内でも高アミロース米「越のかほり」⁶²の普及に向けた取組などが行われています。

特徴が地域に与えた影響（例）

- ・米の生産が盛んであったことと、発酵に適した雪国の気候から、米を使った発酵食品である日本酒や味噌も盛んに作られることとなりました。

➡ (8) 食品産業の項を参照

⁶⁰米穀安定供給確保支援機構「平成28年産水稻の品種別作付動向」

⁶¹農林水産省「日本を巡る状況」、2016

⁶²（独）農研機構中央農業研究センター北陸研究拠点（旧北陸研究センター）で、麺やパンなどへの米粉の利用を目的として開発された粘りが少ない米（高アミロース米）（農研機構ホームページ

http://www.naro.affrc.go.jp/publicity_report/press/laboratory/narc/013023.html)

(8) 食品産業

上越市では、全国有数の蔵元数や消費量を誇る清酒のほか、全国的に評価の高いワインや味噌など、質の高い雪国ならではの発酵食品が製造されています。また、江戸時代から続く県内一・二の歴史を持つ和菓子屋の老舗もあります。

こうした特徴の背景には、米どころであることに加え、雪国独特の気候や冬を過ごすための保存の知恵、東西日本の境界に近い位置などを挙げるすることができます。

主な特徴

★ 質の高い雪国ならではの発酵食品

▶ 日本酒

- ・清酒の製造免許場数を都道府県別に見ると、新潟県は97場であり、全国1位です⁶³。
- ・国内524か所の税務署が所管する地域のうち、高田税務署管内（上越市および妙高市）には16場（うち上越市には12場）あり、全国7位の多さを誇っています(図表2-33)。

図表 2-33 税務署管内の酒蔵数/国内ベスト10
(平成28.3.31現在)

順位	税務署名	清酒 免許場数
1	伏見(京都府)	28
2	久留米(福岡県)	23
3	会津若松(福島県)	22
4	長岡(新潟県)	18
4	長野(長野県)	18
6	福井(福井県)	17
7	高田(新潟県)	16
7	芦屋(兵庫県)	16
7	奈良(奈良県)	16
10	葛城(奈良県)	15
10	西条(広島県)	15

出所) 国税庁ホームページ統計データを基に当研究所作成

- ・一人当たりの清酒消費量を都道府県別に見ると、新潟県は全国1位であり、2位に大きな差をつけています。その中でも高田税務署管内（上越市および妙高市）は、県平均を上回る消費量となっています(図表2-34)。

図表 2-34 一人当たりの清酒消費量/都道府県別・新潟県内ランキング
(平成28.3.31現在)

順位	都道府県名	一人当たり消費量 (清酒)(ℓ)
1	新潟県	10.480
2	秋田県	7.825
3	石川県	7.504
4	福島県	6.648
5	山形県	6.626

順位	新潟県内 税務署名	一人当たり消費量 (清酒)(ℓ)
1	小千谷	14.65
2	村上	14.29
3	巻	13.17
4	十日町	12.32
5	高田	10.61
6	長岡	10.08
7	新潟	10.06
8	佐渡	9.80
9	三条	9.22
10	柏崎	9.03
11	糸魚川	8.97
12	新津	8.82
13	新発田	8.76

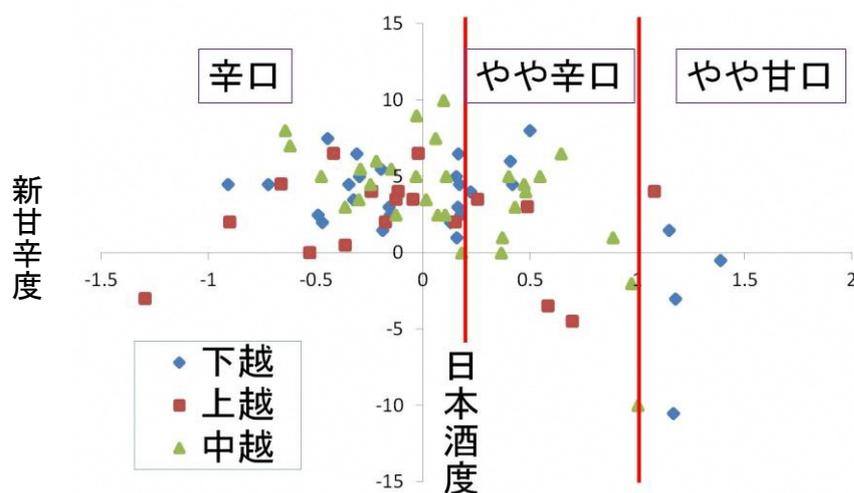
出所) 国税庁統計データ及び平成27年国勢調査人口を基に当研究所作成

⁶³新潟県ホームページ（平成29年度版 統計グラフでみる新潟県 新潟県の日本一）

<http://www.pref.niigata.lg.jp/tokei/1356865357142.html>

- 新潟県は、淡麗辛口の日本酒が特徴的であるとして、全国的にも高い評価を受けてきました。その中において、上越地域は、かつては甘口と言われていましたが、現在は甘口から辛口の幅が広く分布しており、県内でもより多様な味の地域という見方もできます(図表 2-35)。

図表 2-35 新潟県の純米酒の甘辛分布



出所) 新潟県醸造試験場作成資料(平成 27 年)を基に当研究所にて加筆修正

- 新潟県からは、岩手県の南部杜氏、兵庫県の丹波杜氏と並んで、越後杜氏と呼ばれる有能な杜氏が輩出されました。越後杜氏は、さらに出身地域別に分かれ、刈羽杜氏、三島杜氏、野積杜氏と並んで、頸城杜氏(上越・妙高・柿崎・吉川)がありました⁶⁴。
- 新潟県には、全国で唯一の日本酒専門の県立機関である新潟県醸造試験場があり、技術指導や酒造好適米の開発が行われています。試験場が設立されたきっかけとしては、明治時代以降、酒造技術が全国に普及して生産量が増加する中で、産地間競争が激しくなったことに加え、羽越線の開通などで他の産地から酒が移入する危機感が高まったことなどが言われています⁶⁵。

▶ ワイン

- 上越市内には「日本のワインぶどうの父」と呼ばれる川上善兵衛が開いた岩の原葡萄園があります。善兵衛は、日本赤ワインの代表品種であるマスカット・ベリーAを始め、日本の風土に適した品種を生み出し、国産ワインの礎を築き上げた人物です。
- 岩の原葡萄園のワインは、平成 27 年日本ワインコンクール⁶⁶で、国内改良品種の 112 品中最高賞を受賞するなど高く評価されています。

⁶⁴新潟市歴史博物館「平成 20 年度企画展 酒蔵～近代新潟の酒造り～」、p. 36、2008

⁶⁵新潟市歴史博物館「平成 20 年度企画展 酒蔵～近代新潟の酒造り～」、p. 30、2008

⁶⁶国産ブドウを 100% 使用して造られたワインを対象とした日本唯一のコンクール(国産ワインコンクールホームページ)

▶ 味噌

- ・上越市で作られている味噌は、その年の“日本一の味噌”を決定する「全国味噌鑑評会」⁶⁷で毎年受賞しています。平成 29 年度は、全国の味噌 434 点の中から、農林水産大臣賞が 6 点、食料産業局長賞各賞が 15 点選ばれましたが、うち上越市内の味噌は食料産業局長賞に 2 点選ばれました。
- ・昭和 30 年代頃まで、多くの家で自家製造をされていた味噌は、「その気候や風土、農産物、その土地の人たちの嗜好性などによって味や色調の方向が決まっているといってもよい」⁶⁸と言われるなど、時代が変わっても地域色が残っている食品であるといえます。
- ・上越市の味噌が含まれる越後味噌は、辛口味噌に分類されています(図表 2-36)。その中でも上越市の味噌は、麴の割合が高く、大豆 10 に対して 10 前後の麴が使用されています⁶⁹。また、味噌汁にすると麴の粒が浮いてくる「浮き麴味噌」もこの地域の特徴的な味噌です。

★ 県内一・二の歴史を持つ和菓子屋の老舗

- ・新潟県は創業 100 年を超える老舗企業が全国で 5 番目に多いとされています。その中でも、県内で歴史の長い上位 10 社に、栗飴や翁餅(翁飴)⁷⁰の製造から始まった市内の老舗菓子屋が 2 社入っています(図表 2-37)。

図表 2-36 味噌の分類

原料による分類	味による分類	色による分類	配合		醸造期間	産地	主な銘柄
			麹割合	塩分(%)			
米味噌	甘味味噌	白	15~30	5~7	5~20日	近畿地方、岡山、広島、山口、香川	白味噌、府中味噌、讃岐味噌
		赤	12~20	5~7	5~20日	東京	江戸甘味噌
	甘口味噌	淡色	10~20	7~12	20~30日	静岡、九州地方	相白味噌
		赤	10~15	11~13	3~6か月	徳島	御前味噌
辛口味噌	淡色	5~10	11~13	2~3か月	関東甲信越・北陸地方、その他全国各地	信州味噌	
	赤	5~10	11~13	3~12か月	関東甲信越・東北地方、北海道、その他全国各地	信白味噌、北海道味噌、津軽味噌、秋田味噌、会津味噌、越後味噌、佐渡味噌、加賀味噌	
麦味噌	淡色	15~25	9~11	1~3か月	九州・四国・中国地方		
	赤	8~15	11~13	3~12か月	九州・四国・中国・関東地方		
豆味噌			全量	10~12	5~24か月	愛知、三重、岐阜	八丁味噌
混合味噌	米味噌・麦味噌・豆味噌を混合したものや、米麴と麦麴のように複数の麴を混合して醸造したもの						

出所) 小泉武夫「醤油・味噌・酢はすごい」2016

図表 2-37 創業 100 年を超える老舗企業 /新潟県内ベスト 10

順位	創業年	企業名(所在地)	業種
1	1075	高半ホテル(湯沢町)	旅館業
2	1548	吉乃川(長岡市)	清酒製造業
3	1592	大杉屋惣兵衛(上越市)	菓子小売行
4	1603	種権種苗店(新発田市)	卸売業
5	1610	本陣リゾート(湯沢町)	旅館業
6	1616	油屋久助商店(長岡市)	食料卸売業
7	1624	高橋孫左衛門商店(上越市)	あめ製造業
8	1626	高橋商会(村上市)	卸売業
9	1626	きっかわ(村上市)	塩干・塩藏品製造業
10	1629	田辺喜平商店(加茂市)	紙卸売業

出所) 新潟日報朝刊 2016. 12. 17(東京商工リサーチ新潟支店調べ)

特徴が形成された背景・要因

▶ 気候

- ・雪国独自の気候は、発酵に良い影響を与える場合があります。
- ・日本酒の場合、冬期間の気温が極端に低くならないことや酒蔵が雪で覆われることで、温度が一定

⁶⁷全国味噌鑑評会は、平成 29 年で 56 回目となる。味噌に関する専門の研究機関として 1948 年に設立された一般社団法人中央味噌研究会が主催し、全国の味噌の官能に優れた技術者や研究者で構成する審査員が、色、香り、味、組成のそれぞれについて総合的に採点して表彰するもの。(みそ健康づくり委員会ホームページ)

⁶⁸小泉武夫「発酵」、p. 130、中央公論社、1989

⁶⁹発酵食品研究会「発酵のまち上越パンフレット」

⁷⁰栗飴は、寛永元年(1624)の創業当初は、栗を原料として作っていたが、寛政 2 年(1790)もち米を原料とした淡黄色透明の水飴を製造し、評判となった。翁飴は、栗飴の原料となる水飴に寒天を加えて固めたものである。(新潟お菓子プロジェクト実行委員会・新潟県歴史博物館「お菓子和新潟」、p. 6、2016)

に保たれ空気中の雑菌も抑制されるなど、酒造りに欠かせない微生物の働きに最適な環境になると言われています。さらには、酒造りには大量の水が必要とされ、水道水より厳しい品質が求められることから、雪融け水による豊富できれいな水も欠かせません。

- また、日本有数の豪雪地帯である新潟県では、冬期間の出稼ぎが盛んに行われていました。特に、日本酒における「寒造り」⁷¹の普及拡大により、冬季が農閑期に当たる農民などにとって、杜氏としての出稼ぎは都合の良いものとなりました。
- 岩の原葡萄園では、冷却設備のない時代、雪室の雪を利用して発酵温度の調節を行うなどして、良質なワイン造りに成功しています。

▶ 米どころ

- 上越市は古くから米どころであり、日本酒や味噌などの原料が豊富にあったことは、それらの製造にも少なからず影響を与えているといえます。
- 江戸時代後期になると、都市から村々へ酒造りが広がっていきましたが、農村部では地主層が小作米の余剰分を使って酒造りに着手⁷²したと言われています。
- また、上越地方の「浮き糶味噌」は米麴割合も高く、糶粒を残すために良い米を使って作られることから、米どころならではの味噌といえます。

▶ 交通

- 上越市は、交通の結節点でもあったため、人の盛んな交流の影響も受けています。
- 江戸時代後期になると、新潟県内では城下町や港町、在郷町を中心に菓子屋の数が増え、各地に名物のお菓子が誕生しました。こうした中で、高田城下の栗飴は、街道を行き交う諸大名や旅人などにより評判となりました。また、日持ちのよい翁餅（翁飴）は、高田藩主の参勤交代で江戸へ出向く際の土産ともなりました。
- また、慶応3年の頸城郡（現在の妙高、糸魚川市）の状況では、「複数の酒造家があるのは街道沿いの村に多く、流通の条件が関係したもの」⁷³とも考えられています。
- 味噌についても、糶の割合が多い特徴の一説では、加賀藩からの人の行き来などにより西の文化の影響を受けたからではないか⁷⁴とも言われています。

▶ 保存

- 上越市では、冷蔵庫が普及する以前は、魚をショッカラという塩漬けにしたり、冬用に大根を漬物にして、残りはむしろにくるみ、裏の畑に埋めておいたりして保存していました。こうした冬期間に備えた保存の知恵が、保存・発酵食品が発達した背景にあるといえます。

⁷¹「寒造りは酒母、もろみの品温経過がとりやすく、空気中や仕込水の細菌数が少ないので、雑菌による汚染も少なくそれだけ品質のよい市場性の高い酒ができやすかった。」（坂口謹一郎監修・加藤辨三郎編者「日本の酒の歴史 一酒造りの歩みと研究」、1977）

⁷²新潟市歴史博物館「平成20年度企画展 酒蔵～近代新潟の酒造り～」、p. 4、2008

⁷³上越市史編さん委員会「上越市史通史編3 近世1」、p. 127、上越市、2003

⁷⁴ あおき味噌ホームページ <http://www.aokimiso.server-shared.com/>

(9) 製造業（食品産業は除く）

上越市には、大正から昭和初期にかけて市内工業の礎となる化学・金属工場が立地しました。その背景には、水力発電や石油・天然ガスなどの豊富なエネルギー資源、交通の利便性などが挙げられます。

また、米どころならではの農機具工業、主に冬の内職であったバテンレース産業から発展した細幅織物工業、日本スキー発祥の地であることからかつて国内有数の生産量を誇ったスキー工業など、上越ならではの個性的な地場産業も発展しました。

主な特徴

★ 市内工業の礎となる化学・金属工場

- ・上越市には、大正から昭和初期にかけて、化学・金属関係の工場の立地が進みました。これらは、現在も上越市内で操業しています(図表 2-38)。
- ・昭和 37 年に設立した三菱化成は、昭和 41 年には「年産 10 万 t の生産能力を持った日本で最大規模のアルミ精錬工場になったほど」⁷⁵でした。

★ 上越ならではの個性的な地場産業

▶ 農機具

- ・上越市の農機具メーカーによる製品は定評が高く、かつて全国でも有数の生産を誇った時期もありました⁷⁶。
- ・当時の主なメーカーには、佐藤製作所（明治 43 年創業、平成 18 年操業停止）、大島農機（大正 6 年創業）、篠宮農機（大正 12 年創業、昭和 63 年操業停止）がありました。現在は、このうちの 1 社のみが操業していますが、市内にはその部品を製造する協力企業が数多く存在します。

▶ 細幅織物

- ・上越市でのバテンレース⁷⁷生産は、横浜の飯島商会の飯島保太郎が、以前から高田でハンカチを生産していた木戸信次郎を主任として支店を設けたのが最初とされています。大正 2 年当時の高田市の主要工業では、バテンレースは市内で最も生産額が多いもの⁷⁸でした。

図表 2-38 上越市内の主な化学・金属工場の設立年

設立年	企業名	1967 年 12 月時点の 主要製品名
1920 (大正 9)	日本曹達 二本木工場	化学工業薬品、農医薬
1926 (大正 15)	信越化学	化学電料、カーバイト、酢酸ビニール
1932 (昭和 7)	日曹製鋼(現:大平洋 特殊 Casting)	銑鉄、鋼板、鋳造品
1934 (昭和 9)	日本ステンレス(現:新 日鐵住金)	特殊鋼(ステンレス)
1935 (昭和 10)	理研柿崎工場 (現:理研製鋼 柿崎 工場)	特殊鋼、ドリル、カッター
1962 (昭和 37)	三菱化成 (現:三菱化学)	アルミ精錬

出所) 新潟県社会科教育研究会「新潟県上越地方の地誌」を基に当研究所作成。

⁷⁵新潟県社会科教育研究会「新潟県上越地方の地誌」、p. 34、1978

⁷⁶新潟県社会科教育研究会「新潟県上越地方の地誌」、p. 48、1978

⁷⁷「ブレード」と呼ばれる糸で編んだテープで、図柄の輪郭を縁飾り、その内側にかがり縫いで模様を施したもの。(吉田バテンレースホームページ)

⁷⁸上越市史専門委員会現代史部会「上越市史業書 1 バテンレースと細幅織物」、上越市、p. 39-40、1997

- ・また、第二次世界大戦前、全国に4か所あったバテンレースの産地のうち、戦後に復活した産地は、高田のみ⁸⁰でした。

図表 2-39 細幅織物から発展した上越市内の主な企業

- ・バテンレースの原料であるブレード（細幅織物⁸¹）の生産も盛んとなります。
- ・昭和30年頃の高田における細幅織物の生産高は全国の生産額の65%を占めたと言われてい
ます⁸²。
- ・第一次世界大戦後、ブレード生産は激減しますが、一部の工場ではブレード機を改造してテープを製造し、新しい需要を掘り起こしました。その後も、電気絶縁テープ、メリヤステープ、ガラス繊維織物、石油ストーブの芯、シートベルトなど新たな細幅織物に取り組みました。
- ・細幅織物産業から発展した市内の企業は、現在でも国内有数の技術を有しています(図表2-39)。

年度	企業名	経緯
1909 (明治42)	株式会社 有沢製作所	明治42年にバテンレースを製造するところから始まる。製品は、パソコンや携帯電話などに組み込まれる電子材料、航空機内装用パネルをはじめとする業務用構造材料、電気絶縁材料、ディスプレイ材料となりさまざまな産業の発展に貢献。
1914 (大正5)	ホシノ工業 株式会社	大正5年にバテンレース用テープの生産開始。自動車用シートベルトウエルピング、エアバック袋体、航空自衛隊パラシュート用ベルト・テープ、消防用ホース袋織など生産。
1943 (昭和18)	ウエカツ工業 株式会社	昭和18年に細幅織物メーカーとして創業。ハードディスク用基板の製造で世界トップシェアを誇る。
1991 (平成3)	株式会社 ポラテクノ	(株)有沢製作所と日本化薬(株)の合併により設立 ⁷⁹ 。高耐久偏光フィルムの開発等で技術的優位性を確立し、世界80%以上のシェアを確保している。

出所) ものづくり企業データベース

▶ スキー

- ・上越市は、明治44年にオーストリアのレルヒ少佐が、高田にあった陸軍第13師団において、日本で初めて本格的なスキー指導を行ったことから、日本スキー発祥の地と言われ、スキー産業も発達しました。
- ・上越地方（上越市、妙高市、糸魚川市）の「スキーの生産高は、1960年代中頃には全国生産高の約45%を占め、その25-30%は海外向けだった」と言われています。上越地方においては、農機具メーカーやスキーのワックス業者が参入する中で工場数が増え、昭和40年頃には工場が9社、締具、エッジなども加えるとスキー関係の工場は19社を数えました⁸³。
- ・現在、スキーの生産はありませんが、スキー、スノーボードのエッジ製造では、国内シェア100%（平成23年現在）⁸⁴の企業が存在します。
- ・また、日本スキー発祥の地である上越市から、近隣の飯山市をはじめ、全国にスキーが伝わっていききました。

⁷⁹株式会社ポラテクノホームページ <http://www.polatechno.co.jp/company/>

⁸⁰上越市史専門委員会現代史部会「上越市史業書1 バテンレースと細幅織物」、上越市、p.59、1997

⁸¹細幅織物とは、幅13cm未満の織物のことであり、バテンレースの原料となるブレードもその一つ。（新潟県社会科教育研究会「新潟県上越地方の地誌」）

⁸²上越市史専門委員会現代史部会「上越市史業書1 バテンレースと細幅織物」、p.93、上越市、1997

⁸³赤羽孝之「新潟県上越地方におけるスキー工業 ―ある地場産業の崩壊―」、p.21-22、歴史地理学146号、1989

⁸⁴上越ものづくり企業データベース <http://www.j-monodb.jp/>

特徴が形成された背景・要因

▶ 水力発電による電力

- ・上越市周辺の水力発電所による発電量が増加するにつれ、電力会社は、電灯事業だけでは電力を消費しきれず、電力を大量に消費する工場の設立・誘致を行います。誘致される企業にとっても、電力の安さが魅力となりました。
- ・例えば、日本曹達二本木工場は、越後電力から電力の供給を受けていましたが、契約の電力価格は全国平均より相当低廉であったと言われていて⁸⁵。また、信越化学直江津工場は、信濃電気と日本窒素肥料の共同出資で設立、日本ステンレスは中央電気が設立しています。理研柿崎工場は、安価な電力を求めて中央電气管内に進出したと言われていています。
- ・さらに、電力会社の記念事業として、農村に電力線の敷設と小型モーターを安価で斡旋したことで、農村への電動機普及が加速します。このことが、動力を使う脱穀機や粃すり機などの農業機械を受け入れる基盤ともなりました。なお、上越市では米の収穫期に雨が多く冬の出稼ぎ者も多いため、晴天時に農作業を急ぐ必要から、小型モーター付きの脱穀機や粃すり機の需要は高かったとも言われています。

▶ 地下資源

- ・化学工業においては、(石油に原料が転化される前は)石灰石を燃焼させてカーバイドや化学肥料の製造が盛んに行われました。また、石灰石はセメントの材料として利用されています。上越市に隣接する糸魚川市では、この石灰石が産出され、化学工場を進出させる一因となりました。例えば、信越化学や日本曹達二本木工場では、創業当時、原材料には石灰石を使っていました。
- ・また、昭和30年代には、頸城油田・ガス田の開発が進み、石油系原料への転換も伴って、天然ガスを燃料や原材料として利用する工場の進出や拡大が進みました。例えば、三菱化成は、電力を多量に使うアルミ精錬のため、天然ガスを燃料とした低コストの電力を求めて進出しました。

▶ 交通の発達

- ・上越市と東京を結ぶ鉄道(信越線)は、日本海側では早期に開通しました。このことにより、原材料や製品の輸送が便利であったことも工場進出の要因となりました。
- ・また、直江津港の存在により原料輸入が円滑に行えるという利点もありました。

▶ 豪雪地帯

- ・バテンレース生産においては、冬の農閑期が長く、他に大きな産業もなかったことなどから、上越市が副業に適した産地に選ばれたと言われています。
- ・スキー生産では、日本ではじめて本格的なスキー術が伝えられたことをきっかけに、高田第13師団が建具師や大工にスキーの製作を依頼したのが、民間人が作った初めてのスキーとされています。その後、メタルスキー、グラススキー、グラスメタルスキーが開発されるなど、「生産技術面で地元のみならず全国的にも業界をリードしたこと」⁸⁶も、上越地方において産地が発展した一因と言われています。

⁸⁵赤羽孝之、西山耕一「地方工業の研究」、p.29、山越企工、1990

⁸⁶赤羽孝之「新潟県上越地方におけるスキー工業—ある地場産業の崩壊—」、p.22、歴史地理学146号、1989

▶ 化学・金属工場の存在

- ・主にエネルギー資源に牽引されて立地した大規模な化学・金属関係の工場の周辺には、それらの関連工場も立地しています。こうしたことで、上越市にさらなる工業化がもたらされました(図表 2-40)。

図表 2-40 上越市内の金属・化学工場に関連する
主な工場

設立年	主な企業名	設立経緯等
1947 (昭和 22)	日本ステンレス工材 (現:日鉄住金工材)	創業後、日本ステンレスの中間加工等行う
1953 (昭和 28)	丸互	創業後、日本ステンレスの中間加工等行う
1969 (昭和 44)	直江津電子工業	信越化学のシリコン生産に伴う、ウェーハ製造部門として設立
1973 (昭和 48)	直江津軽金属 (現:日信工業直江津工場)	三菱化成のアルミニウムを二次加工する工場として、長野県か進出
1985 (昭和 60)	新潟沖電気 (現:沖プリントドサーキット)	三菱化成が誘致
1986 (昭和 61)	直江津精密加工	直江津電子の合成石英マスク基盤部門が独立

出所)「上越市史」および各企業ホームページを基に当研究所で作成。

(10) 建築

上越市では、城下町の街道筋を中心に造られた総延長日本一の雁木通りや、市街地の町家、農村部の中門造りによる農家など、豪雪地帯ならではの建築物を見ることができます。

主な特徴

★ 豪雪地帯ならではの建築物

- ・上越市の市街地には、「雁木通り」といわれ、町家から道路側に「雁木」と呼ばれる庇が突き出し、それが連続した通りがあり、冬場の通路として重要な役割を果たして来ました。全国的には、東北や北陸地方の日本海側にある市街地で多く見られる光景です（写真1）。
- ・高田の雁木通りの総延長は、最盛期には約17.9 km、昭和60年時点でも約15.7 km⁸⁷であり、いずれも日本一の長さを誇りました（図表2-41・42）。
- ・高田の雁木形成は、松平光永が高田藩主を務めた1624年（寛永1年）以降とされ、この古さから雁木発祥の地と言われることもあります⁸⁸。
- ・雁木通りの「町家」は、道路側から、主屋、中庭を挟んで付属屋が並び、片側に通された細長い土間（トオリニワ）でつながっています。このため、積雪時でも建物の表から裏まで下足のまま移動できます。
- ・土間の廊下の奥には台所、風呂、便所といった水回りが設けられ、洗濯物を干したり、漬物樽を置いたりする場所としても利用されます。これは、冬期間に備えた空間の確保と見られることもできます。
- ・また、積雪に耐えうる太い梁組、豪雪時には採光の役目も果たす天窗、屋根に積もった雪を処理しやすくするための棟位置など、冬期間に備えた様々な工夫が見られます。

写真1 豪雪時の雁木通り



出所) 濱谷浩氏撮影、上越市立総合博物館所蔵

図表 2-41 雁木通りの国内残存延長ベスト10
(1966-1985年調査)

順位	地区名(当時)	残存延長(km)
1	上越市高田*(新潟県)	15.7
2	長岡市(新潟県)	5.2
3	栃尾市(新潟県)	4.6
4	加茂市(新潟県)	3.7
5	黒石市(青森県)	3.5
6	新津市(新潟県)	2.4
7	与板町(新潟県)	2.3
8	飯山市(長野県)	2.3
9	小須戸町(新潟県)	2.2
10	見附市主部*(新潟県)	2.1

備考) 上越市直江津は0.5 km、見附市今町は0.6 kmとなっている。

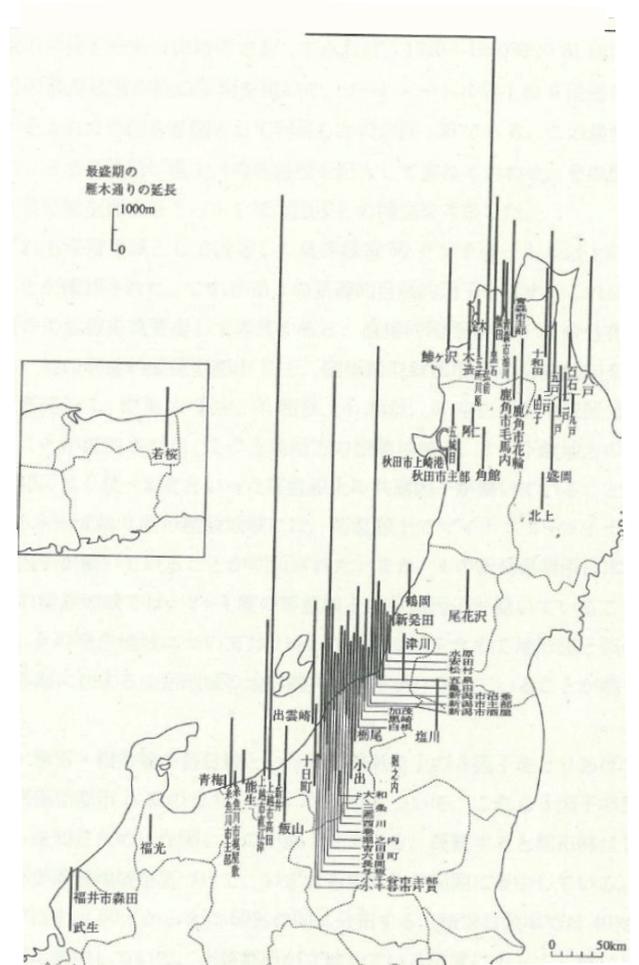
出所) 氏家武「雁木通りの地理学的研究」、p. 482、古今書院1998を基に当研究所作成。

⁸⁷ 2005年4月から2009年12月の調査では約13.6 km（アーケードを含めると約16 km）、2017年の調査では約12.9 kmとなっている（新潟大学黒野研究室による）。

⁸⁸ 氏家武「雁木通りの地理学的研究」、p. 376、古今書院、1998

- ・雪国の農家形式として、一般的に知られているものに「中門造」があります。これは主屋に中門と呼ばれる突出部分を持ち、雪によって入口が塞がれないようにするためのものです。
- ・また、屋根が急勾配であることや、柱自体が大きく間隔も狭い、重い雪の負担に耐えるために軒が短いなど、雪国ならではの工夫が見られます。
- ・さらには、漬物や保存用野菜は土間のニワ（庭）に、農作業・山仕事用の道具は天井裏に保管するなど、長い冬期間の生活に耐えられるように保存場所の工夫もなされています。

図表 2-42 全国市街地の最盛期における雁木通りの延長



出所) 氏家武「雁木通りの地理学的研究」、p. 483

特徴が形成された背景・要因

▶ 豪雪地帯

- ・上越市では、雪で覆われる期間が長く、湿った重たい雪が降ることから、積雪期間中に外に出なくても生活ができる構造や、雪の重さに耐えられる建物が発展しました。
- ・また、昭和 30 年代までは、重機による機械除雪が行われていなかったことから、屋根から道路に落とされた雪が通路をふさいで通行が困難となる中、雁木通りは冬期間の重要な通路となっていました⁸⁹。

▶ 城下町・軍都

- ・高田の雁木や町家は、城下町の街道筋を中心に見ることができます⁹⁰。雁木は、城下町、宿場町であった高田で、雪の中でも人々の往来を盛んにさせ、商売を活発に行おうとした、町人たちの知恵と財力の結晶と言われています⁹¹。

⁸⁹浅倉有子・志村喬・茨木智志・山縣耕太郎・矢部直人・花岡公貴・荒川将・泉豊「ぶら高田」、p. 35、北越出版、2014

⁹⁰上越市「高田開府 400 年」、p. 58、2014

(11) 教育・福祉

上越市には、新構想教育大学の一つである上越教育大学や、国内で3番目に早い盲学校が設置されるなど、学校教育への熱心な取組がありました。

こうした背景には、城下町ならではの当時の状況や師範学校時代から続く歴史があるほか、高田盲学校については、かつて雪国では目の不自由な人が多い傾向にあったことも一因とされています。

主な特徴

★ 学校教育への熱心な取組

- ・上越教育大学は、兵庫教育大学、鳴門教育大学と並ぶ国立の新構想教育大学の一つとして、昭和53年に設置されました。前身は明治32年に開校した新潟県第二師範学校に始まり、高田師範学校、新潟第二師範学校、新潟大学教育学部高田分校であり、新潟大学の統廃合問題を契機として設置されました⁹²。
- ・平成28年度の学部卒業者の教員就職率は80.3%であり、全国44大学の教育学部中で第4位でした⁹³。
- ・小学校低学年の教科として平成元年に創設された「生活科」は、その創設に当たり、上越市立大手町小学校の取組が大きな影響を与えたと言われています⁹⁴。
- ・文部科学省が創設した「コミュニティスクール⁹⁵」の仕組みは、平成24年度から、全国に先駆けて市内全ての市立小中学校で一斉にスタートしています。
- ・「高田盲学校」は明治24年に開校しましたが、これは京都、東京に次ぎ、日本で3番目の早さと言われています⁹⁶。当時は、官民の協力が得られず設立に至らないことも多く、設立されても短期間で消滅してしまう学校がある中で、消滅せずに継続した盲学校の一つでした⁹⁷。（その後、生徒数減少により、平成18年に閉校し、新潟県立新潟盲学校高田分校となったが、平成24年に休校、平成25年に閉校となった。）

特徴が形成された背景・要因

▶ 城下町高田

- ・高田藩が呼び寄せた学者を中心に、城下町では学問が熱心に行われました。全国的に幕末の城下町では学問に力が注がれたといえますが、高田藩に設立された文武済美堂などの私塾からは、明治初期に全国で活躍する偉人が輩出されています。
- ・高田盲学校の早期創設も、こうした城下町ならではの教育の影響が垣間見えます。創設に尽力した

⁹²上越教育大学「上越教育大学30周年記念誌」、p.4、2008

⁹³卒業生から大学院等への進学者と保育士への就職者を除いた学生の教員就職率。（上越教育大学ホームページ（就職・進路）
<http://www.juen.ac.jp/140career/050situation.html>）

⁹⁴上越市「上越市史 通史編6現代」、p.539、2002

⁹⁵「学校運営協議会」を設置し、学校と地域住民等が一体となって学校運営の改善や児童生徒の健全育成に取り組んでいる学校のこと。（上越市ホームページ）

⁹⁶上越市史編さん委員会「上越市史 普及版」、p.236、上越市、1991

⁹⁷丸山昭生・小杉敏勝「教育0の解消」、p.12、北越出版、2007

眼科医の大森隆碩は、高田藩医の長男として生まれ、文武済美堂で漢学を学んでいます⁹⁸。

- ・また、明治維新で禄を離れた高田の旧藩士の子弟は、新しい生業で生計を立てる必要から教員の志望者が多く、「高田教員、村上（又は村松）巡査」といわれるほどでした。こうした状況から、男女とも師範学校への進学者が多く、師範学校誘致のひとつの要因ともなっているとされています⁹⁹。

▶ 師範学校、大学の存在

- ・上越教育大学開校の背景には、教育にかける地元の熱心な誘致活動により新潟県第二師範学校が設立され、高田師範学校、新潟第二師範学校を経て、新潟大学教育学部高田分校となり、新潟大学への統合移転の中で実現された経緯があります。
- ・城下町ならではの気風に加え、師範学校や大学が存在することも一因となり、附属小・中学校や研究開発指定校の指定を受けた地域の学校での研究も盛んに行われました。

▶ 雪国

- ・明確な資料はありませんが、雪深い北陸では、昔から目の悪い人が多かったとされています。明治天皇が北陸巡幸で越後路に入られた際も、沿岸の奉迎者の中に眼病者が多いことを気遣われ、その治療と予防のために金千円が御下賜されたと伝えられています¹⁰⁰。

⁹⁸村山和夫「高田藩」、p.141、現代書館、2008

⁹⁹公孫会記念誌編集部「公孫樹下の八十年」、p.7、東京法令出版、1982

¹⁰⁰丸山昭生・小杉敏勝・坂井信也「捨身の願い」、p.98、北越出版、2015

(12) 芸術・文化

上越市には、民俗学の権威や世界的な写真家から注目された小正月行事や、国の無形文化財に選ばれた最後の高田瞽女など、著名な文化人等が注目した芸術・文化があります。

これらは、豪雪地帯ならではの暮らしの中で残り続けた芸術・文化と捉えることもできます。また、多くの有識者や芸術家等に注目された背景には、地元の研究者による発見・発信も大きかったとされています。

主な特徴

★ 著名な文化人等が注目した芸術・文化

- ・市内桑取谷の「西横山の小正月行事」（市指定無形民俗文化財）は、他の集落に比べて一連の小正月行事が比較的多く伝えられ現在に至ったとされ、民俗の宝庫として古くから注目されてきました¹⁰¹ ¹⁰²。「若き迎え」、「モノづくり」、「鳥追い」、「嫁祝い」、「サイの神」などがそれぞれに意味を持ち、一連の行事として行われています（写真2）。
- ・昭和10年、国内の民俗学の権威である渋沢敬三氏（1896-1963）は、地元の研究者である市川信次氏の案内の下、学術調査を行っています。
- ・昭和31年、写真家である濱谷浩氏（1915-1999）は、越後と桑取谷の二部構成の写真集「雪国」を発表し、西横山の小正月行事は海外にまで広く紹介されました。濱谷浩氏は、世界的な写真家集団マグナム・フォトにアジア初めての寄稿写真家として参加しています。
- ・最後の「高田瞽女（ごぜ）」である杉本キクイ（1898-1983）氏は、昭和45年、国の無形文化財（通称：人間国宝）に選ばれています。
- ・瞽女とは、目の不自由な女性たちが三味線弾き唄を歌いながら村々を回る旅芸人のことをいいます。かつて瞽女は全国各地にありましたが、中でも新潟県は瞽女の一大拠点として知られていました（写真3）。

写真2 小正月行事(鳥追い)



出所) 濱谷浩氏撮影、上越市立総合博物館所蔵

写真3 高田瞽女



出所) 濱谷浩氏撮影、上越市立総合博物館所蔵

¹⁰¹上越市史専門委員会民俗部会「桑取谷民俗誌」、p. 192、1999

¹⁰²上越市教育委員会「上越市の文化財」、p. 75

特徴が形成された背景・要因

▶ 豪雪地帯

- ・雪の中で行われる小正月行事は、幻想的な伝統行事となりました。その行事の中でも「鳥追い」は農耕儀礼として成立しました。
- ・また、冬の長い期間を大雪に閉ざされ、幼い時に麻疹などの病気をこじらせて弱視や失明に至る人が多く見られたと言われていました。福祉制度などもない時代、眼病を患った女性が自立する方法は極めて少なく、瞽女に出ざるを得ない事情もあったといえます。

▶ 雪国の人の生活、人柄

- ・厳しい自然環境の中でたくましく生きる雪国の人の生活やそこで生まれる文化が、著名な芸術家や有識者の感性を引き付けたと考えられます。
- ・濱谷浩氏が「雪国」写真を撮るにいたったのは、「国をあげて軍国化する中で、軍事体制に迎合するジャーナリズムに背を向けて「生活の古典」に焦点を合わせる決意をした」¹⁰³ことがあると言われてしています。
- ・また、画家の斉藤真一氏は、瞽女の暮らしぶりに「何か石のように力強い、大地に根を下ろし、土の中から芽生えている大木のような人間性を見た」¹⁰⁴と語っています。

▶ 政治的な拠点

- ・政治的な拠点であったことは、著名な芸術家や有識者が訪れるきっかけともなっています。
- ・濱谷浩氏がこの地に関わるきっかけは、昭和14年に雑誌「グラフィック」の特写で高田連隊スキー部隊冬期演習取材に訪れたことによるものでした。

▶ 地元の研究者

- ・地元の研究者である市川信次氏の存在により、上越市の認知されにくい貴重な文化が様々な有識者や芸術家に発信されたことも、全国的に注目されるようになった大きな要因といえます。
- ・写真家の濱谷浩氏は、最初に高田を訪れた際、市川信次氏と出会ったことがきっかけとなり、雪国の民俗に興味を持つこととなりました。

¹⁰³市川信夫「雪国から 新・北越雪譜」、p. 227、田畑書店、1983

¹⁰⁴齊藤真一「瞽女 盲目の旅芸人」、p. 31、日本放送出版協会、1972

2-3 上越市の特徴的な地域資源についての考察

2-1 で示したとおり、特徴的な地域資源はそれぞれが影響し合い、全体としてまちの特徴を形成している。ここでは、そうした視点を踏まえて、分野別に紹介した上越市の特徴的な地域資源を総括し、上越市全体の特徴および魅力の捉え方を考察する。

(1) 地域資源の多様性が生み出す魅力

上越市の特徴的な地域資源は数多く存在するが、その中で他地域と比べて圧倒的に突出しているものは少ない。このことから、代表的な地域資源を2, 3挙げて、まちの特徴や魅力を語ることは難しい地域といえる。

むしろ上越市の特徴や魅力は、一定の条件下で多様な地域資源が存在する総合性や、一見相反するもの同士の共存性など、いわゆる「多様性」に見いだすことができると考えられる。

例えば、これだけコンパクトなエリア（流域圏）の中に、海に山に大地に、まちやむらが含まれること、これだけの豪雪地帯にこれだけの人が住んでいることなど、組合せによって捉えることで全国でも稀な地域と見ることができるといえる。したがって、そこから生まれる自然環境や生活文化などの豊かさは、この地域独特の魅力といえることができる。

(2) 広域的視点による魅力度の向上

上越市の魅力は、上越市内にある地域資源だけで語れるものではなく、その近隣地域を含めた地域資源の豊かさとも関係している。つまり、上越市の魅力を語ろうとすれば、広域的視点は不可欠である。

本研究においては、上越市の近隣地域を含めた広域的な調査は十分とはいえないが、地域資源の因果関係を調べる中で、現在の市町村界を越え自然、交通、産業、食など各分野において周辺地域との共通性がある一方、それぞれの地域で異なる特徴も有していることが見られた。

例えば、上越市周辺に目をやれば、中部山岳（北アルプス）、妙高戸隠連山、上信越高原などの国立公園に魅力的な山々が存在しており、それらを気軽に眺望あるいは登山できる距離感がこの地域の大きな魅力といえる。

また、上越市と同様に豪雪地帯といわれる周辺市町村においては、いずれも米どころ、酒どころとしての高い実績があり、風味の異なる味噌や蕎麦が生産されるなど、全体として捉えれば共通性・差異性ともに雪国の食文化の魅力と見ることができるといえる。

こうした広域的視点での共通性と多様性を見出していくことは、上越市自身の特徴をより際立たせるだけでなく、上越市や近隣地域の魅力を磨き合うことにもつながると考えられる。

(3) ストーリー化による魅力の先鋭化

多様な地域資源の魅力は、地域資源同士のつながりをストーリー（物語）として捉えることによって理解を深めることができる。2-2 で示したような地域資源の因果関係を探ることによって、まちの根幹にかかわるものを明らかにし、ストーリーの軸（コンセプト）としていくことが重要である。

特に、今回取りまとめた地域資源には「国内有数の豪雪地帯」という特徴に影響を受けたものが

多く見られ、この「雪国」を軸に上越市の地域資源をストーリーとして捉えることができる。

例えば、上越市は日本有数の豪雪地帯であり、その豊富な雪融け水が水力発電や米づくりにつながっている。水力発電の存在により立地した数々の工場は、現在の産業の礎ともなり、豊富な米は、日本酒や味噌などの食品産業の発展につながっている。また、豪雪地帯で生活するという過酷な環境から保存・発酵食品が発達したほか、雁木通りをはじめ独特な景観も生み出された。

このほかに、今回は地域資源との因果関係を十分に調査できなかったが、東西の境目付近であるという「位置」も様々な地域資源の根底にある特徴と考えられる。

(4) 地域資源を次世代につなぐ人材の重要性

これまでの上越市を振り返ると、基本的な暮らしを行う上で必要な地域資源が豊富に存在し、安定的な生活基盤を持つ恵まれた地域であったと見ることができる。しかし、その安定は何もせずに得られ続けてきたわけではなく、例えば、先人の用水・新田開発や水力発電への取組、エネルギー開発、大規模な工場や大学の誘致など、時代ごとに新しい基盤を作る人々の努力があった。地域資源を結び付け、ストーリーとして捉えていくことは、こうした過去から現在へのつながりをつないだ人々を認識することでもある。

一人ひとりが、まちのストーリーを知り、自らの日常もストーリーの一部であると自分事に捉えることが、上越市を将来に引き継ぐ大きな力になると考えられる。

参考文献（第2章）

(1) 位置

- ・上越市史編さん委員会「上越市史 普及版」、上越市、1991
- ・上越市史編さん委員会「上越市史 資料編1 自然」、上越市、2002
- ・上越市「上越市第5次総合計画（改訂版）」、2007
- ・市川健夫「フォッサ・マグナを境にした東西の日本文化と南北の国土軸」、直江の津3号、直江津経済文化研究所、2001
- ・市川健夫「信州学テキスト『日本の屋根』の風土と文化」、第一企画、2012
- ・中部電力ホームページ（電気のマメ知識 地域と周波数）
http://www.chuden.co.jp/business/kaminari/chishiki/mame_area/index.html
- ・関西電力ホームページ（教えてかんでん なぜちがう周波数ができてしまったの？）
http://www.kepco.co.jp/brand/for_kids/teach/2016_03/detail1.html
- ・国土審議会圏域部会「広域地方計画区域のあり方について（案）」、国土審議会第8回圏域部会配付資料、2006 <http://www.mlit.go.jp/singikai/kokudosin/keniki/8/shiryou3.pdf>
- ・フォッサマグナミュージアムホームページ <http://www.city.itoigawa.lg.jp/6525.htm>
- ・総務省「通信放送の在り方に関する懇談会第5回会合資料」、2006
- ・市川健夫「ブナ帯文化と風土」、第一企画、2010

(2) 地形・地質

- ・上越市史編さん委員会「上越市史 普及版」、上越市、1991
- ・上越市史編さん委員会「上越市史 資料編1 自然」、上越市、2002
- ・フォッサマグナミュージアム「フォッサマグナってなんだろう」、凸版印刷株式会社、2006
- ・早津賢二「新版 妙高は噴火するか」、新潟日報事業社、2012
- ・小松原琢「新潟県の地形形成と災害環境＝第四紀258万年の歴史＝」、地質ニュース676号、p.37-44、2010
- ・南木均「世界一の山脈 関田山脈」、直江の津第4号、直江津経済文化研究所、2001
- ・成瀬洋「日本列島の生い立ち」、同文書院、1977
- ・全国治水砂防協会「砂防便覧平成26年版」、2015
- ・日本第四紀学会ホームページ（第四紀とは） <http://quaternary.jp/intro/daiyonki.html>
- ・フォッサマグナミュージアムホームページ <http://www.city.itoigawa.lg.jp/6525.htm>
- ・国土交通省ホームページ（河川関係統計データ）
http://www.mlit.go.jp/statistics/details/river_list.html
- ・国土交通省ホームページ（日本の川）
http://www.mlit.go.jp/river/toukei_chousa/kasen/jiten/nihon_kawa/index.html
- ・高田河川国道事務所ホームページ（川のこと） <http://www.hrr.mlit.go.jp/takada/river/index.html>
- ・上越科学技術教育研究会「上越市の自然シリーズ3 大地」、上越市福祉環境部生活環境課、1995
- ・高野武男・関田山脈団体研究グループ「新潟・長野両県境の関田山脈と飯山盆地の形成に関する造地形運動の研究」、地学雑誌 117(5) 901-918、2008
- ・国立防災科学技術センターホームページ（第四紀地殻変動図）
http://dil-opac.bosai.go.jp/publication/quaternary_chikaku/index.html
- ・平朝彦「日本列島の誕生」、岩波書店、1990
- ・貝塚爽平「日本の地形」、岩波書店、1977
- ・吉川虎雄・杉村新・貝塚爽平・太田陽子・坂口豊「新編 日本地形論」、東京大学出版会、1973
- ・柳沢幸夫・金子隆之・赤羽貞幸・栗田泰夫・釜井俊孝・土谷信之「飯山地域の地質」、地質調査所、2001
- ・新井場公德・野崎保・鄭炳表・福本安正「日本の地すべり指定地分布と地質的特徴について－全国地すべり指定地調査結果報告－」、日本地すべり学会誌第44巻第5号別冊、2008
- ・国土交通省「都市圏活断層図 利用の手引き－地震被害の軽減に向けて－」、2017
- ・新潟県治山林道協会「新潟の地すべり」、1998
- ・新潟県上越地域振興局妙高砂防事務所ホームページ（所管区域と概況）
http://www.pref.niigata.lg.jp/jouetsu_sabou/situation.html
- ・公益社団法人日本地すべり学会新潟支部ホームページ（新潟県の地すべりの概要）
<http://www.landslide-niigata.org/tokucho.html>
- ・フォッサマグナ地質研究会「フォッサマグナの隆起過程」、地団研専報38号 p.159-181、1991
- ・竹内章「中央日本のネオテクトニクスと伊豆小笠原弧」、地学雑誌100(4) p.540-551、1991
- ・黒川勝己「新潟地域における七谷層～魚沼層群の火山灰層序」、石油技術協会誌 第64巻第1号、1999

- ・吉川周作・渡辺秀男・井上淳「新潟・長野県に広域に分布する後期更新世の炭層準の発見」、地質学雑誌 第109巻第1号 p. 63-70、2003
- ・早津賢二「新潟焼山火山ーその素顔と生い立ち」、妙高火山研究所、2015
- ・萩原茂・坂本義昭・小川弘道・中山真一「日本列島の第四紀の地質特性」、日本原子力研究所、2002
- ・地学団体研究会「新版地学教育講座⑧ 日本列島のおいたち」、東海大学出版会、1995
- ・新潟市環境研究所公式サイト（新潟市潟のデジタル博物館）
<http://www.niigata-satokata.com/learn/nariwai/>
- ・小林巖雄「越後平野の地質について 最近の話題」、新潟応用地質研究会誌第69号 p. 11-24、2007
http://dSPACE.lib.niigata-u.ac.jp/dSPACE/bitstream/10191/11614/1/10_35_0002.pdf

(3) 気候

- ・上越の気象編集委員会「昭和54年度版 上越の気象」、上越科学教育研究室、1979
- ・上越市史編さん委員会「上越市史 資料編1 自然」、上越市、2002
- ・上越市史編さん委員会「上越市史 普及版」、上越市、1991
- ・上越市史編さん委員会「上越市史 通史編5 近代」、上越市、2004
- ・上越市中学校長会・新潟県社会科教育研究会「わが上越 歴史と生活」、2002
- ・新潟気象台ホームページ（新潟県の気象の特徴）
http://www.jma-net.go.jp/niigata/menu/bousai/met_character.shtml
- ・横山宏太郎「全国大会報告 公開講演会『上越の雪と人』より」、氷雪66巻2号、2004
- ・株式会社アルゴス「ベラボーにふる雪のはなし」、1995
- ・気象庁ホームページ（過去の気象データ・ダウンロード）
<http://www.data.jma.go.jp/gmd/risk/obsdl/index.php>
- ・市川健夫「雪国文化誌」、日本放送出版協会、1980
- ・前野紀一・福田正己「基礎氷雪学講座第Ⅱ巻 降雪現象と積雪現象」、古今書院、1995
- ・国立天文台「理科年表プレミアム」、丸善出版、2017
- ・齊木昭治「上越地方の気象」、アルゴス、2000
- ・市川健夫「雪国文化誌」、日本放送出版協会、1980
- ・市川健夫「雪国地理誌」、銀河書房、1775
- ・新潟県社会科教育研究会「郷土新潟県の生活風土」、東京法令出版、1984
- ・上越市「日本スキー発祥記念館パンフレット」
- ・越後田舎体験推進協議会「雪の魅力と雪国の暮らしパンフレット」
- ・トリップアドバイザーホームページ（世界の雨の日率マップ）
<http://tg.tripadvisor.jp/precipitation/>
- ・川端裕人「研究室に行ってみた。防災科学技術研究所 豪雪防災 佐藤威」、NATIONAL GEOGRAPHIC 日本版ホームページ、2013 <http://natgeo.nikkeibp.co.jp/nng/article/20130207/339528/>
- ・国土技術研究センター（土を知る / 意外と知らない日本の国土）
<http://www.jice.or.jp/knowledge/japan>
- ・新潟地方気象台「八十六年のあゆみ高田測候所史」、2007
- ・札幌市ホームページ（わたしたちの暮らしと雪）
<http://www.city.sapporo.jp/kensetsu/yuki/kids/index.html>
- ・防災科学研究所「防災科研ニュース」、No.179、2012
- ・上越市ホームページ（高田藩年表）
<http://www.city.joetsu.niigata.jp/soshiki/bunka/takada-castle-nenpyo.html>
- ・横山宏太郎「2003年度（社）日本雪氷学会全国大会報告」、雪氷66巻1号、2004
- ・横山宏太郎・井上聡「温暖化による降積雪変動」、月刊海洋/号外No.46、2007
- ・横山宏太郎・伊藤親臣「『雪のカリキュラム』開発研究への協力」、雪氷研究大会講演要旨集、2009
- ・横山宏太郎・伊藤親臣「『雪のカリキュラム』開発研究への協力-その2」、雪氷研究大会講演要旨集、2010
- ・株式会社タカヨシ広報室「ふうど」、2012冬号 vol.15、株式会社タカヨシ
- ・防災科学技術研究所 雪氷防災研究センター「氷雪防災研究センター 50年のあゆみ」、2015
- ・吉野正敏「雪と生活」、大明堂、1988
- ・森林総合研究所十日町試験地「新潟県十日町市の気象70年報 1918~1987」、森林総研研報No.357、1990
- ・国立環境研究所地球環境研究センターホームページ（【解説】異常気象と地球温暖化の関係について）
<http://www.cger.nies.go.jp/ja/news/2013/130911.html>
- ・松尾敬世「雪と雨をわけるもの」、日本気象学会誌「天気」48巻、2001
- ・blue snow white myoko ホームページ <http://myoko-brand.jp/>
- ・消防防災博物館ホームページ（宮澤清治の防災歳時記）

http://www.bousaihaku.com/cgi-bin/hp/index2.cgi?ac1=b431&ac2=&ac3=2025&page=hp2_view

- ・ 苗場ジオパークホームページ（森宮野原駅 最高積雪 7.85m の標柱）

http://naeba-geo.jp/morimiyanohara_eki

(4) 森林

- ・ 上越市史編さん委員会「上越市史 普及版」、上越市、1991
- ・ 上越市史編さん委員会「上越市史 資料編1 自然」、上越市、2002
- ・ 上越市自治・市民環境部環境保全課「大切にしたい上越市の生きものー上越市レッドデータブック普及版ー」、上越市、2011
- ・ 長谷川康夫「雪国の固有とよばれる植物」、直江の津第6号、直江津経済文化研究所、2002
- ・ 新潟県社会科教育研究会「新潟県上越地方の地誌」、1978
- ・ 新潟県生活環境部自然保護課「新潟県のすぐれた自然 新潟県自然環境保全資料策定調査書 植物編」、1983
- ・ 新潟県生活環境部自然保護課「続・新潟県のすぐれた自然 新潟県自然環境保全資料策定調査書 植物編」、1993
- ・ 新潟県生活環境部自然保護課「新潟県のすぐれた自然 新潟県自然環境保全資料策定調査書 動物（昆虫類、両生類）編」、1983
- ・ 新潟県生活環境部自然保護課「続・新潟県のすぐれた自然 新潟県自然環境保全資料策定調査書 動物（昆虫類、両生類）編」、1993
- ・ 新潟県都市緑花センターホームページ（新潟県の花、木、草花）
<http://www.greenery-niigata.or.jp/plant-db/niigata/index.html>
- ・ 福島司・岩瀬徹「図説 日本の植生」、朝倉書店、2005
- ・ 市川健夫「信州学テキスト『日本の屋根』の風土と文化」、第一企画、2012
- ・ 市川健夫「ブナ帯と日本人」、講談社、1987
- ・ 市川健夫「森と木のある生活」、白水社、1998
- ・ 鈴木和夫・福田健二「図説 日本の樹木」、浅倉書店、2012
- ・ 沼田眞・岩瀬徹「図説 日本の植生」、講談社、2002
- ・ 環境庁自然保護局「第5回基礎調査植生調査報告書植生メッシュデータとりまとめ全国版」、1998
- ・ 環境省自然保護局生物多様性センターホームページ（植生調査概要）
http://gis.biodic.go.jp/webgis/sc-006.html?_ga=2.112973772.959753820.1521543027-1023014100.1503893111
- ・ 市川健夫「雪国文化誌」、日本放送出版協会、2000
- ・ 上越市環境保全課「上越市環境情報だより」、2014
- ・ 信越トレイルオフィシャルサイト（トレイルとは） <http://www.s-trail.net/trail/index.html>
- ・ 文化庁ホームページ（文化財指定等） <http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/shokai/shitei.html>
- ・ 環境省ホームページ 水環境総合情報サイト（日本の名水百選）
<https://water-pub.env.go.jp/water-pub/mizu-site/meisui/>
- ・ 森林総合研究所ホームページ <https://www.ffpri.affrc.go.jp/ffpri.html>
- ・ 環境省ホームページ（日本の世界自然遺産）
<https://www.env.go.jp/nature/isan/worldheritage/shirakami/uiversal/index.html>
- ・ 黒松内町ブナセンターホームページ（ブナの基礎知識）
<http://www.host.or.jp/user/bunacent/bunadata.html>
- ・ 藤田昇「ブナ林構成樹種の太平洋型分布と日本海型分布」、日本分類, 地理 38 巻 p. 311-329、1987
- ・ 青森県庁ホームページ（世界遺産白神山地）
<http://www.pref.aomori.lg.jp/nature/nature/shirakami.html>
- ・ 白神山地世界遺産センターホームページ（白神山地世界遺産推薦書）
<http://tohoku.env.go.jp/nature/shirakami/>
- ・ 国立越後丘陵公園ホームページ（ユキツバキ）
<http://echigo-park.jp/guide/flower/yukitsubaki/index.html>
- ・ 新潟大学農学部付属フィールド科学教育研究センター佐渡ステーション「新潟大学演習林ニュースレター」、第7号
- ・ (一財)新潟経済社会リサーチセンター（にいがた花力） <http://www.rcn.or.jp/?cat=27>
- ・ 環境庁自然保護局「日本の自然環境」、1982

(5) エネルギー・資源

- ・ 上越市史編さん委員会「上越市史 通史編5 近代」、上越市、2004
- ・ 上越市史編さん委員会「上越市史 普及版」、上越市、1991
- ・ 新潟県社会科教育研究会「新潟県上越地方の地誌」、あかつき印刷、1978

- ・林正巳・山崎久雄・磯部利貞「新潟県の地理散歩 上越編」、野島出版、1980
- ・上越市中学校長会・新潟県社会科教育研究会「わが上越 歴史と生活」、2000
- ・上越市ホームページ「上越市の近代史に輝く先人たち」
<http://www.city.joetsu.niigata.jp/site/senjin/>
- ・赤羽孝之「新潟県上越地方の工場分布に関する考察」、上越教育大学研究紀要第8巻第2分冊、1989
- ・地学団体研究会新潟支部「大地のロマンを求めて—新版 新潟地学ハイキング」、新潟日報事業社、1978
- ・フォッサマグナミュージアム「フォッサマグナってなんだろう」、凸版印刷、2006
- ・上越市「市勢要覧」、2015
- ・赤羽孝之・西山耕一「地方工業の研究」、山越企工、1990
- ・末尾至行「水力発電 利用の歴史地理」、大明堂、1980
- ・西山耕一「電気が創った上越近代化物語」、東北電力、2017
- ・高田河川国道事務所「関川水系河川整備基本方針」、1999
- ・高田河川国道事務所「関川水系関川河川維持管理計画」、2012
- ・東北電力ホームページ（主な発電所）
http://www.tohoku-epco.co.jp/comp/gaiyo/gaiyo_data/hatudensyo.html
- ・妙高市環境生活課「妙高市環境基本計画」、2012
- ・秋山隆「日本の水力発電の歴史・意義と、IEA水力実施協定における国際活動」、JCREフォーラム、2017
- ・社団法人電力土木技術協会ホームページ（300号記念技術年表 50年を振り返って）
<http://www.jepoc.or.jp/history/history.html>
- ・経済産業省電力・ガス事業部電力基盤整備課「水力発電を巡る現状について」、水力発電に関する研究会 第1回配付資料、2008
- ・新潟県ホームページ（上越地域における新田開発のあゆみ（用水編））
http://www.pref.niigata.lg.jp/jouetsu_norin/1356862513912.html
- ・井上重一・相場淳一「頸城ガス田」、石油学会誌第3巻第3号、1960
- ・荒川洋一「新潟県下における石油および天然ガスの探鉱と開発」、石油技術協会誌第27巻第4号、1962
- ・産総研地質調査総合センター「日本中部の天然ガス」
- ・新潟県ホームページ（石油（原油）・天然ガスの生産概況）
<http://www.pref.niigata.lg.jp/sangyoshinko/1277420495419.html>
- ・石油技術協会「石油鉱業便覧」、1983
- ・中沢通理「新潟県の石油及び天然ガス開発の状況について」、石油技術協会誌第27巻第4号、1962
- ・徳橋秀一・金子信行「新潟県と石油・天然ガス」、地質ニュース583号 p.18-24、2003
- ・島津光夫「新潟の石油・天然ガス—開発の130年—」、野島出版、2000
- ・新潟市「石油王国 新潟」、2008
- ・松永正智「頸城油田・三ツ俣鉱業の盛衰—明治期の油井株取引—」、二宮書店、1996
- ・天然ガス鉱業会ホームページ（わが国の天然ガス）
http://www.tengas.gr.jp/natural-gas_resources.html
- ・氏家良博「石油地質学概論」、東海大学出版会、1990
- ・日本石油株式会社「石油便覧」、1982
- ・島津光夫「新潟の石油天然ガス—〇話」、野島出版、2009
- ・JXエネルギーホームページ（石油便覧） <http://www.no.e.jxtg-group.co.jp/binran/index.html>
- ・東京ガスホームページ（天然ガスのひみつ） http://www.tokyo-gas.co.jp/kids/genzai/g1_1.html
- ・国際石油開発帝石ホームページ（事業案内 日本）
<http://www.inpex.co.jp/business/japan/index.html>
- ・国際石油開発帝石「直江津LNG基地向け 中部電力との液化天然ガス売買契約の締結について」、2013/7/31
- ・日本ガス協会「天然ガス自動車の普及に向けて」、2017-2018年度版
- ・国際石油開発帝石「直江津LNG基地 パンフレット」
- ・帝国石油株式会社「帝国石油50年史 技術編」、1992
- ・国際石油開発帝石「帝石トッピング・プラント株式会社 頸城精油所における石油精製事業の終結について（お知らせ）」、2012.11.22
- ・新潟県立文書館ホームページ（越後佐渡ヒストリア）
https://www.pref-lib.niigata.niigata.jp/?page_id=591
- ・天然ガス鉱業会「わが国の石油・天然ガスノート」、2018
- ・森田澄人「表層型メタンハイドレート調査の取り組み」、メタンハイドレートフォーラム2014
- ・森田澄人「表層型メタンハイドレート資源量調査結果検討委員会の報告」、メタンハイドレートフォーラム2016
- ・森田澄人・長尾二郎「表層型メタンハイドレート資源量調査及び回収技術開発調査研究について」

- http://www.meti.go.jp/committee/summary/0004108/pdf/032_07_00.pdf
- 資源エネルギー庁資源・燃料部「メタンハイドレート開発の今後の在り方について」、総合資源エネルギー調査会 資源・燃料分科会（第 22 回）配布資料、2017
- http://www.meti.go.jp/committee/sougouenergy/shigen_nenryo/pdf/022_03_00.pdf
- 経済産業省ホームページ（表層型メタンハイドレートの資源量把握に向けた調査を行いました～掘削調査により表層型メタンハイドレートを含む地質サンプルを取得～）
- <http://www.meti.go.jp/press/2014/12/20141225001/20141225001.html>
- 経済産業省ホームページ（表層型メタンハイドレートの資源量の試算とその結果の検証を行いました）
- <http://www.meti.go.jp/press/2016/09/20160916006/20160916006.html>
- 経済産業省ホームページ（平成 26 年度表層型メタンハイドレート調査を開始します）
- <http://www.meti.go.jp/press/2014/04/20140415005/20140415005.html>
- メタンハイドレート資源開発コンソーシアムホームページ（メタンハイドレート探査と資源量評価）
- <http://www.mh21japan.gr.jp/>
- 産経ニュース 2013.12.23 <http://www.sankei.com/life/news/131223/lif1312230016-n1.html>
- 「日本経済新聞電子版（メタンで集まる深海のカニ、ロボットで撮影）」、2010.8.18
- 「北日本新聞（豊穰もたらず深海）」、2015.8.23
- 東京大学ホームページ（新潟県上越市沖の海底に露出した熱分解起源メタンハイドレートを確認、採取に成功） <https://www.s.u-tokyo.ac.jp/ja/press/2006/03.html>
- メタンハイドレート資源開発研究コンソーシアム「新しい天然ガス資源 メタンハイドレート 我が国におけるメタンハイドレート開発計画 フェーズ 2」、2010
- 松本良・長久保定雄・奥田義久・棚橋学・村松康行・庄子仁・長谷川四郎・稲崎富士・笠原順三「特集号 メタンハイドレート (part I) : 産状、起源と環境インパクト」、地学雑誌、2009
- 産総研ホームページ（こんなところに産総研 メタンハイドレート）
- http://www.aist.go.jp/aist_j/aistinfo/story/no5.html
- 上越市産業立地課「メタンハイドレート豆知識」
- <http://www.city.joetsu.niigata.jp/uploaded/attachment/108916.pdf>
- 経済産業省ホームページ（60 秒解説 日本周辺に眠る「燃える氷」）
- <http://www.meti.go.jp/main/60sec/2016/20160216001.html>
- 国際石油開発帝石ホームページ（主要幹線パイプライン）
- http://www.inpex.co.jp/business/japan/line_s.html
- 堀江忠司「日本海側からの広域パイプライン整備に向けた取組について」、第 2 回関東地方エネルギー基盤強化セミナー、2014
- 天然ガス鉱業会「上流投資（石油・天然ガス）の課題～国内資源開発について～」、総合資源エネルギー調査会第 16 回資源・燃料分科会、2016
- 総合資源エネルギー調査会総合部会「天然ガスシフト基盤整備専門委員会 - 報告書」、2012
- 総合資源エネルギー調査会総合部会「天然ガスシフト基盤整備専門委員会 - 報告書 参考資料集」、2012
- 山本一雄「日本海側天然ガス田と太平洋側 LNG 基地とのパイプライン接続」、石油技術協会誌、第 73 巻第 2 号、2008
- 資源エネルギー庁「ガス事業の現状」、総合資源エネルギー調査会 基本政策分科会 ガスシステム改革小委員会第 1 回 - 配布資料、2017
- 上越市ガス水道局「じょうえつのガス」、1997
- 中部電力ホームページ（上越火力発電所）
- http://www.chuden.co.jp/energy/ene_energy/thermal/the_chuden/the_joetsu/index.html
- 北陸地方整備局「港湾事業の事後評価説明資料 直江津港 港口地区 防波堤整備事業」、平成 28 年度第 5 回北陸地方整備局事業評価監視委員会、2017
- 国土交通省北陸地方整備局港湾空港部ホームページ（港湾空港部紹介）
- <http://www.pa.hrr.mlit.go.jp/kouwankuukoubu/index.html>
- 国土交通省港湾局「日本海側拠点港の取組状況について（報告）」、交通政策審議会第 57 回港湾分科会資料、2014
- 直江津港湾協会設立 60 周年・直江津港開港 50 周年記念事業実行委員会、直江津港湾協会「未来への出港（ふなで）」、直江津港湾協会設立 60 周年/直江津港開港 50 周年記念誌、2017
- 国土交通省「関川水系の課題と特徴」、河川整備基本方針検討小委員会第 54 回資料、2006

(6) 交通

- 上越市史編さん委員会「上越市史 普及版」、上越市、1991
- 上越市「上越市第五次総合計画」、2007
- 上越市史編さん委員会「上越市史 通史編 5 近代」、上越市、2004
- 上越市史編さん委員会「上越市史 通史編 4 近世二」、上越市、2004

- ・上越市「市勢要覧」、2015
- ・上越市教育委員会「釜蓋遺跡公園パンフレット」
- ・上越市教育委員会「えっちゃんと弥生へGO」
- ・上越市教育委員会「えっちゃんの上越タイムトンネル」
- ・浅倉有子・志村喬・茨木智志・山縣耕太郎・矢部直人・花岡公貴・荒川将・泉豊「ぶら高田」、北越出版、2015
- ・市川信夫「雪国から 新・北越雪譜」、田畑書店、1983
- ・新潟日報ホームページ（特集にいがた戦後70年 日報モア）
http://www.niigata-nippo.co.jp/feature/sengo70th/list_3.html
- ・市川健夫「フォッサ・マグナを境にした東西の日本文化と南北の国土軸」、直江の津3号、直江津経済文化研究所、2001
- ・新潟県社会科教育研究会・上越市中学校長会「わが郷土上越」、1985
- ・新潟県社会科教育研究会「郷土新潟県の生活風土」、東京法令出版、1984
- ・北陸地域づくり協会「北陸の視座」vol.30、2016
- ・新潟県立文書館ホームページ（〔第50話〕新潟県「国道」事始め）
https://www.pref-lib.niigata.niigata.jp/?page_id=908
- ・新潟県立文書館ホームページ（新潟県内の諸地域に関する相談Q3）
https://www.pref-lib.niigata.niigata.jp/?page_id=939
- ・国土交通省ホームページ（道の歴史）<http://www.mlit.go.jp/road/michi-re/3-1.htm>
- ・国土交通省「地方道の整備と管理について」、新道路研究会資料、2015
<http://www.jice.or.jp/cms/kokudo/pdf/reports/autonomy/roads/01/siryos2.pdf>
- ・国土交通省港湾局「日本海側拠点港の取組状況について（報告）」、交通政策審議会第57回港湾分科会、2014
- ・国土交通省ホームページ（統計情報）http://www.mlit.go.jp/statistics/details/port_list.html
- ・児玉幸多「日本交通史」、吉川弘文館、1992
- ・丸山雍成・小風秀雅・中村尚史「日本交通史辞典」、吉川弘文館、2003
- ・JR東日本長野支社（沿線観光スポット）<https://www.jreast.co.jp/nagano/furusato/obasute.html>
- ・中郷商工会「NAKAGO鉄旅プロジェクト鉄道資源活用地域商業活性化事業 事業成果報告」、2016
- ・老川慶喜「日本鉄道史 幕末・明治篇」、中央公論新社、2014
- ・文化庁ホームページ（国指定文化財等データベース）
http://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/index_pc.html
- ・伊澤和馬「信越線の百年」、信濃路出版、1985
- ・瀬古龍雄「保存版 信越本線の100年」、郷土出版社、1999
- ・国土交通省関東地方整備局「五街道・歴史街道を活かしたまちづくりに関する調査報告書」、平成20年度広域ブロック自立施策等推進調査、2009
- ・上越市中学校校長会・新潟県社会課教育研究会「わが上越 歴史と生活」、2000
- ・日本国有鉄道「日本国有鉄道百年史別巻 国鉄歴史事典」、1973

(7) 農業

- ・上越市史編さん委員会「上越市史 資料編1自然」、上越市、2004
- ・上越市史編さん委員会「上越市史 通史編3近世一」、上越市、2003
- ・新潟県社会科教育研究会「新潟県上越地方の地誌」、あかつき印刷、1978
- ・新潟県ホームページ（農林水産業）<http://www.pref.niigata.lg.jp/norin.html>
- ・諸橋準之助「新潟の米ものがたり」、新潟日報事業者、1996
- ・新潟県農林部「新潟の米 百年史」、第一印刷所、1974
- ・農林水産省北陸農業試験場「北陸農試 試験研究のあゆみ50年」、1994
- ・「新潟米」を軸とした復興営農推進運動委員会『「新潟米」50年のあゆみ』、新潟県農林水産部、1982
- ・木戸三夫「おいしいコシヒカリ11俵どり新技術」、富民協会、1989
- ・農林水産省ホームページ（市町村のすがたグラフと統計でみる農林水産業ランキング）
<http://www.machimura.maff.go.jp/machi/>
- ・農林水産省ホームページ（ため池百選一覧）
<http://www.maff.go.jp/j/nousin/bousai/tameike/hyakusen.html>
- ・農林水産省ホームページ（米の相対取引価格・数量、契約・販売状況、民間在庫の推移等）
<http://www.maff.go.jp/j/seisan/keikaku/soukatu/aitaikakaku.html>
- ・農林水産省（日本酒原料米について）http://www.maff.go.jp/j/seisaku_tokatu/kikaku/sake.html
- ・日本穀物検定協会（米の食味試験）<http://www.kokken.or.jp/test.html>
- ・地域環境資源センターホームページ（日本棚田百選）

- <http://www.acres.or.jp/acres20030602/tanada/index.htm>
- ・水土里ネット関川水系「悠久の恩人『小栗美作』と中江用水の恵みパンフレット」
 - ・上越市教育委員会「釜蓋遺跡公園パンフレット」
 - ・児玉彰三郎 監修・新潟県農村社会研究会編「越佐農民の歩み」、野島出版、1971
 - ・公益社団法人米穀安定供給確保支援機構ホームページ（品種別作付動向）
<http://www.komenet.jp/jishuchousa/144.html>
 - ・水土里ネット関川水系「世界灌漑施設遺産 上江用水路パンフレット」、新潟県上越地域振興局農林振興部」
 - ・農林省北陸農業試験場「北陸農業試験場 試験研究のあゆみ 30年」、1975
 - ・新潟県農林水産部「水田栽培指針」、2011
 - ・新潟県農林水産部「新潟米 おいしい米づくりのポイント」、2017.3
 - ・新潟文化物語ホームページ（特集 file27 新潟のおいしいお米）
<https://n-story.jp/topic/27/page4.php>
 - ・農林水産省（米をめぐる参考資料）
http://www.maff.go.jp/j/seisan/kikaku/kome_siryou.html
 - ・農林水産省農蚕園芸局農産課 監修「日本の稲作」、地球社、1984
 - ・天辰克己・井利一「北陸の稲作」、富民協会、1968
 - ・新潟県農林水産部・農地部／新潟県農業協同組合中央会「新潟の農林水産業平成28年度版 小学校5年生用資料」、2016
 - ・新潟県「にいがたの農林水産業」、2014
 - ・上越市ホームページ（上越野菜）
<http://www.city.joetsu.niigata.jp/site/syoku-iku/joetsu-yasai.html>
 - ・上越市「上越市の農林水産業」、2007.3
 - ・上越市中央農業協同組合「合併10周年記念誌 土の香り」、1981
 - ・J A えちご上越「第5次中期3カ年計画書（平成28年度～30年度）」
 - ・(独) 農研機構中央農業研究センター北陸研究拠点ホームページ
<http://www.naro.affrc.go.jp/org/narc/inada/koshinokaori/group.html>
 - ・機能性農産物活用促進協議会パンフレット
 - ・機能性農産物活用促進協議会「高アミロース米『越のかおり』チラシ」
 - ・新潟日報社報道部「コメを考える」、1991
 - ・北陸農政局新潟統計情報事務所上越出張所「知っていますか こだわり上越米」、2000
 - ・北陸農政局新潟統計情報事務所上越出張所「上越米のあゆみ」、1994
 - ・全国美土里ネットホームページ（世界かんがい遺産）
<http://www.inakajin.or.jp/jigyoutabid/372/default.aspx>

(8) 食品産業

- ・上越市史編さん委員会「上越市史 通史編4 近世I」、上越市、2004
- ・上越市史編さん委員会「上越市史 通史編7 民族」、上越市、2004
- ・上越市史編さん委員会「上越市史 通史編3」、上越市、2003
- ・上越市史編さん委員会「上越市史 普及版」、上越市、1991
- ・上越市ホームページ（上越市の輝く先人達 川上善兵衛の紹介）
<http://www.city.joetsu.niigata.jp/site/senjin/kawakamizennbee.html>
- ・上越市ホームページ（頸城区総合事務所 頸城区の酒づくりと酒づくり唄）
<http://www.city.joetsu.niigata.jp/soshiki/kubiki-ku/kubiki-saka2.html>
- ・メイド・イン上越ホームページ <http://madeinjoetsu.jp/>
- ・上越市「発酵のまち上越パンフレット」
- ・じょうえつ雪文化シンポジウム実行委員会「じょうえつ雪文化シンポジウム報告書」、日本雪工学会・上越市、1995
- ・羊泉社MOOK「本気で旨い日本酒」、洋泉社、2017
- ・新潟物語ホームページ（特集ファイル85 越後杜氏と酒造り唄）<https://n-story.jp/topic/85/page1>
- ・新潟物語ホームページ（特集ファイル71 にいがたの発酵文化）
<https://n-story.jp/topic/71/page1.php>
- ・新潟物語ホームページ（特集ファイル75 新潟淡麗）<https://n-story.jp/topic/75/page1>
- ・合同会社ローカルパワフルメディア「酒と人」、2012
- ・新潟県酒造組合小史編さん委員会「新潟淡麗の創造へ」1960-2003、新潟県酒造組合、2003
- ・新潟県南魚沼市産業振興部商工観光課「南魚沼酒語り」、2014
- ・新潟県酒造組合公式サイト <http://www.niigata-sake.or.jp/index.html>

- ・新潟市歴史博物館「平成20年度企画展 酒蔵 ～近代新潟の酒造り～」、2008
- ・松本春雄「新潟県酒造史」、新潟県酒造組合、1961
- ・中村豊次郎「越後杜氏と酒蔵生活」、新潟日報事業社、1999
- ・新潟県酒造従業員組合連合会「越後杜氏の足跡」、新潟県酒造従業員組合連合会、1986
- ・農山漁村文化協会「伝承写真館 日本の食文化⑤甲信越」、2006
- ・国産ワインコンクールホームページ <https://www.pref.yamanashi.jp/jwine/>
- ・みそ健康づくり委員会ホームページ (味噌品評会) <http://miso.or.jp/>
- ・大杉屋惣兵衛ホームページ <http://ohsugiya.com/okinaame.html>
- ・高橋孫左衛門ホームページ <http://www.etigo-ameya.co.jp/>
- ・池上佳芳里「北陸地方における雪室の分譜とその盛衰」、地理科学 vol.54 no.2 p.126-137、1999
- ・新潟県ホームページ (統計グラフで見る新潟県)
<http://www.pref.niigata.lg.jp/tokei/1356865357142.html>
- ・国税庁ホームページ (統計情報) <https://www.nta.go.jp/kohyo/index.htm>
- ・国税庁ホームページ (全国市販酒類調査の結果について)
<https://www.nta.go.jp/shiraberu/senmonjoho/sake/shiori-gaikyo/seibun/06.htm>
- ・岩の原葡萄園ホームページ <http://www.iwanohara.sgn.ne.jp/about/index.html>
- ・「新潟日報 (創業100年超の老舗企業 本県1283社全国5位)」2016.12.17
- ・新潟県酒造組合小史編纂委員会「新潟淡麗の創造へ」、新潟県酒造組合、2003
- ・日本酒造組合中央会ホームページ (日本酒とは?)
<http://www.japansake.or.jp/sake/know/what/index.html>
- ・酒類総合研究所「お酒のはなし1」、酒類総合研究所情報誌、2014.1
- ・酒類総合研究所「お酒のはなし2」、酒類総合研究所情報誌、2016.2
- ・日本酒造組合中央会編「日本酒と日本文化」
- ・坂口謹一郎監修、加藤辨三郎編者「日本の酒の歴史 一酒造りの歩みと研究一」、研成社、1977
- ・本間伸夫「新潟の風土・食・食文化ー食は新潟にあり」、新潟日報事業社、2008
- ・本間伸夫・石原和夫「東西食文化の日本海側の接点に関する研究 (VI) 味噌の自家醸造」、新潟県立女子短期大学紀要第31集、1994
- ・西山耕一「頸城の酒男が創った 上越近代物語」、上越かわらばん 2017.7.9-10.22
- ・新潟お菓子プロジェクト実行委員会・新潟県立歴史博物館「お菓子と新潟」、2016
- ・酒と文化の研究所創設準備委員会「日本酒と地域文化 講演記録」、上越市、1998
- ・酒と文化の研究所創設準備委員会「ワイン文化と技術」、上越市、1997
- ・朝日酒造社史編纂委員会「朝日酒造七十年史」、新潟日報事業社、1990
- ・あおき味噌ホームページ (浮き麴みそについて) <http://www.aokimiso.server-shared.com/>
- ・「広報上越 (発酵のまち上越)」2011.11.1
- ・杉田味噌醸造所パンフレット
- ・新潟市広報課「日本海政令市 新潟第9号」、新潟市総合情報誌、2012
- ・高田税務署「上越の酒造り出稼ぎ人」、上越酒造研究会、1930
- ・中村豊次郎・小泉節子編「越後の酒男」、安達源右エ門、1966
- ・宮越光昭「飴屋今昔」、北越出版、2009
- ・山本博「日本のワイン」、早川書房、2003
- ・麻井宇介「日本のワイン 誕生と揺籃時代」、日本経済評論社、1992
- ・上越市「地産地消推進の店ガイドブック」、2015
- ・上越教育大学学校教育学部生活・健康系コース「家庭」「『発酵のまち上越』で『和食』を学ぶ」、2016
- ・市川健夫「日本の食風土記」、白水社、1998
- ・小泉武夫「醤油・味噌・酢はすごい」、中央公新社、2016
- ・小泉武夫「発酵」、中央公論社、1989
- ・石毛直道「日本の食文化史-旧石器時代から現代まで」、岩波書店、2015
- ・柳田友道「うま味の誕生」、岩波書店、1991
- ・酒類総合研究所「酒類販売管理研修通信第6号」、2005
- ・AERA dot. (奈良時代から続く歴史 日本は世界一の発酵食品大国だ)
<https://dot.asahi.com/aera/2016071500260.html>
- ・キリン食生活文化研究所 (発酵食品名鑑)
<http://www.kirin.co.jp/csv/food-life/know/activity/ferment/miso/index.html>
- ・日本の食生活全集長野編集委員会「日本の食生活全集 聞き書 長野の食事」、農山漁村文化協会、1986
- ・日本の食生活全集新潟編集委員会「日本の食生活全集 聞き書 新潟の食事」、農山漁村文化協会、1985
- ・石田耕吾「頸城人の衣食住とその一生」、石田耕吾、1994
- ・秋山祐一「日本酒」、岩波書店、1994
- ・酒類総合研究所・日本酒造組合中央会「平成28酒造年度 全国新酒鑑評会」、2017

(9) 製造業

- ・上越市史編さん委員会「上越市史 通史編 5 近代」、上越市、2004
- ・上越市史編さん委員会「上越市史 通史編 6 現代」、上越市、2002
- ・上越市史専門委員会現代史部会「上越市史業書 バテンレースと細幅織物」、上越市、1997
- ・上越市史編さん委員会「上越市史 普及編」、上越市、1991
- ・新潟県社会科教育研究会「新潟県上越地方の地誌」、あかつき印刷、1978
- ・赤羽孝之「新潟県上越地方におけるスキー工業-ある地場産業の崩壊-」、歴史地理学 146 号、1989
- ・赤羽孝之「新潟県上越地方の工場分布に関する考察」、上越教育大学研究紀要第 8 巻第 2 分冊、1989
- ・林正巳・山崎久雄・磯部利貞 監修「新潟県の地理散歩上越編」、野島出版、1980
- ・上越市中学校長会・新潟県社会科教育研究会「わが上越 歴史と生活」、2000
- ・赤羽孝之・西山耕一「地方工業の研究-新潟県上越地方を中心として-」、山越企工、1990
- ・赤羽孝之「新潟県上越地方の工場分布に関する考察-消費材工業を中心として-」、上越教育大学研究紀要第 5 巻第 2 分冊、1986
- ・西山耕一「電気が創った 上越近代化物語」、東北電力、2017
- ・古厩忠夫「裏日本 -近代日本を問い直す-」、岩波新書、1997
- ・上越市「日本スキー発祥記念館パンフレット」
- ・上越ものづくり企業データベース <http://www.j-monodb.jp/>
- ・新潟県「にいがたモノ・クリエイト 2017-2018」、2017
- ・日本曹達ホームページ <http://www.nippon-soda.co.jp/>
- ・信越化学ホームページ <https://www.shinetsu.co.jp/>
- ・大平洋特殊鑄造ホームページ <http://www.psc-cast.com/>
- ・新日鐵住金ホームページ <http://www.nssmc.com/index.html>
- ・理研製鋼ホームページ <http://www.rkn.co.jp/>
- ・三菱ケミカルホームページ <https://www.m-chemical.co.jp/company/index.html>
- ・有沢製作所ホームページ <http://www.arisawa.co.jp/>
- ・ウエカツ工業ホームページ <http://uekatsu.co.jp/>
- ・ポラテクノホームページ <http://www.polatechno.co.jp/>
- ・大島農機ホームページ <http://www.oshimanoki.com/>
- ・吉田バテンレースホームページ <http://battenlace-yoshida.jp/>
- ・日鉄住金工材ホームページ <http://www.nsz.co.jp/>
- ・丸互ホームページ <http://www.marugo.ne.jp/>
- ・直江津電子工業ホームページ <http://www.naoden.co.jp/>
- ・日信工業ホームページ <http://www.nissinkogyo.co.jp/>
- ・OKI プリンテッドサーキットホームページ <http://www.oki-printed.co.jp/>
- ・池田庄治「新潟県の伝統産業・地場産業（上巻）」、第一法規出版、1984
- ・池田庄治「新潟県の伝統産業・地場産業（下巻）」、第一法規出版、1984
- ・農研機構ホームページ（生物系特定産業技術研究支援センター 資料館）
<http://www.naro.affrc.go.jp/brain/iam/shiryo/>
- ・農林水産・食品産業技術振興会ホームページ（日本の「農」を拓いた先人たち）
<https://www.jataff.jp/senjin/index.html>

(10) 建築・土木

- ・上越市史編さん委員会「上越市史 通史編 7 民俗」、上越市、2004
- ・上越市「町家読本 -高田の雁木町家のはなし」、2010
- ・上越市教育委員会「越後高田の雁木」、1982
- ・高田開府 400 年記念誌編集委員会「高田開府 400 年」、高田開府 400 年祭実行委員会、2014
- ・新潟県立歴史博物館ホームページ（常設展示） http://nbz.or.jp/?page_id=9
- ・浅倉有子・志村喬・茨木智志・山縣耕太郎・矢部直人・花岡公貴・荒川将・泉豊「ぶら高田」、北越出版、2014
- ・新潟日報朝刊（越後郷愁雁木を歩いた人々16）」2017. 1. 16
- ・上越市文化振興課「高田まちなみ歴史散策」
- ・上越市創造行政研究所「歴史的建造物の保存と活用に関する調査報告書」、2004
- ・新潟文化物語ホームページ（特集 file37 定期市と雁木通りのまち巡り）
<https://n-story.jp/topic/37/page1>
- ・野口明子「『雁木・町家』の利用価値低下の要因の明確化と新たな改修手法の開発～新潟県上越市高田地区雁木通りを対象として」、慶応義塾大学大学院政策・メディア研究科修士論文、2012
- ・上越市「上越市の文化財」

・高田寺町寺社めぐりホームページ <http://takadateramachi.jp/>

(11) 教育・福祉

- ・上越教育大学ホームページ (大学紹介) <http://www.juen.ac.jp/050about/010info/010purport.html>
- ・上越教育大学ホームページ (進路・就職) <http://www.juen.ac.jp/140career/050situation.html>
- ・文科省ホームページ (国立の教員養成大学・学部 (教員養成課程) の平成 29 年 3 月卒業者の就職状況等について) http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/30/02/1401088.htm
- ・新潟県特別支援教育史研究会「捨身の願い」、北越出版、2015
- ・上越市ホームページ「上越市の近代史に輝く先人たち」
- ・上越市史編さん委員会「上越市史 普及版」、上越市、1991
- ・上越市史編さん委員会「上越市史 通史編 5 近代」、上越市、2004
- ・上越市史編さん委員会「上越市史 通史編 6 現代」、上越市、2002
- ・公孫会記念誌編集部「公孫樹下の八十年」、東京法令出版、1982
- ・公孫樹下の百年編集委員会「公孫樹下の百年」、第一印刷所、2005
- ・二谷貞夫・和井田清司・釜田聡「上越教師の会の研究」、学文社、2007
- ・丸山昭生・小杉敏勝「教育 0 の解消」、北越出版、2007
- ・上越教育大学「上越教育大学 30 周年記念誌」、2008
- ・二谷貞夫・和井田清司・釜田聡「上越教師の会の研究」、学文社、2007
- ・村山和夫「高田藩」、現代書館、2008
- ・吉富芳正・田村学「新教科誕生の軌跡」、東洋館出版社、2014
- ・川村知行「地域から考える総合学習」、北越出版、2003
- ・文部科学省「第 2 期教育振興基本計画 (2013~2017 年度)」
- ・上越市教育委員会「上越市総合教育プラン (2007~2016 年度)」
- ・上越市立教育センター・上越カリキュラム開発研究推進委員会「上越カリキュラム」
- ・上越市教育委員会「つながり、高め合う学校づくり『上越市学校評価システムガイド』」、2010
- ・矢上克己「新潟県社会福祉史の基礎的研究」、本の泉社、2010
- ・久比岐に生きる出版事業刊行会「社会教育の風土 久比岐に生きる」、1984
- ・大谷勝巳「新潟県障害児教育沿革略史」、1992

(12) 文化・芸術

- ・上越市史編さん委員会「上越市史 普及版」、上越市、1991
- ・上越市史編さん委員会「上越市史 通史編 7 民俗」、上越市、2004
- ・上越市史専門委員会民俗部会「上越市史業書 桑取谷民俗誌」、上越市、1999
- ・上越市教育委員会「上越市の文化財」
- ・濱谷浩・酒井忠康・徳永建一・野町和嘉・藤田裕彦・多田亜生・加藤絢・片野恵介「生誕 100 年 写真家・濱谷浩」、クレヴィス、2015
- ・新潟文化物語ホームページ (特集 file84 越後瞽女) <https://n-story.jp/topic/84/page1>
- ・鈴木昭英「越後瞽女ものがたり 盲目旅芸人の実像」、岩田書院、2009
- ・直江の津取材編集部「特集 人びとの心を継ぐ 天と地の恵み桑取谷 西横山小正月行事」、直江の津第 8 号、直江津経済文化研究所、2002
- ・斎藤真一「瞽女盲目の旅芸人」、日本放送出版協会、1972
- ・斎藤真一「瞽女物語」、講談社、1977
- ・ジュラルド・グローマー「瞽女うた」、岩波書店、2017
- ・市川信夫「雪国から 新・北越雪譜」、田畑書店、1983
- ・辺見じゅん「新・北越雪譜」、角川書店、1985
- ・NPO 法人高田瞽女の文化を保存・発信する会「高田の瞽女サ 続ゆかりの旅路パンフレット」
- ・NPO 法人高田瞽女の文化を保存・発信する会「瞽女 その思い出とゆかりの地パンフレット」
- ・上越市総合博物館「斎藤真一と瞽女 池田敏章コレクション」図録、2012
- ・瞽女ミュージアムパンフレット
- ・板垣俊一「瞽女宿再現—瞽女唄伝承運動の意義と現状—」、新潟県生活文化研究所、1996
http://nirr.lib.niigata-u.ac.jp/bitstream/10623/16602/1/08_03_0011.pdf
- ・鈴木昭英「瞽女 信仰と芸能」、高志書院、1996
- ・ジュラルド・グローマー「瞽女と瞽女唄の研究」、名古屋大学出版、2007
- ・佐久間淳一「民芸・民俗双書 91 瞽女の民族」、1983
- ・上越市教育委員会「上越市歴史文化基本構想」、2011

○ その他資料提供・協力者（順不同）

フォッサマグナミュージアム、津南町農と縄文の体験実習館なじょもん、国土交通省北陸地方整備局高田河川国道事務所、新潟県砂防課、新潟県妙高砂防事務所、大山賢一氏、上越教育大学山縣耕太郎研究室、気象庁新潟气象台、防災科学技術研究所雪氷防災センター、上越科学館、横山宏太郎氏、上越教育大学五味川裕研究室、国際石油開発帝石株式会社、新潟県農業総合研究所、新潟県醸造試験場、上越市農政課、御所窪賢一氏、西山耕一氏、上越教育大学光永伸一郎研究室、新潟大学黒野弘靖研究室、上越市学校教育課、小林毅夫氏、新潟県立歴史博物館、上越市立総合博物館、小杉敏勝氏、丸山昭生氏、武蔵野酒造、丸久味噌、杉田味噌醸造場、山本味噌醸造場、岩の原葡萄園、JAえちご上越

第3章 地域資源情報を活かした地域づくり人材の 発掘・支援方策

第3章 地域資源情報を活かした地域づくり人材の発掘・支援方策

3-1 基本方針

地域資源を活かした地域づくりには、政策形成、地域づくり活動、ソーシャルビジネス、あるいは趣味や余暇活動などの場面において、創造的な発想が必要である。ここで言う創造とは、アイデアレベルの発想から、イノベーションに至るまで幅広いものを指す。

こうした創造を生み出す人材が地域づくりには必要であり、個人の自発的な動きを待つだけでなく、創造が生み出される仕組みを構築することが重要である。

よって、ここでは、こうした人材の発掘・支援方策に必要な要素として、(1) 学習－思考－行動の循環プロセス、(2) 循環を強化する交流の場（プラットフォーム）の必要性について提案する。

なお、本研究での提案は、強い使命感、地域づくりへの明確なビジョン、行動力を兼ね備えた限られた人にしかできない地域づくりだけでなく、地域づくりに携わる人々の裾野を広げることには留意している。

(1) 学習－思考－行動の循環プロセス

地域資源を活かした地域づくりが推進されるためには、地域資源を知っている人が、地域について考え、行動し、その結果を受けて再び学びを深め、個人や仲間で考え、新たな行動を起こしていく循環が必要である。

ここでは、こうした循環プロセスに必要な要素としての、地域資源を学ぶ「学習」、地域のことを考える・議論する「思考」、地域づくりなどの「行動」を考えてみたい(図表 3-1)。

① 学習

ここで言う「学習」とは、政策形成や地域づくりを考える上で必要な地域資源情報であり、学習することで、地域への愛着・誇りの形成や内外に向けた情報発信にも資する内容である。

これらは、特定の分野に関する専門性の高いものではなく、特徴が生まれた背景や要因、まちに与えた影響などが分かる総合的な視点、地域資源同士の結びつきが分かる体系的な視点、市内外に説明ができる客観的視点から整理された地域資源に関する学習を意味する。

② 思考

ここで言う「思考」は、学びで得た地域資源情報を活かして、個人で考えたり、仲間で考えたり、意見交換をしながら自らの考えを整理していく過程である。例えば、まちの過去から未来を想像したり、他分野の地域資源からヒントを得たり、地域の特徴を基に異業種間で話し合いアイデアを得たり政策を形成したりすることである。

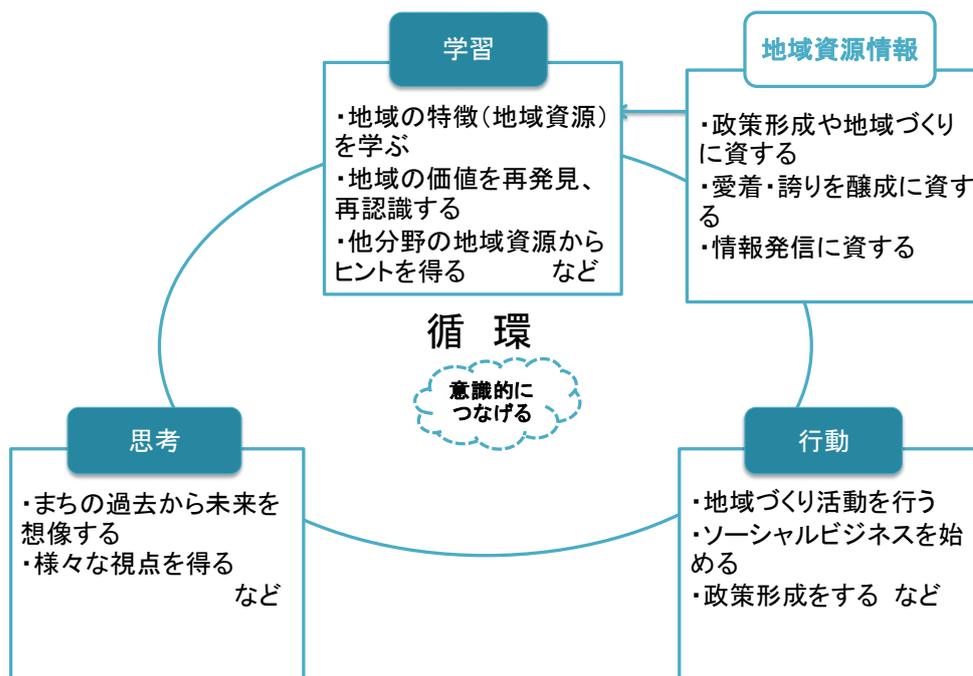
この「思考」の場においては、地域資源を大切にする思いを共有しながら、目標（ミッション）は人それぞれであることを尊重し合い進めることが重要である。

③ 行動

ここで言う「行動」は、地域資源情報に基づき思考した内容を活かして、政策形成や地域づくり活動、ソーシャルビジネスなどを行うことである。

「行動」の実行者は、個人あるいは学びや思考の過程でできた同年代や異業種グループなどが考えられる。また、こうした行動は1回で終わらせず、行動の結果から新たな発見や発想を得て、さらに新たな学びや思考につなげていくことも重要である。

図表 3-1 学習-思考-行動の循環プロセス



(2) 循環を強化する交流の場（プラットフォーム）の必要性

(1) で述べた要素は、それぞれがつながり循環する内容を含んでいるが、より活発に循環していくためには、学ぼう、考えよう、行動しようという気持ちになる原動力が必要である。

こうした原動力は、個人の努力でも得ることはできるが、多様な人が参加する「交流の場（プラットフォーム、以下プラットフォームという）」で行われる、様々な話題提供、ディスカッション、参加者同士の情報交換や学び合いなどを通して得ることもできる。

ここでは、プラットフォームで得られるこうした原動力として、①シビックプライド、②知恵、③ネットワーク（つながり）について説明する。（図表 3-2）。

① プラットフォーム上で得られるシビックプライド

a 愛着・誇りの醸成

地域への愛着・誇りがあることで、より地域に目が向けられ、結果として地域を良くしていくことにつながる。

プラットフォームでの話題提供や参加者同士の会話から、地域の良さや魅力を知るあるいは再認識することで、地域への愛着・誇りが強化されることがある。

また、愛着・誇りは、循環が継続することで、さらに醸成、強化されていくものでもある。

b 行動するモチベーション（気持ち）

実際に行動している人の思いや取組に共感することや、自分と同じ方向性の人と知り合うことで、自分でも何かやってみようと思うヒントや目標、勇気などを得ることがある。

地域で行動を起こす動機は様々であり、地域に対する使命感で動く人もいれば、他者と一緒に生きている関係性に幸せや生きがいを見いだす価値観で動く人もいる。例えば、地域の課題解決をビジネスとしていくソーシャルビジネスや、自らの趣味を地域にも仕事にも活かす半観光・半スポーツ等の働き方、負担にならない地域活動で安定した日常生活と精神的な満足感の得られるライフスタイルを追求するなど、人は様々な目標を持って活動している。

プラットフォームにおいては、こうした多様な人の話題提供や多様な人との交流が可能であり、自分事として行動する上でのモチベーションを得ることができる。

② プラットフォーム上で得られる知恵

新しい知識や様々な視点からの意見、情報、アイデア等は、学びを深めることや、新しい発想につながる。また、新しく事業を立ち上げたり活動をする際には、実践的な助言や支援、財政的な支援制度や事業コンテストの情報などが、行動に踏み出す後押しともなる。

プラットフォームにおいて、様々な分野からの話題提供や、老若男女、異業種同士の交流を通して、こうした様々な知恵を得ることができる。また、プラットフォームの中にコーディネーター的な人材を置くことで、より効果的に様々な情報や制度を活用する知恵が得られる状態とすることもできる。

③ プラットフォーム上で得られるネットワーク

仲間学び合い、考えることで、単独で行うよりも楽しい気分を得たり、より内容が深まる場合がある。また、共に行動し相談できる仲間を得ることは、気持ちや内容の面での支え合いや切磋琢磨していくことができ、行動の充実にもつながる。

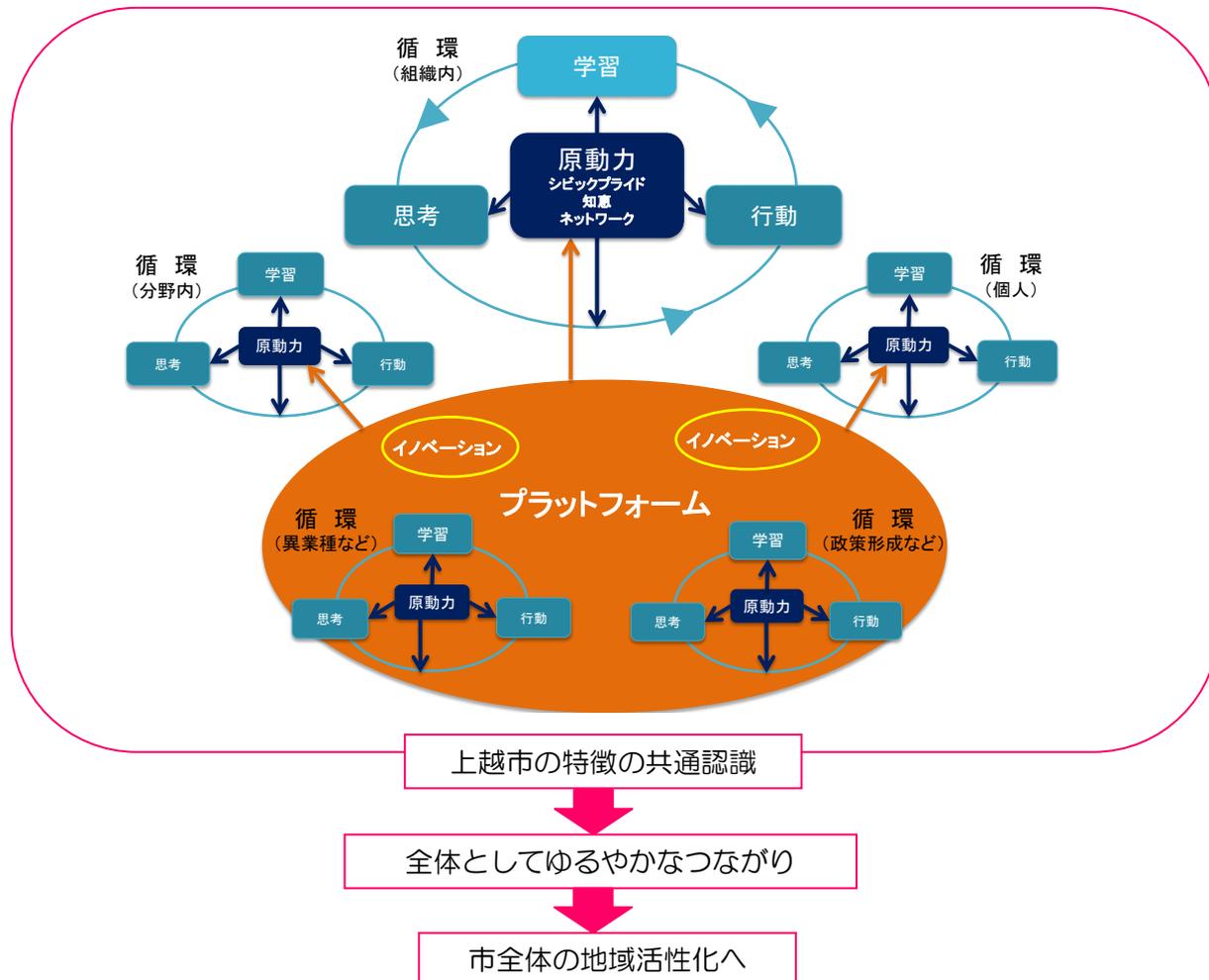
プラットフォーム自体が、複数で学び合い考える場であるとともに、ここで得られた関係が継続していくことで、こうした原動力となるネットワークを得ることができる。

地域資源情報を活かした地域づくり人材の発掘・支援に必要な(1)(2)の要素の全体像を示したものが図表3-3である。

循環は、一つではなく、組織内、分野内、個人など市内の様々な場所で起こるものである。この循環をより強化する「シビックプライド」「知恵」「ネットワーク」といった原動力を得るプラットフォームがあり、このプラットフォームを介して、上越市の特徴についての共通認識を持つことで、全体としてゆるやかにつながり、地域資源を活かした地域づくりに向かっていく。

プラットフォームで得られた「原動力」は、既存の分野内や組織内での循環を強化するものとして持ち帰ることができる。また、プラットフォームは、個別の循環だけでは生まれにくい、分野横断的な政策形成や異業種間の循環、「学習」「思考」「行動」の循環の積み上げよりもどちらかと言うと偶発性が必要なイノベーションなどを生み出す場ともなる。

図表 3-3 地域資源情報を活かした地域づくり人材の発掘・支援に必要な要素の全体像



3-2 取組方策

ここでは、3章の基本方針で示したプラットフォームの形成に向けた方策を整理した。

循環プロセスとプラットフォームで得られる原動力との関係を意識して考えると、「学習から思考」の過程では、裾野を広げるための学びや、段階的に考えを深めていく仕組みなど、循環プロセスに巻き込む要素が求められる。他方、「思考から行動」の過程では、目的を明確にし、実践に必要な支援や行動に踏み出すきっかけが必要である。よって、ここでは、「学習から思考」を意識したプラットフォームと「思考から行動」を意識したプラットフォームに分けて提示するとともに、全体に共通する留意事項を整理する。

また、以上の方策を各分野の事業の中で役割分担をしながら実行したり、分野横断的に新たな取組として実行することで、全体として「地域資源情報を活かした地域づくり人材を発掘・支援する仕組み」を構築する。

(1) 「学習から思考」を意識したプラットフォーム

① 地域資源情報の蓄積と継続

地域についての学びには、地域資源を学ぶ教材が整理されていることが必要であり、本報告書で行った地域資源情報の取りまとめもその導入（入口）となるものである。また、上越市では、既に、「上越カリキュラム」、「謙信キッズスクールプロジェクト」など、地域の良さを知り、学びの導入（入口）となる教材がある。これらは小・中学生だけでなく、大人が政策や地域活動を考える上で必要な教材のコンセプトに通じるものであり、これらの教材を活かしていくことも必要である。しかし、現在の上越市内では、これまで地域資源を研究し情報を継承してきた人材の高齢化が進んでいるという課題もある。

こうしたことから、プラットフォームの共通テーマとなる「地域資源情報」を蓄積するとともに、継承する人材を発掘し、ネットワークを形成する仕組みとして、市内大学や教育委員会、地域の有識者が協力して行う地域研究会のような仕組みも必要となる。

② 入口となる学びの提供

人材の裾野を広げるためには、より多くの人々が学ぶことで、地域を語れる人材が増え、まちづくりに興味を持つ人が増えることが必要である。例えばカフェのような、やわらかい雰囲気の場所で、強制的ではなくいつでも気軽に学び始められる場の設定などが考えられる。

また、学びの内容についても、自らの趣味や興味から始められるテーマや、連続ではなく一回で完結する内容であるなど、取組みやすい工夫も必要である。

③ 段階的な学びの仕組み

具体的な活動につながるためには、学び始めは興味のある分野についての単発の講座であっても、そこから連続して学び、議論し、考え、自ら調べるなど、徐々にステップアップできる段階的な学びにつながる仕組みが求められる。

また、考えを実行するためのサポートや仲間を得る交流機能を付加することで、行動に移しやすい環境を提供することも必要である。

この点は、例えば公民館事業で実施されている「元気の出るふるさと講座」のコンセプトなどとも重なるものであることから、今後、こうした既存の事業を活用していくことも効果的である。また、上越教育大学などで取り組んでいるアクティブラーニングは、課題解決力など人の力を引き出す手法として参考となるものであり、大学と連携した取組も重要である。

事例 1 まちなかキャンパス長岡(長岡市)

「学び」と「交流」をキーワードにしたまちなかの交流拠点施設。そこでは、「市民協働によるひとづくり・ものづくり・まちづくり」を担う人材育成のため、「まちなかカフェ」→「まちなか大学」→「まちなか大学院」と体系的な学びを提供している。

また、学びで得た知識・経験を活かした実践の場である「まちづくり市民研究所」も開設している。

《運営体制等》

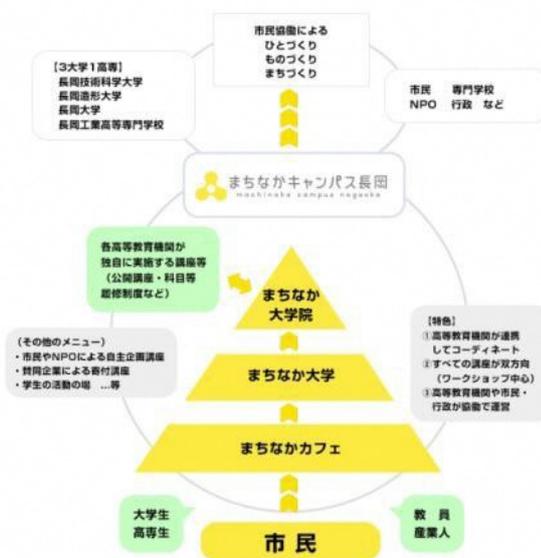
各講座は、市内3大学 1 高専と市民、長岡市からなる「まちなかキャンパス長岡運営協議会」で企画・運営。(平成 23 年 9 月開校)

《取組内容》

- ・「まちなかカフェ」…学びの入り口で、60分から90分程度の単発講座を年間50回程度開講。学ぶことの楽しさを感じてもらうため、オープンスペースでお茶を飲みながらおしゃべりするように学ぶ新しいスタイル。
- ・「まちなか大学」…4回から5回の連続で、系統だってまとまった知識を得られる講座。受講者が目的意識を持って自ら考えるきっかけづくりを目的としている。
- ・「まちなか大学院」…まちなか大学の内容をさらに深めて学ぶ場。一方的な講義だけではなく、調査、研究、フィールドワークなど、ゼミ形式で参加者自らが課題を見つけ、実践的に学習する場。
- ・「まちづくり市民研究所」…学びの場で得た知識や経験等を生かし、身近な地域課題の解決策をつくり出す、市民協働プロジェクト。指導担当教員と市民から公募する約10名の市民研究員で構成される。

▶ 参考としたポイント

- ・入口となる学びにおける、楽しく気楽に学べる仕組み。
- ・学びをレベルアップしていくことのできる体系的な学びの仕組み。
- ・地元大学との協力体制。



参考) まちなかキャンパス長岡ホームページ

長岡大学生涯学習センター「生涯学習研究年報」第5号(通巻第14号)
月刊公民館 2015.10

事例2 シブヤ大学(東京都渋谷区)

特定の校舎はなく、街のあらゆる場所を「教室」と捉えた取組。社会教育の推進を図る活動と子どもの健全育成を図る活動として、地域密着型の学びの場づくり（授業）、参加者同士の自発的な活動サポート（ゼミ・サークル）、まちづくり活動と情報共有を行っている。

全国に姉妹校のネットワークも広がっており、「街がまるごとキャンパス」というコンセプトや具体的な活動、組織運営のノウハウを共有し、相互支援を行っている。

《運営体制等》

渋谷区議が新しい生涯学習事業として発案、民間主導で渋谷区が連携していく流れで設立。（平成18年9月開校）まちづくりをコンセプトにした特定非営利活動法人が運営。少数の事務局専任スタッフを中心に、企画やデザインなどの分野で活躍するプロフェッショナル、日ごろ様々な分野で働き多彩なスキルを持つボランティアスタッフなど、総勢約200名のチームで活動を支えている。

《取組内容》

- ・地域密着型の学びの場づくり（授業）…「シブヤで学ぶ」として、渋谷のあらゆる場所を教室にして、街に関わる市民、企業、NPO 団体などのさまざまな知恵や技術を持った人々を先生に迎え、住民の興味・関心を広げるきっかけになれるような授業企画を無料で提供。趣味的なものからまちづくりに関すること、親子で参加できるものから留学生が参加するものまで、テーマや対象者も多様。
- ・参加者同士の自発的な活動サポート（ゼミ・サークル）…「シブヤであそぶ」として、授業から生まれた勉強会や研究会、趣味嗜好に合わせた集まりなど、街にさまざまな“場”をつくる「ゼミ・サークル」活動。例えば、恵比寿を音楽の溢れる街にする合唱サークル『Sing!恵比寿』や、視覚障害者のための音声字幕をつくる『音声解説ゼミ』などがある。
- ・まちづくり活動と情報共有…「シブヤをつくる」として、地域の活性化や地域の課題解決を目的としたまちづくりプロジェクトを行うもの。例えば、代々木公園と連携して行う泊まりがけの防災訓練「Shibuya Camp」や、市民主体でつくる街の音楽祭「渋谷ズンチャカ!」、環境や福祉などをテーマにした既存のNPO団体等と連携したものなどがある。

参考) シブヤ大学ホームページ
原宿新聞WEB版（2010年1月7日）
月刊公民館 2015.10

▶ 参考としたポイント

- ・入口となる学びの多様性、わくわく感。
- ・参加者が講師ともなれる、主体性の高い学び。
- ・まち全体をキャンパスと見立て、よりまちを意識させる仕組み。
- ・入口の学びからまちづくりの活動へつながるサポート体制。



(2)「思考から行動」を意識したプラットフォーム

① 官民協働政策形成の場の提供

地域資源を活かした行動には、様々な種類があり、学ぶことから始まり個人や団体の循環の中で生まれるものもある。一方で、まちづくり全体の方向性を考える政策形成については、さらに意識的な機能が必要である。

具体的には、従来からある総合計画策定などの際に開催されている市民会議などに加え、官民協働で常時まちづくりについて考える場を作っていくことなどである。

こうした場で重要なことは、異業種、老若男女を基本として、特に現役世代を巻き込んだ集まりとしていくことである。また、メンバーも固定ではなく、半数ずつ入れ替わるなど新陳代謝を良くすることも必要である。そのことで、地域で活躍できる協力者を増やし、人材が次の人材の力を引き出すことにもつながる。

また、考え、議論するだけでなく、その仲間で実際に地域づくり活動を行い、そこから課題を見つけ、政策形成に活かすことも有効である。その際は、身近な出身地域ごとのグループと全体会を設定し、グループごとの活動を主としながら全体で情報を共有していくなど、活動しやすい体制の工夫も必要である。

事例3 鶴岡まちづくり塾(山形県鶴岡市)

市の将来を担う人材育成と多様な分野で活躍する若者の交流・連携を図る目的で設置。地域課題の検討や地域資源を活かしたまちづくりの検討と実践、市総合計画実施計画における施策への提言等を行う。

《運営体制等》

市総合計画を作成する際、若い人の意見を聞く必要があることから設置に至る。サテライト合併のコンセプトを活かし、鶴岡らしい集まりを考えた結果、全体活動とグループ活動を行う仕組みとした。(平成21年度から実施)

メンバーは、おおむね20～40歳の公募された市民(市職、会社員、銀行員、美容師、デザイナー等市民の混合)で、現在は第4期目、述べ85名。地元山形大学の教授がアドバイザーとなり、事務局は政策企画課と各地域庁舎総務企画課が行っている。

《取組内容》

第1期(平成21.22年度)に企画案づくり研修、KJ法を活用した課題の共有など行った上で、その内容を引き継ぎながら継続している。

- ・全体活動…各グループの活動報告、交流会、現地学習会、実施計画に関する意見聴取、情報誌での活動紹介等
- ・グループ活動…地域グループの検討会、実践活動。各グループでは、例として、大人の修学旅行と題したまち歩きイベントを実施、農産物や手作り雑貨を販売する「こしゃってマルシェ」の開催、学校給食発祥のまちの冊子を発行などが実践されている。マルシェについては、地元の高校生も参加するなど広がりが見られるほか、平成28年度は地域グループの取組から発展し、全体で学校給食をテーマとした書籍も作成している。

参考) 鶴岡市政策企画部資料
鶴岡市ホームページ

▶ 参考としたポイント

- ・地域別の活動と全体での活動を設定することによる、身近な地域とまち全体の課題共有が両立する仕組み。
- ・現役世代の若者の中で、一部メンバーを入れ替えながら、経験者が増えていく仕組み。
- ・行政と市民が共働で考え、活動する仕組み。
- ・アドバイザーの重要性(全体の方向性をゆるやかに導く、活動内容についての相談に乗る等)
- ・成果を急ぐのではなく、いかに継続していくかを考える姿勢。

「鶴岡まちづくり塾」新メンバー募集!

鶴岡市では、市民と行政の協働のまちづくりを推進するとともに、若者の発想とエネルギーを鶴岡のまちづくりに生かし、本市の将来を担う人材の育成と様々な分野で活躍する若者の交流・連携を図るため、市民と市職員からなる「鶴岡まちづくり塾」を組織し、まちづくりに関する検討、実践に取り組んでいます。

つきましては、このたび、第5期(平成29・30年度)のメンバーについて募集いたしますので、鶴岡市を元気にするために、一緒になって活動していただける方のご応募をお待ちしています。

- 活動の内容
メンバーがそれぞれのお住まいあるいは勤務する地域のグループに分かれて次のことを検討・実践します。
○各地域の資源・特性を生かしたまちづくりなどの具体的な取組み
○鶴岡市総合計画の3ヵ年実施計画で取り上げる市の施策についての提言など

この活動を通して、

- 鶴岡のこと、鶴岡のまちづくりに関して考えます
- 地域の様々な分野で活動している人たちと知り合うことができます
- 市内外の専門家や有識者からアドバイスが受けられます
- アイデア(活動の成果)がまちづくりに生かされます

- 応募方法等
 - 応募資格
 - ・鶴岡市に在住・在勤するおおむね20歳～40歳の方
 - ・月1回程度の会議への出席と、仕事や学業等と並行し自主的な調査等の活動が可能なる方
 - ・まちづくりに関心と熱意がある方
 - 活動期間
 - ・平成29年5月から平成31年3月まで ※報酬の支給はありません
 - 応募方法
 - ・裏面の応募申込書(市ホームページからもダウンロード可能)に所定の事項を記入し、鶴岡市役所政策企画課または地域庁舎総務企画課に持参、郵送又は電子メールで提出してください
 - 選考方法・選考結果の通知
 - ・受付終了後に書類選考を実施し、選考の結果を速速に本人あて通知します
 - 受付期間
 - ・平成29年4月3日(月)から4月21日(金)まで
 - ※受付期間終了後の途中加入については、個別にご相談下さい
- 申込み・問い合わせ先
鶴岡まちづくり塾事務局(市政策企画課内)
〒997-8601 鶴岡市馬場町9番25号
電話 0235-25-2111(内線524)
ファックス 0235-25-2990
電子メールアドレス seisaku@kaku@city.tsuruoka.lg.jp



② 行動についての支援体制(財政面以外)への橋渡し

アイデアなどから行動に移そうとする際に、どこに相談してよいかわからない、ノウハウがないなど様々な課題から、第一歩が踏み出せないこともある。こうした場面で、少しの技術的支援により、行動が起こされる事例を増やすことも重要である。

具体的には、行動を起こす際に、考えを事業化していく上での助言、協力してくれる関係機関の紹介、起業をしていく上でのノウハウやリスクを学べる研修等の情報提供など、プラ

ットフォームからの橋渡し機能が必要である。

③ 財政的支援と評価システムへの橋渡し

新しいアイデアが、より多くの行動に結びつくには、きっかけとなる初期の財政的な支援やまち全体の機運、モチベーションも重要である。例えば、既存の地域活動支援事業補助金の情報提供や、ビジネスコンテスト参加への支援など、プラットフォームから橋渡しができる機能を持つことも必要である。

さらには、交流の場からの発信により補助金等の審査基準に、地域資源を活かした活動や起業、ソーシャルビジネスなどを評価する視点が含まれることになれば、新たな価値観の創出やまちの魅力発信、さらには外から人の力を得ることにもつながる。そこから、地元企業や銀行の資金が新たな価値へ投資されるきっかけづくりにもつなげることで、より全市的な地域活性化になると考える。

事例4 小布施若者会議

全国から35歳以下の若者を長野県小布施町に集め、小布施や日本の課題を議論したり、地域ビジネスのアイデアを考案するもの。

《運営体制等》

小布施町で行っていた都市部学生のインターン事業の中で、町長と学生との会話から着想された。町の企画政策課に事務局が置かれ、行政は会場や予算の確保などを担当、コンセプトや内容の企画は、役場内に置かれた大学研究所の연구원などコアメンバーが担う。(平成24年度から実施)

《取組内容》

- ・当初は、3日間のイベントとして開催、小布施を知ってもらい提案することから始まる。
- ・若者会議でのアイデアからは、例えば「第二町民制度」や「かわいい」を入口に地方のコンサルティングを行うベンチャー企業等が生まれている。
- ・平成28年度は具体的に自分たちがやるとしたら何ができるかを考え、5つのプロジェクトを設定。1グループ10～15人を集めて事業を試作。(5名の一般公募のほか、各分野のフロントランナーを招待参加者として招聘)
- ・事業の審査員は、町長、リクルート、商工会、議長、観光協会、県教育長、地元住職など。
- ・平成29年4月以降、小布施町をフィールドとして具体的に社会実験を進め、町も財政面などの支援を行う予定。

▶ 参考としたポイント

- ・若者を惹きつけるきっかけとなる、まちのブランド力。
- ・小布施町をフィールドとして提供することで、若者の取組と同時に町自体も発信される仕組み。
- ・魅力ある若者が企画の中心となることで、優秀な若者を呼び込む仕組み。
- ・新しい取組にチャレンジさせる町の姿勢と支援する姿勢。
- ・議論で終わらず、段階的に参加者を絞り企業との連携を増やすなど、実践へつなげていく仕組み。

参考) ガバナンス 2016.3
小布施若者会議 ホームページ
事業構想 2014.3月号
小布施若者会議 5th 最終報告会



(3) プラットフォーム形成の留意点

(1)、(2) では、プラットフォームに必要な機能を整理したが、これらを可能とするためには、「多様性とゆるやかさの維持」と「場の継続」が重要である。ここでは、そのために留意が必要な構成メンバーや場の設定、交流の進め方などについてまとめた。

① 多様なメンバー構成

プラットフォームに参加するメンバーは、老若男女、異業種、広域的な人材となることが重要である。また、肩書きや組織はできる限り排除し、各自の専門性や意欲を活かすべく、個人的に自由に意見交換や情報共有ができる雰囲気づくりも必要である。

また、交流の場の周知方法についても、従来型の公募だけではなく、例えば、趣旨を理解したコアメンバーを設定し、人伝えでメンバーを増やしていくような方法も有効である。このことにより、批評をしたい人が集まる会ではなく、前向きに何か行動を起こしたい人を中心とする会となる。

一方で、行動につながりやすくするためには、会社員、自営業者、商工会議所職員などの現役世代や、大学や行政などの公的機関職員も含まれることも重要である。

② ゆるやかな形態

プラットフォームは、強制的ではなく、出入り自由で、意見を聞いているだけでもよい、ゆるやかな集まりであることが求められる。例えば、日時、場所のみを決め、都合が合う人が都合の合う時間から参加するというような形態が考えられる。このことにより、参加者は無理せずに参加できることから継続しやすく、現役世代も参加しやすくなる。

また、偶発性が生まれるためには、目的を設定しすぎない配慮も重要である。時には、話し合いたい課題や参加者からの話題提供により学び合うなども織り交ぜながら、雑談で終わる回があるような構成も必要である。

③ コーディネート機能

ゆるやかな交流は創造的発想に有効な仕組みである反面、批評から発展がなかったり、後ろ向きな話し合いとなる危険性も多分にある。こうしたことを避けるためには、コーディネーター的な役割が重要である。

ここでのコーディネーターとは、前向きな議論にしていく、何気ないアイデアを記録に残す、活動に向けての相談を受け関係機関へつなぐ、支援策を紹介するなどの役割を担うものである。

④ 推進体制（主に行政）

官民の垣根が曖昧であり、老若男女、職種を問わない交流であることから、運営する側の新しい価値観、意識共有も必須である。運営者で共通認識が持てる方策や、運用面での具体的な手法について、先進事例を参考にまとめていく必要がある。

また、推進方策をパーツごとに実施しようとする、従来型の取組で終わってしまう。推進方策は、あくまでパッケージであり、市としても地域資源を活かした地域活性化を人の力で実現し

ていくという、大きな方向性を持って取組むことが必要である。

⑤ その他

プラットフォームは、そこからすぐに成果を求めることは難しいが、ここで培われたネットワークやアイデアは地域活性化を担う将来に向けた人の力となり、継続していくことで具体的な取組につながるものである。このため、場所や内容に変化を加えるなど、単調にならない工夫をしながら、粘り強く続けていくことが必要である。

一方、取組が形骸化しないためには、交流の実績をきちんと記録として継承し、人が変化しても思いや内容が継続していくことが必要である。こうした記録は、成果が見えにくい事業に対する評価を地道に得ていくことにおいても重要である。

また、取組に向かう人の気持ちを維持していく上で、プラットフォームのような常にゆるやかにつながる場の存在は貴重である。そのような場となるためには、参加することが個人の人生にとっても付加価値となる、と感じられるプラットフォームとすることも重要だ。

事例5 やわらかネット、やわラボ（青森県弘前市）

【やわらかネット】

新幹線開業を機に、地域づくりの視点も含めた新しい観光を目指す「弘前感交劇場」を市全体で取組む中、関係者間のやわらかいネットワークが必要という考えから、ゆるやかに交流しながら、まちのあるもの探しを行う会を設定。様々な職種が参加し、テーマや取組内容によって、構成メンバーがゆるやかにつながり、実行できる人同士と一緒に観光コンテンツづくりなどを行った。

《運営体制等》

商工会議所と市が連携して実施。市内で様々な集まりがあったものを集約し、推進委員会と実務者会議（通称やわらかネット）を設置。（平成20年5月設置）

《取組内容》

- ・定期的に集まり、ゆるく交流しながら、観光という観点でまちのあるもの探しを行う。参加者は、商工会、市民活動団体、NPO、和尚さん、パーテングー協会、商店街振興組合、飲食業協会、ホテル組合、交通事業者など。
- ・アメーバのようにテーマや取組内容によって、構成メンバーがゆるやかにつながり、できる人が一緒に実行していく組織で、様々な観光コンテンツが自然に掘り起こされ、実現されていった。

【やわラボ】

やわらかネットの考えを活かして、社会連携というテーマで実施（平成25年9月設置）。日時と場所のみを設定し、テーマは基本的に設定しない、出入り自由な交流会を開催。雑談で終わる日もあるが、地域の課題解決、やりたい事業について意見や協力者を得るなど、交流の中で様々な効果が生まれつつある。

《運営体制等》

弘前市産業観光部長と弘前大学COC推進室の准教授が連携して実施。集まり自体は私的なもので、具体的な活動などについて、必要があれば大学、行政としてオフィシャルに動く。

《取組内容》

- ・参加者は、会社員、大学生、自治体職員、地域おこし協力隊、企業、大学病院職員など様々。また、広域（大まかには津軽地域）、異業種、複数大学（コンソーシアムの）という視点でもある。
- ・定期的に弘前大学を会場として開催、テーマは基本的にはなく、雑談で終わる日もある。不定期にテーマ設定や参加者からの話題提供もある。
- ・地域の課題解決、学生の社会勉強の場、自治体や地域おこし協力隊の情報共有、やりたい事業について意見や協力者を得るなど、交流の中で様々な効果を生んでいる。

参考) 弘前大学ホームページ

- ▶ 参考としたポイント
- ・意見を出す時点ではゆるいテーマ設定であるが、実行力のある仕組み。
 - ・今ある組織をどう元気にするか、その為にお互いの情報を知る必要があるという考え方。
 - ・ゆるやかな交流の中でのコーディネーター的役割（アイデアを聞き逃さない、前向きな話へ導く、手法などのアドバイスや関係者への橋渡し等）

地域教育プロジェクト 地(知)の拠点

社会人&学生の交流会 やわラボ
に参加してみませんか？

【地域教育プロジェクトとは？】
地域と関わる入門イベント。一日完結の半日型となっており、事前学習等の準備は不要です。今後、様々なタイプのイベントを企画する予定です。企画をしてみたい学生も募集しています。

【やわラボとは？】
市内在住の社会人&学生が**楽しい雰囲気**で楽しく話す場が「やわラボ」となっております。途中参加・途中退室OKで、申込み不要の集まりです。例えば10分だけの途中参加でも全然構いません。

【どのような話がされている？】
決まった議題はありません。一つの議題を参加者全員で話すわけでもありません。**小さなグループで色々な話しをするのが基本形**となっています。話し好きの方が集まっており、孤立することはまずありませんので、初参加の方でも安心して参加できます。グループ間の移動は自由です。グループの話を聞くことだけに専念するもアリとなっています。話すのは相手だけ、面白い話を聞きたいという方も是非。

【どのような社会人が参加？】
20代~50代が中心。職種は様々です。弘前市役所を中心とした市内市町村の行政職員、地元企業（食品、福祉、IT分野など）、メディア関係者（新聞記者やWebライター）、地元農家、県内の地域おこし協力隊、等々

【どのような学生が参加？】
学部学科、学年問わず参加があります。最近では他大学からの参加も、地域活動や就職活動で悩んでいる学生、人脈を広げたい学生、気分転換にフラッと来た学生など、いろんなタイプの学生が集まります。

写真：過去のやわラボの様子

【参加対象者】
県内在住の社会人&学生

【開催日】
4月11日(火) 18時~20時
場所：弘前大学COC推進室(弘大8階/甲田ホールC)

【問合せ先】
弘前大学COC推進室(野口) nosuchi@hiroaki-u.ac.jp
0172-39-3864

新入生も大歓迎!!

途中参加OK!

事前申込み不要!

出所) 弘前大学ホームページ

3-3 展開方法

3-2 で提示した方策を効果的かつ持続可能な状態で推進するためには、段階的な展開が望ましい。本研究では、その段階的な展開の前段として、地域資源に着目する意義や地域資源情報の整理を行った。

今後は、「循環」の入り口となる「学び」の材料として、地域資源情報をより分かりやすくまとめることや、それらを活用して学びを軸にしたプラットフォームを段階的に広げていく。

その後は、学びを軸にしたプラットフォームに加えて、行動につなげるプラットフォームを形成しながら、行動を後押しする実践的な支援制度等への橋渡しを行っていくことで、地域資源を活かした「学習」「思考」「行動」の「循環」が「交流」を原動力として起こり続けるようにする。

※ 事業展開および推進体制の全体像については、図表 3-4 を参照。

【第1段階】「学びのテキスト」の作成を開始（1年目～）

第1段階では、本研究での取りまとめを基に、「学びのテキスト」など地域資源情報をより分かりやすくまとめていく。

この際、実施可能な分野ごとに地域資源情報を取りまとめることとし、そのために、市内有識者など人的ネットワークの構築を同時に行う。

なお、地域を学びの材料とする視点では、アクティブラーニング、総合学習などに取組む上越教育大学の役割とも重なる部分が大きく、地域と大学が共同で取組むものとして域学連携の枠組みの中で行うことが効果的である。これらの取組は、「地域資源情報の蓄積と継続」につながるものである。

【第2段階】「学びを軸としたプラットフォーム」の提供を開始（2、3年目）

第2段階のテキストについて、とりまとめられた分野から随時活用して、「学びを軸としたプラットフォーム」の提供を開始する。

プラットフォームの場としては、公民館講座等の活用、大学等の協力を得た新たな場、広域連携の交流会の活用、職員勉強会の活用等で設定する。これらの取組は、「入口となる学びの提供」につながるものである。

【第3段階】「行動につなげるプラットフォーム」の提供（4年目～）

第2段階の学びを軸としたプラットフォームに、オプション的に「行動につなげるプラットフォーム」を提供する。

具体的には、グループで特定テーマについて考え、議論し、考えを整理していく仕組みを追加する。これらは、系統的な学びの提供につながるものである。

これに加えて、まちづくり全体についての政策形成を行う場を設定し、主に学びを軸としたプラットフォームから人材を募る。これは、官民協働政策形成の場の提供となる。

【第4段階】行動を後押しする支援制度等への橋渡し（5年目～）

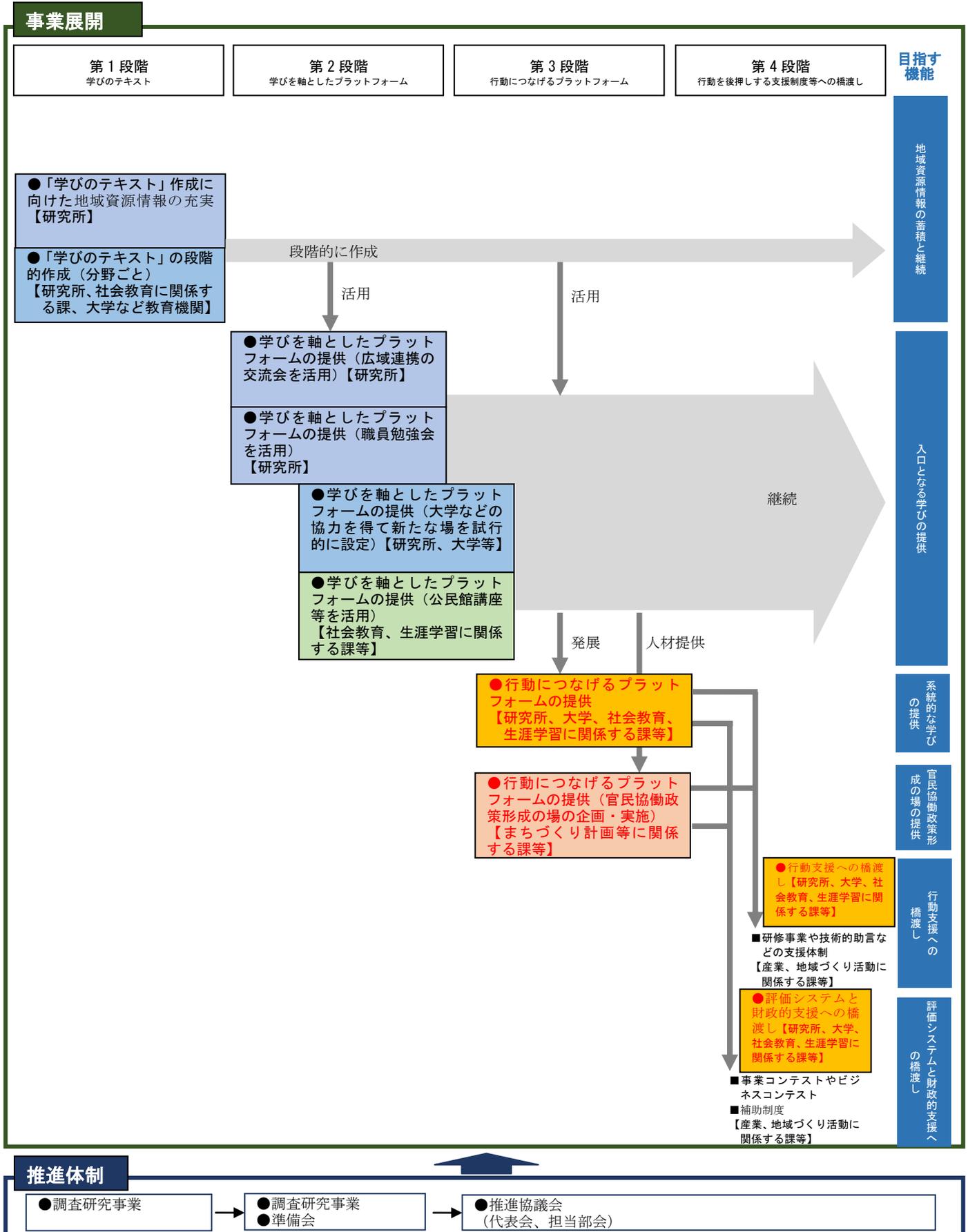
第3段階で行動への機運が高まることと並行して、行動を後押しするため、実践的な支援制度等への橋渡しを行う。

まず、まちづくり活動や起業を行う上でのノウハウやリスクを学ぶことができる研修会などの情報提供や支援団体等へのつなぎなどを行う。これは、行動支援への橋渡しとなる。

また、地域活動や起業に対する補助金、事業コンテストやビジネスコンテスト等の情報提供や参加に向けた支援を行う。これは、評価システムと財政的支援への橋渡しとなる。

図表 3-4 事業展開および推進体制の全体像

※実際に事業化する際は、各要素を複数組み合わせることも考えられる。【 】は取組の中心となる機関等。



○参考文献（第3章）

- ・シビックプライド研究会「シビックプライド」、宣伝会議、2008
- ・シビックプライド研究会「シビックプライド2」、宣伝会議、2015
- ・一般社団法人アジア太平洋研究所「水都大阪のシビックプライド-市民が響く都市政策のかたち」2012
- ・経済産業省四国経済産業局「観光効果を活用した地域住民の地域に対する愛着と誇りと自負（シビックプライド）の醸成事業 成果報告書」、平成22年度地域新成長産業創出促進事業、2011
- ・紫牟田伸子「平成22年度シビックプライド講座開催事業業務報告書」、株式会社日本デザインセンター、2011
- ・飯盛義徳「地域づくりのプラットフォーム」、学芸出版社、2015
- ・香坂玲「農林漁業の産地ブランド戦略」、ぎょうせい、2015
- ・博報堂ブランドコンサルティング「ブランドマーケティング」、日本能率協会マネジメントセンター、2000
- ・「特集 まちなかキャンパスが創る学び」、月刊公民館第701号、全国公民館連合会、2015
- ・結城登美雄「地元学からの出発」、農山漁村文化協会、2009
- ・下平尾勲「地元学のすすめ」、新評論、2006
- ・吉本哲郎「地元学をはじめよう」、岩波ジュニア新書、2008
- ・総務省「人材力活性化研究会資料」、2010, 2011, 2012
- ・内閣府「地域の人材形成と地域再生に関する調査研究 資料」、2007
- ・名古屋商科大学ホームページ「アクティブラーニングとは」<http://www.nucba.ac.jp/active-learning/>
- ・まちなかキャンパス長岡ホームページ <http://www.machicam.jp/>
- ・長岡大学生涯学習センター「生涯学習研究年報」第5号（通巻第14号）
- ・シブヤ大学ホームページ <http://www.shibuya-univ.net/>
- ・原宿新聞 web 版、2010.1.7 <http://www.harajukushinbun.jp/special/104/index.html>
- ・文部科学省ホームページ（特定非営利法人シブヤ大学）
http://www.mext.go.jp/a_menu/ikusei/npo/npo-vol1/1316203.htm
- ・一般社団法人電源地域振興センター「電気のふるさと～電源地域ニュース～vol.41」、2008
- ・「小布施若者会議で未来の地方創生モデルを創出ー長野県小布施町」、月刊ガバナンス、2016.5
- ・大宮透「小布施若者会議 交流が産んだイノベーション創出都市」、月刊事業構想、2016.3月号
- ・小布施若者会議ホームページ <http://obuse-conference.jp/#news>

第4章 今後の課題

第4章 今後の課題

(1) 地域資源情報の強化に向けて

- ・本調査研究では、政策等を考える上での一助となることを目的として、地域資源情報についての取りまとめを行ったが、更なる文献調査等が必要であることから掲載を見送ったものなど、全体を網羅することはできておらず、今後も充実が必要である。また、この取りまとめを基に、地域資源情報を随時更新していくことも必要である。
- ・上越市の魅力は市内の地域資源だけで語れるものではなく、その周辺地域を含めた資源の豊かさによるともいえる。本研究では、基本的に上越市内に存在する地域資源を対象としたが、上越市の本質的な魅力を語ろうとするならば、広域的視点に基づく調査は不可欠と考えられる。
- ・これらの地域資源情報の充実や更新作業を持続可能なものとするためには、地元有識者等による人的ネットワークの形成とともに、情報を蓄積する仕組みの構築も必要である。
- ・地域資源情報を活かした地域づくりを推進していくためには、より多くの人々が手にとりやすく、理解しやすい地域資源情報となるよう、デザインやビジュアルの工夫が必要である。

(2) プラットフォームの実現に向けて

- ・上越市のみならず近隣地域を含めた広域的なプラットフォームとしては、当研究所が平成27年度から開催する「信越県境地域づくり交流会」がある。これについては、異業種及び広域による連携効果によって成立している側面が大きい。
一方、上越市内での設置を実際に進める際には、市内の関係団体や行政の関係各課との連携を図る中で、本研究において提示したモデルを基本に検討を進めながらも、当市独自の形態を作り上げていく必要がある。

參考資料

平成 28 年度 まちづくり職員トーク
「上越市の地域資源を学ぶ～雪国文化の視点から」
(実施記録)

1 目的

当研究所では、今年度、「地域資源を活かしたシビックプライドの醸成に関する調査研究」をテーマとして、地域の魅力向上に向けて、政策形成、愛着・誇りの醸成、情報発信などを行う際に必要な地域資源情報の整理と、それらが地域づくりに結びつくための仕組みを検討する。なお、地域資源情報の整理に当たっては、参考文献のほか、地元有識者等へのヒアリングにより情報収集を行うこととしている。

こうした調査研究の一環で得た地域資源情報や有識者等のネットワークは、市職員にとっても有益な情報であるため、市職員を対象とした地域資源を学ぶ機会として庁内勉強会を開催する。

2 年間テーマ

『上越市の地域資源に学ぶ～雪国文化の視点から～』

上絵市（およびその周辺地域）における雪の特性や雪をもたらす地形、気候とともに、それらが影響を与えた自然環境、食文化、景観、芸術文化等について、それらの特異性や関係性とともに学ぶ。

3 基本方針

《プログラム作成上の留意点》

■特異性とその要因に着目

※各地域資源の詳細な知識よりも、その特異性、要因、他の地域資源との関係性を重視する。

■総合的（分野横断的）視点

■中長期的視点（過去・現在・未来）

■広域的視点（近隣、日本、世界）

- ・上越市の主観のみならず、周辺地域との関係性、さらには国内、世界における位置付けが客観的にわかるようにする。
- ・近隣地域の取組に学び、当市の雪国文化を振り返って比較検討したり、近隣地域との連携を考えられるようにする。

《獲得目標》

上越市に愛着と誇りを持ち、当市の特徴を自ら語れること

地域づくりにおいて地域資源を学ぶことの重要性を再認識すること

地域資源からの学びを地域づくりに活かす手法（着眼点）を習得すること



○庁内勉強会の様子



話題提供



グループディスカッション



質疑応答・意見交換

○プログラム構成および実績

目的	回	日時	内容	参加人数
【導入編】 ○上越市の雪を中心とする気候の特徴や、それに関連する位置、地質、地形上の特徴について学ぶ	1	平成 28 年 8 月 4 日 (木)	○地勢 「高田平野の生い立ち～雪国文化の視点から」 糸魚川市フォッサマグナミュージアム館長補佐 竹之内 耕 氏	33
【特別編】 ○近隣地域における先行事例（雪国文化を学び、活用する取組）について学ぶ	2	平成 28 年 8 月 10 日 (水)	○近隣地域の先進事例 「雪国文化の魅力と可能性～潜在資源の掘り起しと活用」 津南町苗場山麓ジオパーク推進室長 佐藤 雅一 氏 「雪国文化の魅力と可能性～観光の視点から」 雪国観光圏ブランドマネージャー フジノ ケン 氏	39
【テーマ別学習編】 ○雪によってもたらされた上越市の特徴的な地域資源（その特異性と形成要因）について学ぶ （テーマによっては、地域資源を活用した取組についても学習）	3	平成 28 年 11 月 15 日 (火)	○気候（雪、気温 等） 「上越市の気候」 元 中央農業総合研究センター北陸研究センター気象資源研究室長 横山 宏太郎 氏 「最近の雪害と上越市での雪害対策」 防災技術研究所 雪氷防災研究センター長 上石 勲 氏	27
	4	平成 28 年 11 月 21 日 (月)	○産業（水、エネルギー産業、農業、工業 等） 「上越の産業を育てた水資源～水資源開発と合理的利用の歩み」 元 県立直江津高等学校長 西山 耕一 氏	30
	5	平成 28 年 12 月 13 日 (火)	○食（保存、加工食品 等） 「発酵のまち上越で域学連携を考える」 上越教育大学教授 光永 伸一郎 氏	31
	6	平成 29 年 1 月 27 日 (金)	○建築・土木（雁木、町家 等） 「上越市における雪国ならではの景観を形成する建築物等の特徴について」 新潟大学工学部建築学科准教授 黒野 弘靖 氏	32
	7	平成 29 年 2 月 22 日 (水)	○芸術・文化等（小正月行事、高田瞽女、小林古径等） 「雪国文化ー私たちの誇り」 上越市総合博物館資料係長 花岡 公貴 氏	20

※開催時間は、いずれも 18 : 15～20 : 15

地域資源を活かしたシビックプライド
の醸成に関する調査研究
報告書

2018（平成30）年3月発行

編集・発行

上越市企画政策部
上越市創造行政研究所

〒943-8601 新潟県上越市木田 1-1-3

TEL (025) 526-5111

FAX (025) 526-6184

E-mail: souzou@city.joetsu.lg.jp

<http://www.city.joetsu.niigata.jp/site/souzou-gyosei/>